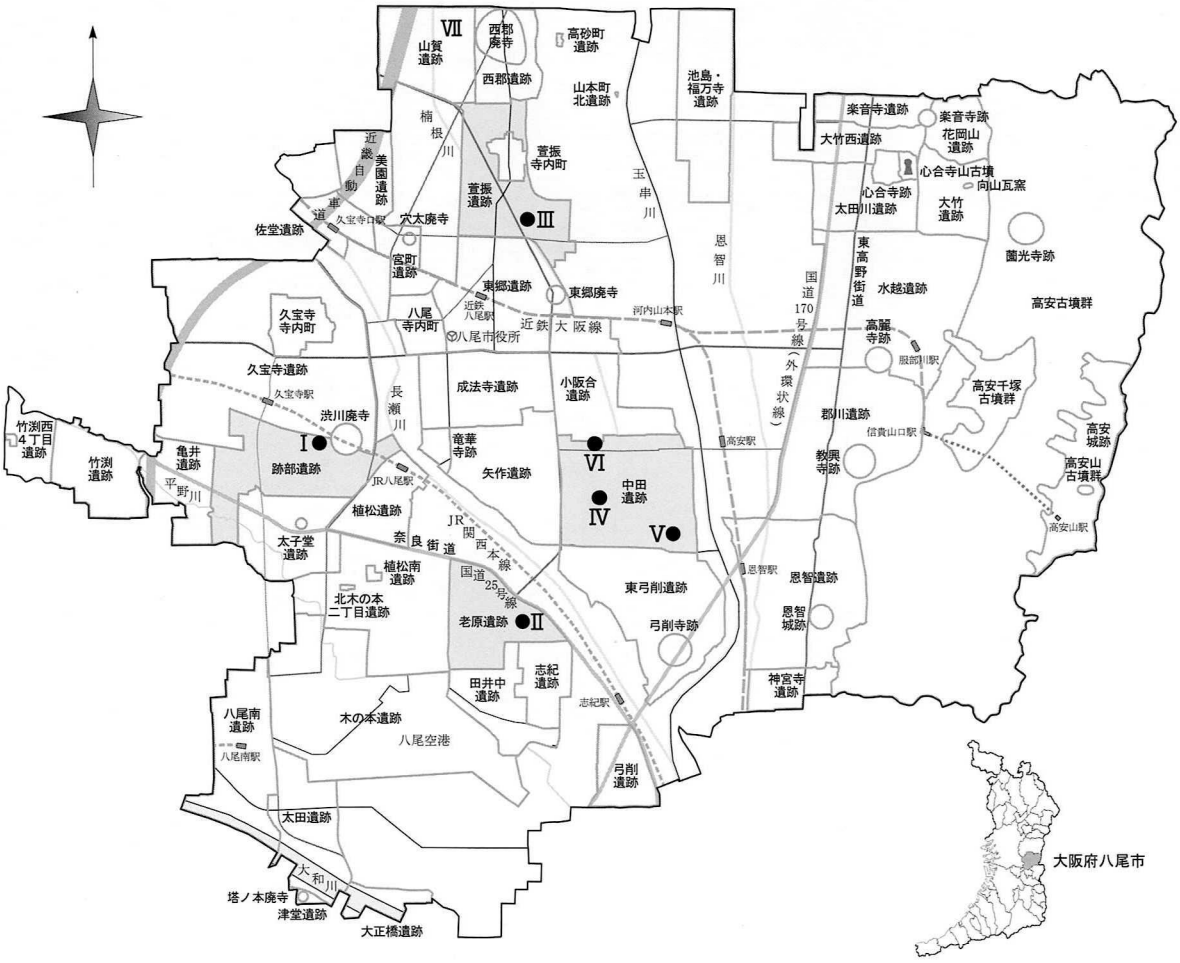
公益財団法人八尾市文化財調査研究会報告144

Ⅰ 跡部遺跡（第42次調査）
Ⅱ 老原遺跡（第14次調査）
Ⅲ 萱振遺跡（第29次調査）
Ⅳ 中田遺跡（第52次調査）
Ⅴ 中田遺跡（第53次調査）
Ⅵ 中田遺跡（第54次調査）

２０１４年

公益財団法人八尾市文化財調査研究会

Ⅰ 跡部遺跡（第42次調査）
Ⅱ 老原遺跡（第14次調査）
Ⅲ 萱振遺跡（第29次調査）
Ⅳ 中田遺跡（第52次調査）
Ⅴ 中田遺跡（第53次調査）
Ⅵ 中田遺跡（第54次調査）



２０１４年

公益財団法人八尾市文化財調査研究会

はしがき

八尾市は大阪府の東部に位置し、旧大和川が形成した河内平野の中心部にあたります。八尾市は古くから人々の生活の場として栄えていた地域であり、現在でもそれらの先人が残した貴重な文化遺産が数多く存在しております。

近年、都市開発が進み各種土木工事等が増加するなか、これらの埋蔵文化財を破壊から守ること、また記録保存し後世に伝承することが我々の責務であると認識する次第であります。

本書は、平成23～25年度に八尾市内で行った民間開発事業に伴う調査（４遺跡、６件）の報告をまとめたものであります。中田遺跡で実施した調査では、弥生時代後期の土器棺墓や、古墳時代後期の古墳周溝と考えられる遺構が検出されております。

本書が地域史、ひいては日本史解明の一助になれば幸いに存じます。

最後になりましたが、多くの関係諸機関および地元の皆様方に、多大な御協力をいただきましたことを心から厚く御礼申し上げます。

平成26年３月

公益財団法人八尾市文化財調査研究会
理事長　西　浦　昭　夫

例　　言

1．本書は、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が平成23～25年度に実施した民間開発事業に伴う発掘調査の成果報告を収録したものである。
1．本書作成の業務は、各現地調査終了後に着手し、平成26年３月をもって終了した。
1．本書に収録した報告は，下記の目次のとおりである。
1．本書の執筆・構成・編集は当調査研究会　坪田真一が行った。
1．本書掲載の地図は，大阪府八尾市役所発行の2,500分の１(平成８年７月発行)・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布地図』(平成24年度版)をもとに作成した。
1．本書で用いた標高の基準は東京湾標準潮位(T.P.)である.
1．本書で用いた方位は座標北(国土座標第Ⅵ系〔日本測地系〕) を示している。
1．遺構名は下記の略号で示した。
　土坑－ＳＫ　溝－ＳＤ　ピット－ＳＰ　落ち込み－ＳＯ　土器集積－ＳＸ　自然河川－ＮＲ
1．遺物実測図の断面表示は、須恵器が黒、その他を白とした。
1．土色については『新版標準土色帖』1997年後期版　農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修を使用した。
1．各調査に際しては、写真・カラースライド・実測図を、後世への記録として多数作成した。
　　各方面での幅広い活用を希望する。

目　　次

はしがき
序
Ⅰ　跡部遺跡　第42次調査(ＡＴ2011－42)……1
Ⅱ　老原遺跡　第14次調査(ＯＨ2012－14)……13
Ⅲ　萱振遺跡　第29次調査(ＫＦ2013－29)……21
Ⅳ　中田遺跡　第52次調査(ＮＴ2011－52)……31
Ⅴ　中田遺跡　第53次調査(ＮＴ2011－53)……47
Ⅵ　中田遺跡　第54次調査(ＮＴ2012－54)……57
報告書抄録

Ⅰ　跡部遺跡第42次調査（ＡＴ2011－42）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市春日町１丁目51－１、51－２の各一部で実施した共同住宅建設に伴う発掘調査報告書である。

1．本書で報告する跡部遺跡第42次調査（ＡＴ2011－42）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づくもので、申請者と財団法人八尾市文化財調査研究会の間で、八尾市教育委員会を立会者として締結した契約により、財団法人八尾市文化財調査研究会が申請者から委託を受けて実施したものである。

1．調査は当調査研究会　坪田真一が担当した。

1．現地調査は、平成24年２月17日～２月24日（実働５日）に実施した。調査面積は約62.5㎡である。

1．現地調査には飯塚直世・市森千恵子・伊藤静江・芝﨑和美が参加した。

1．内業整理は下記が行い、現地調査終了後に着手して平成26年３月をもって終了した。

　遺物復元・実測・トレース－山内千恵子

1．本書の執筆・編集は坪田が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……1

2．調査概要……2

　1）調査の方法と経過……2

　2）基本層序……2

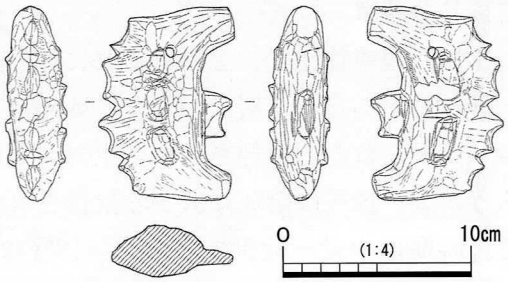
　3）検出遺構と出土遺物……2

3．まとめ……7

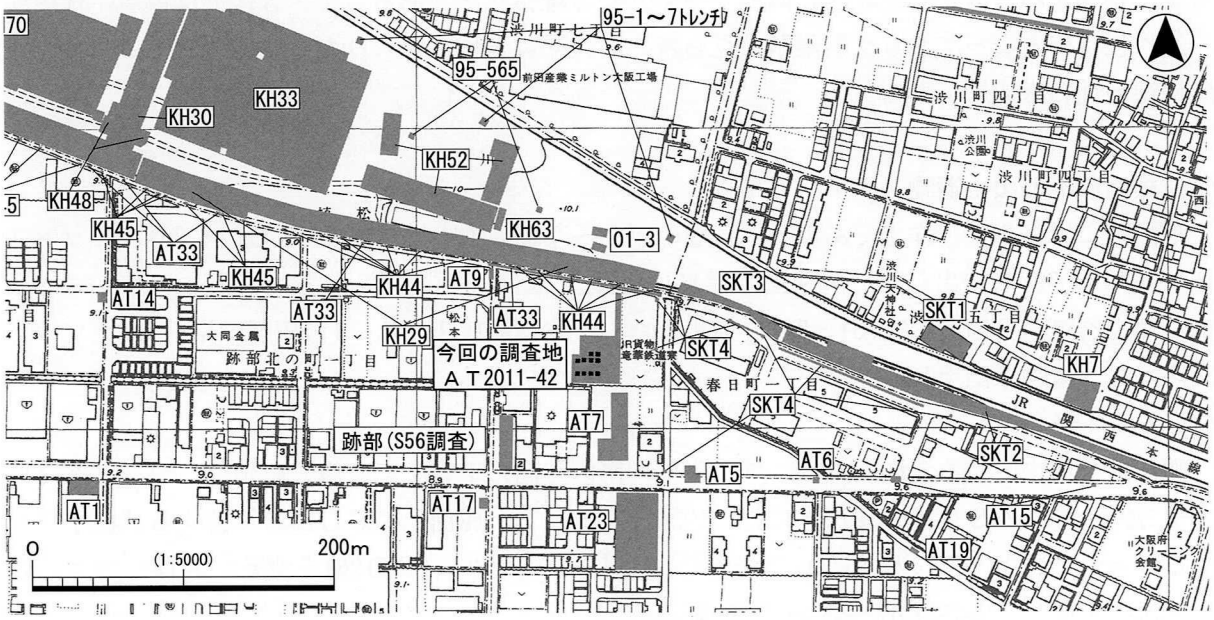
Ⅰ　跡部遺跡第42次調査（ＡＴ2011－42）

１．はじめに

跡部遺跡は八尾市西部に所在する弥生時代前期～近世に至る複合遺跡である。現在の行政区画では、北亀井町３丁目の一部、跡部本町１～４丁目、跡部北の町１～３丁目、跡部南の町１・２丁目、太子堂１・２丁目、春日町１～４丁目、東太子１丁目、安中町３丁目の一部、植松町４丁目の一部にわたる東西約1.4km、南北0.5～1.0kmがその範囲とされている。地理的には、河内平野南部の北寄りに位置し、旧大和川の主流であった長瀬川左岸の沖積地上に位置する。当遺跡の北側には久宝寺遺跡・渋川廃寺、東側に植松遺跡、南側に太子堂遺跡、西側に亀井遺跡が隣接する。当遺跡は、昭和53年に春日町一丁目で行われた旧国鉄職員寮建設の際、弥生土器や鎌倉時代の瓦が出土したことにより、その存在が確認された。以後、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会によって多次にわたる発掘調査が実施されている。今回の調査地は遺跡範囲中央の北端にあたり、北側の久宝寺遺跡に隣接している他、東側には中河内最古の古代寺院である渋川廃寺が近接する。周辺で実施した発掘調査としては、北側道路部分で久宝寺遺跡(KH)第29次調査、跡部遺跡(AT)第33次、南側で跡部第１・５・７・23次調査、東側で渋川廃寺(SKT)第１・２次調査等がある。主な調査成果としては久宝寺(KH29)の弥生時代後期の大量の土器集積、奈良時代前半の丸太分割刳抜き井戸、跡部(AT33)の古墳時代中期の溝から出土した滑石製子持ち勾玉、渋川廃寺(SKT2)の塔基壇等が挙げられる。また南側の調査地では、跡部(AT23)で弥生時代後期～古墳時代前期の集落遺構が検出されている他、跡部(AT5)では弥生時代後期末以前に埋納された銅鐸が出土している。



子持ち勾玉（跡部遺跡第33次調査）



第１図　調査地位置図

2．調査概要

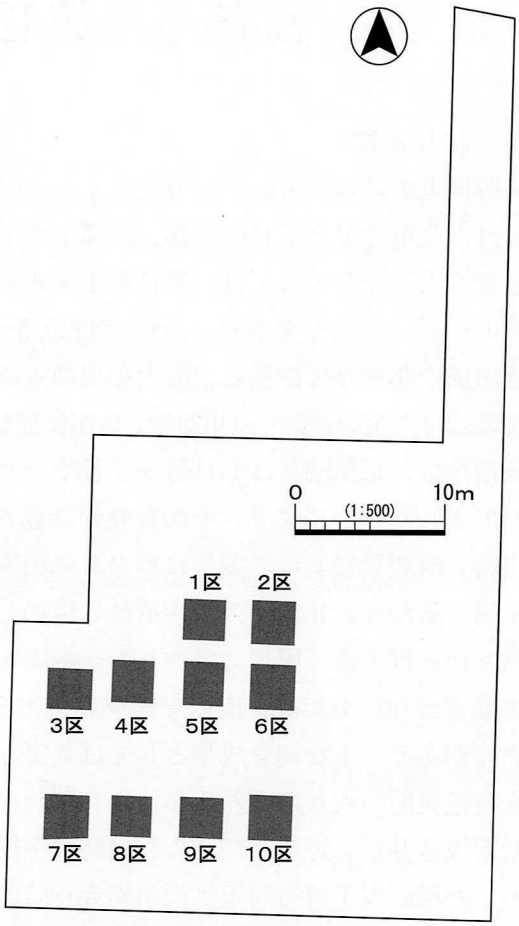
1）調査の方法と経過

今回の調査は、平成24年１月19日に実施した遺構確認調査〈跡部遺跡(2011-339)〉の結果を受けて実施した共同住宅建設に伴う調査で、当研究会が跡部遺跡内で行った第42次調査(ＡＴ2011－42)である。

調査区は建物基礎部分の10箇所(北西から１～10区)で、各調査区平面形は約2.5m四方の正方形を呈し、総面積は約62.5㎡を測る。

調査は南西部から実施した。調査にあたっては、現地表(約T.P.+8.8～8.9m)下約0.7mまでを機械掘削し、以下を人力掘削により調査を行った。

調査で使用した標高の基準は、調査地北東部に位置する八尾市街区三角点〈2014A：T.P.+9.747m〉である。



第2図　調査区位置図

2）基本層序

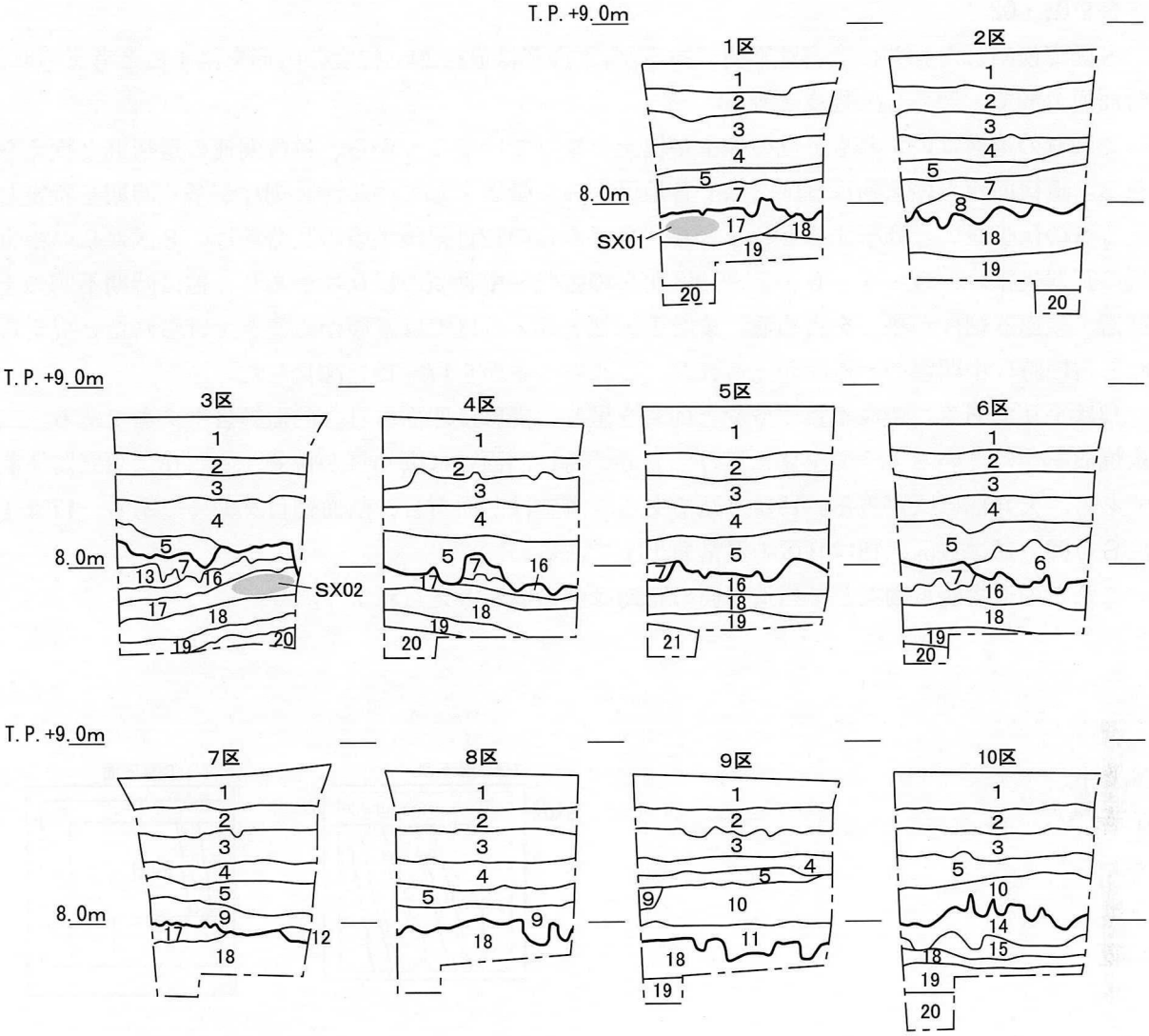
１層は現耕作土で、２層はこれに伴う近年の整地層(床土)である。３層は旧耕土。４層は10区を除く全域で見られた。撹拌された作土で時期は近世であろう。５～12層は全域に広がる撹拌された作土である。時期は中世～近世であろう。13層は３区、14・15層は10区で見られた水成層である。16層は３～６区で見られた土壌化層である。作土の可能性もある。17層は１・３・４・７区で見られた土壌化層で、18層をベースとして北西に向ってやや下がる堆積状況である。１・３区では古墳時代中期の遺物包含層となっており土器集積が見られた。18層は全域で見られた土壌化層である。19～21層は湿地性の水成層である。

3）検出遺構と出土遺物

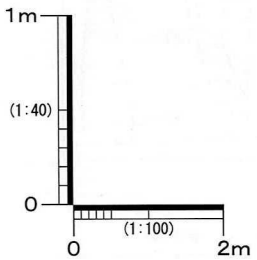
地区毎に異なるが、作土である５～12層の層中～下面において溝26条(ＳＤ01～26)、ピット２個(ＳＰ01・02)を検出した。遺構面の標高はT.P.+7.9～8.1mを測る。また17層中のT.P.+7.9m前後で土器集積２箇所(ＳＸ01・02)を検出した。なお17層は１・３・４・７区で見られたが、４・７区からは遺物は出土していない。

ＳＤ01～26

調査地全域に広がる溝群である。概ね北東－南西方向に平行して直線的に延びるが、８区ではやや方向の異なるＳＤ17・18が見られ、10区ではＳＤ25が屈曲してＳＤ26に接続する状況が見られる。規模は幅25～50cm程度のものが多く、最大で1.4m以上(ＳＤ08)を測る。断面形状は逆台形～皿状を成し、深さは10～25cm程度を測る。



1．2.5Y5/2暗灰黄色シルト～極細粒砂　現耕作土
2．10YR6/6明黄褐色極細粒砂～極粗粒砂　床土(整地層)
3．7.5GY4/1暗緑灰色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土　Fe斑多　旧耕土
4．2.5Y6/2灰黄色極細粒砂～粗粒砂混シルト　Fe斑　撹拌作土
5．10YR6/1褐灰色極細粒砂～中粒砂混シルト　Fe斑　Mn斑　撹拌作土
6．2.5Y6/2灰黄色細粒砂～粗粒砂少混粘土質シルト　Fe斑　撹拌作土
7．10YR6/2灰黄褐色粘土質シルト～極細粒砂　Fe斑　ブロック状作土
8．10YR5/2灰黄褐色細粒砂～粗粒砂多混シルト　Fe斑　撹拌作土
9．2.5Y6/1黄灰色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト　Fe斑　撹拌作土
10．10YR5/2灰黄褐色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト　Mn斑極多　撹拌作土
11．10YR5/1褐灰色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト　Fe斑　Mn斑多
12．2.5Y6/2灰黄色極細粒砂混シルト質粘土　Fe斑　ブロック状
13．10YR6/1褐灰色シルト～極細粒砂　Fe斑　一部ラミナ　水成層
14．7.5YR4/1褐灰色極細粒砂～極粗粒砂　洪水砂
15．5Y6/1灰色シルト～極細粒砂　洪水砂
16．10YR6/1褐灰色シルト混シルト質粘土　Fe斑　土壌化層
17．10YR5/1褐灰色シルト質粘土　Mn斑　土壌化層
18．10YR4/1褐灰色シルト質粘土　Mn斑多　土壌化層
19．10YR6/4にぶい黄橙色シルト質粘土　Fe斑　水成層
20．10G4/1暗緑灰色シルト質粘土　水成層
21．2.5Y6/3にぶい黄色シルト　水成層



第３図　北壁断面図

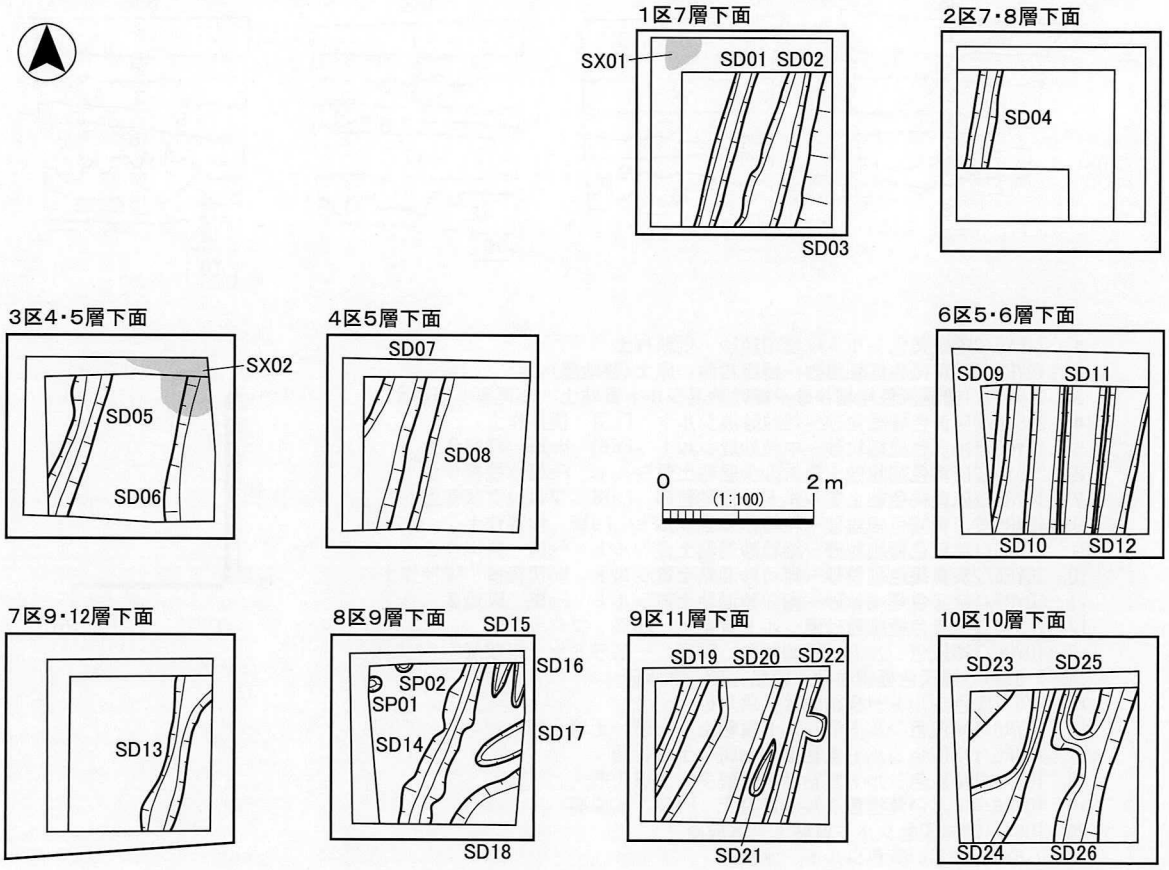
ＳＰ01・02

８区で検出した。共に全容は不明であるが、平面形は直径20cm程度の円形を呈すると考えられ、断面逆台形で、深さ５cm程度を測る。

これらの遺構はいずれも上位の作土が埋土となっていることから、耕作関連の遺構群と捉えられる。遺構面からの遺物は５区を除く各地区から少量出土しているが、細片が多く時期を特定しえるものは少ない。列挙すると、３・６・９区からの12世紀後半頃の瓦器椀片、８区からの中世頃の瓦器甕細片、３・４・６・７～10区からの古代～中世頃の屋瓦片があり、他は時期不明の土師器・須恵器細片が多くを占める。また１・２・３・６区では下層から巻き上げられたと捉えられる古墳時代中期頃の土器片が見られた。これらの中から17～19を図化した。

17は平瓦である。焼成不良でやや土師質を呈し、調整は凹面布目、凸面縄目タタキである。二次焼成を受けているようで全体に煤けており、特に凹面には厚く煤が付着する。18は須恵器杯蓋である。天井部に灰が被る。19は平瓦である。調整は凹面布目、凸面縄目タタキである。17は４区ＳＤ08、18は６区、19は９区の遺構面出土である。

これらの遺物から勘案して当遺構面の時期は中世頃と考えられよう。



第４図　平面図

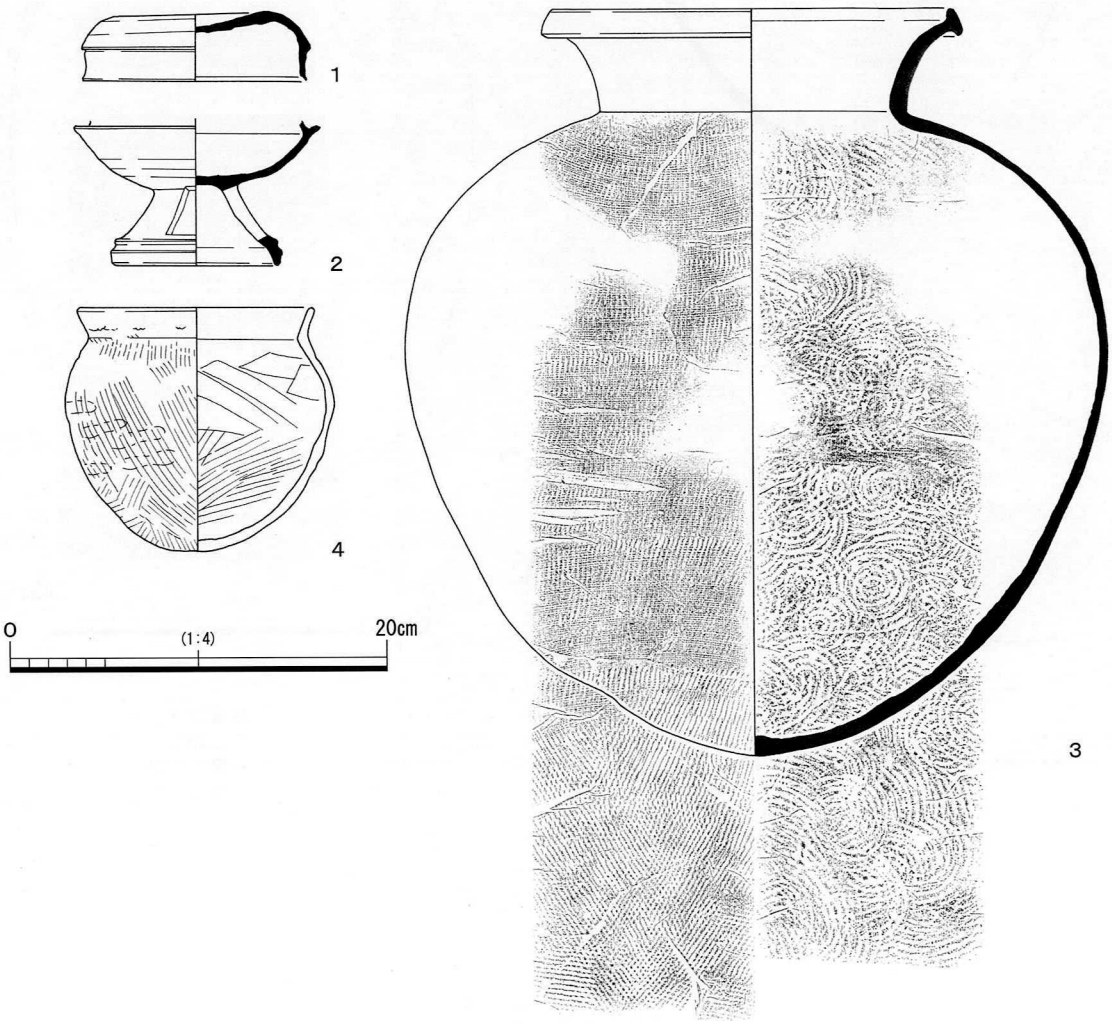
ＳＸ01

１区北西角の17層中で検出した。検出部分は約50cm四方の範囲で、北は調査区外に続く。土師器甕、須恵器杯蓋・高杯・甕等が出土しており、１～４を図化した。

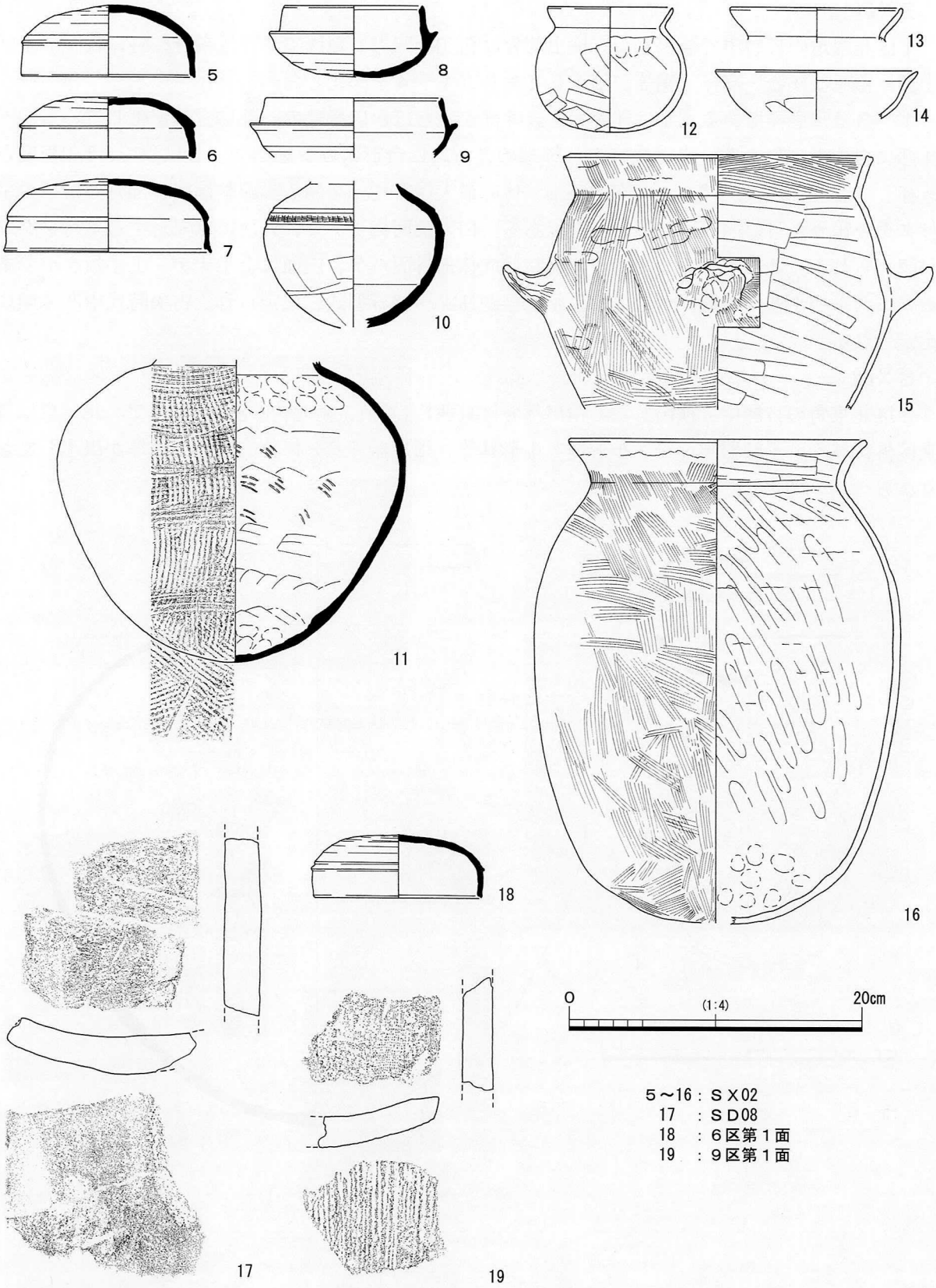
１～３は須恵器である。１は杯蓋で、天井部が窪むほか口縁部の一部に歪みが生じている。天井部に自然釉が掛かる。２は高杯で、脚部の３方向に台形スカシを穿つ。３は甕で、1/2程度が遺存しており、口径22.2cm・器高39.5cm・体部最大径37.2cmを測る。調整は底体部外面縦位の平行タタキ後カキ目、内面同心円タタキである。口頸部回転ナデで、外面には先行する平行タタキが認められる。４は土師器甕である。調整は底体部外面ハケ、内面は上半ナデ、下半板ナデである。これらの土器の時期については、須恵器がTK23～TK47型式に比定され、古墳時代中期末頃に比定される。

ＳＸ02

３区北東角の17層中で検出した。検出部分は東西約1.0m、南北約0.8mの範囲で、北・東は調査区外に続く。土師器甕・鍋・小形壺・小形鉢等、須恵器杯身・杯蓋・高杯・壺等が出土しており、５～16を図化した。



第５図　ＳＸ01出土遺物



5～16：ＳＸ02
17　：ＳＤ08
18　：６区第１面
19　：９区第１面

第６図　出土遺物

５～11は須恵器で、５～７が杯蓋、８・９が杯身、10が瑳あるいは壺、11は甕である。６は完形品で、口径11.6cm・器高4.0cmを測る。８の受部には杯蓋の口縁端部が一部溶着している。10は肩部に刺突文を巡らせるもので、肩部や内底面に自然釉が掛かる。11の調整は外面平行タタキ後カキ目、内面は同心円タタキをナデ消している。

12～16は土師器である。12・13は小形の壺である。12の底体部調整は、外面上半ナデ、下半ヘラケズリ、内面ナデである。14は鉢である。15は把手付甕である。調整は外面ハケ、内面ナデで、外面のハケは把手にも及んでいる。16は長胴甕で、調整は外面ハケ、内面ナデである。

これらの土器の時期については、ＳＸ01と同じく古墳時代中期末頃に比定される。

３．まとめ

今回の調査では古墳時代中期末の遺物包含層内で土器集積を検出したほか、全域で中世頃の耕作関連遺構を検出した。遺物量はコンテナ１箱である。

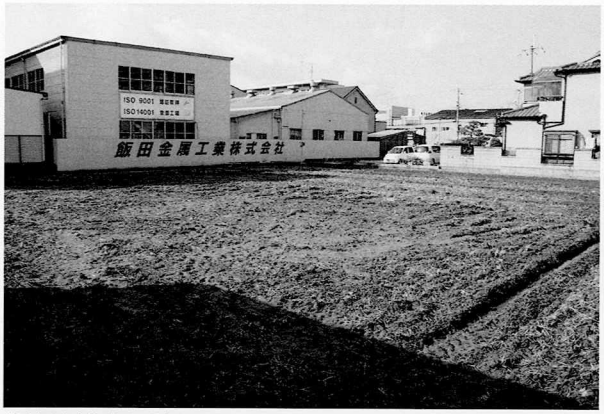
１・３区で検出した古墳時代中期遺物包含層（土器集積）は、北部の久宝寺第29次調査・跡部第33次調査等で確認されている該期の集落域に関連すると考えられる。今回の調査地では北西部で遺物包含層が見られたことから、この辺りが集落域の縁辺にあたる可能性がある。

中世以降は全域が生産域となっているが、作土中から少量ではあるが古代～中世頃に比定される屋瓦が出土しており、東方に位置する渋川廃寺に関連する可能性も考えられよう。

参考文献

・高木真光1983「第６章　跡部遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報　1980・1981年度（財）八尾市文化財調査研究会報告２』財団法人八尾市文化財調査研究会
・原田昌則1993「Ⅰ　跡部遺跡第７次調査（ＡＴ92－７）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告　八尾市文化財調査研究会報告39』財団法人八尾市文化財調査研究会
・成海佳子他1991『跡部遺跡発掘調査報告書ｚ　－大阪府八尾市春日町1丁目出土銅鐸－（財）八尾市文化財調査研究会報告31』財団法人八尾市文化財調査研究会
・成海佳子2003「Ⅰ　跡部遺跡第33次調査（ＡＴ2002－33）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告75』財団法人八尾市文化財調査研究会
・原田昌則2004「Ⅱ　跡部遺跡第23次調査（ＡＴ96－23）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告81』財団法人八尾市文化財調査研究会
・原田昌則2003『久宝寺遺跡第29次発掘調査報告書　－大阪竜華都市拠点地区竜華東西線４工区に伴う－　財団法人八尾市文化財調査研究会報告74』財団法人八尾市文化財調査研究会
・坪田真一・金親満夫2004『渋川廃寺　第２次調査・第３次調査　財団法人八尾市文化財調査研究会報告79』財団法人八尾市文化財調査研究会

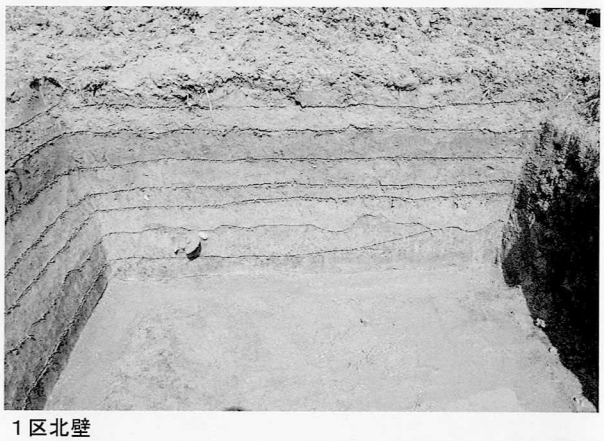
図版1



調査地（北東から）

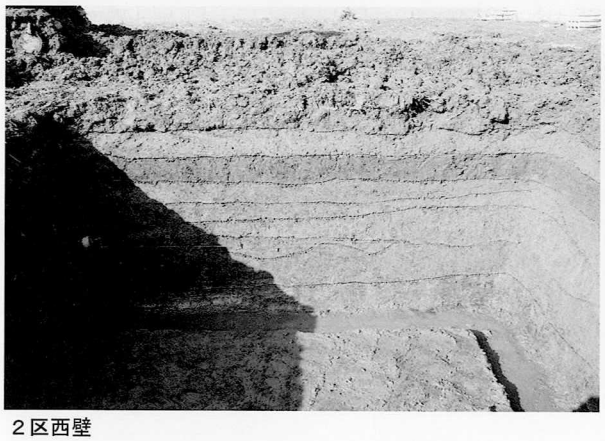
１区機械掘削（西から）

１区（北から）


１区北壁

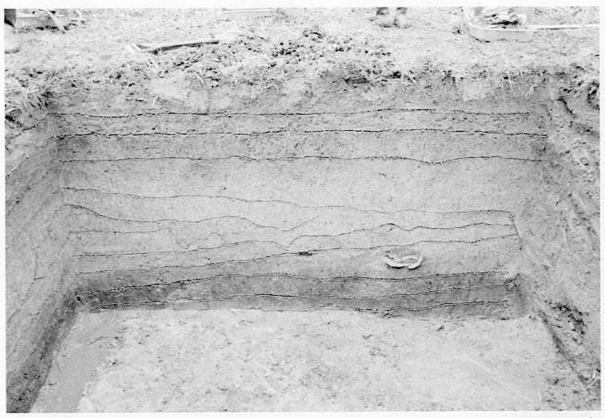
１区ＳＸ01（東から）

２区（北から）


２区西壁

３区（南から）

図版2



３区北壁

３区ＳＸ02（南から）

４区調査状況（南西から）

４区（南から）

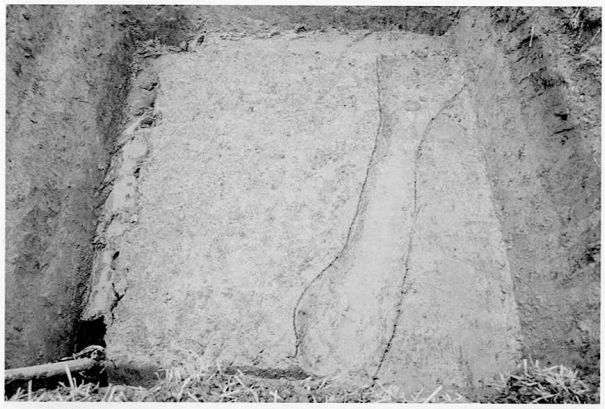
４区北壁

５区北壁

６区（南から）

６区北壁

図版3


7区(南から)

7区北壁

8区(南から)

8区北壁

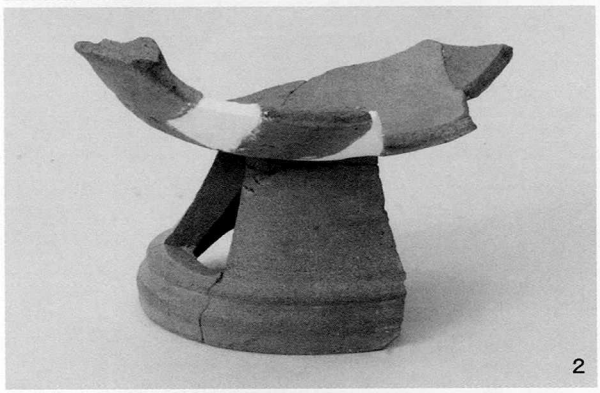
9区(南から)

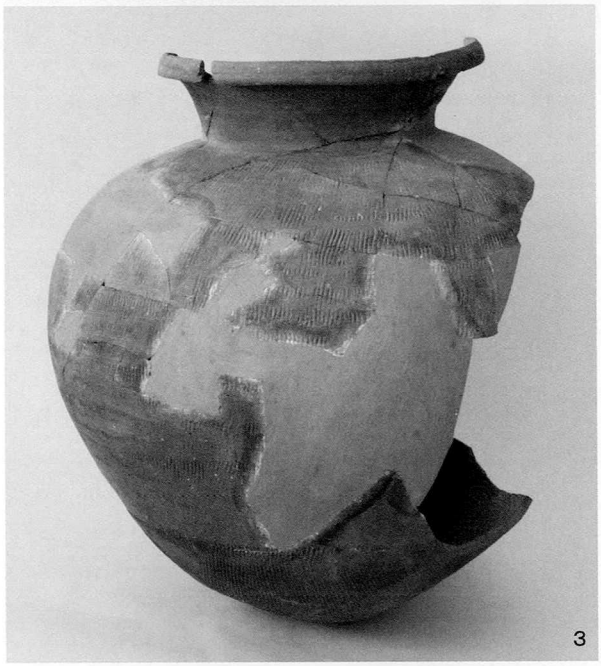
9区北壁

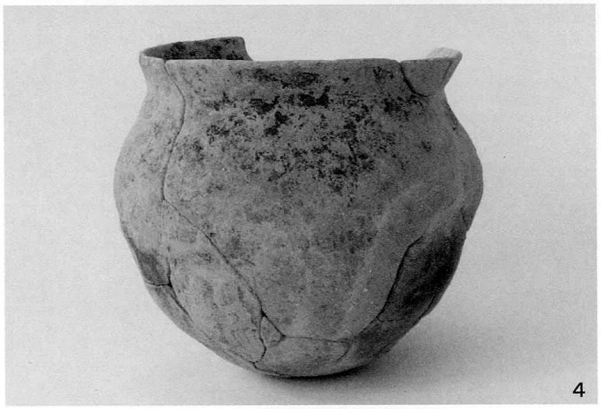
10区(南から)

10区北壁

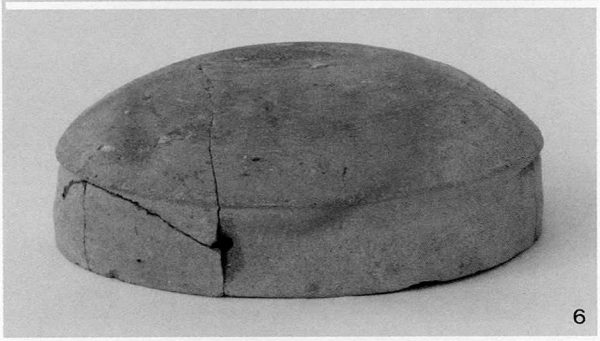
1

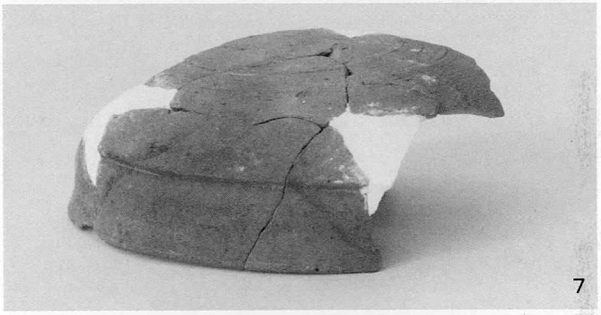

2


3


4

5

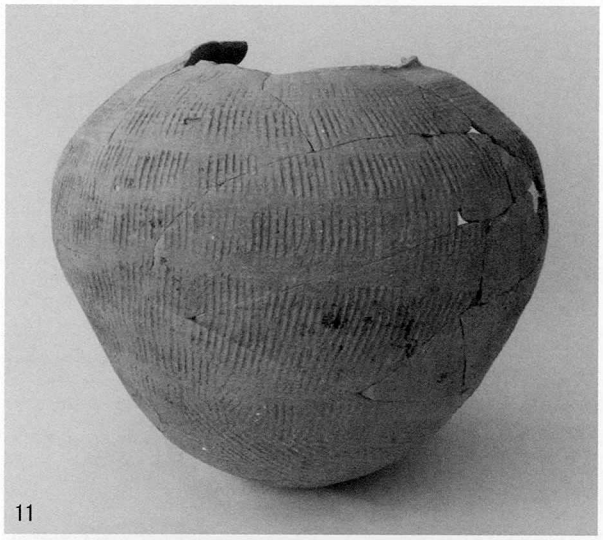

6

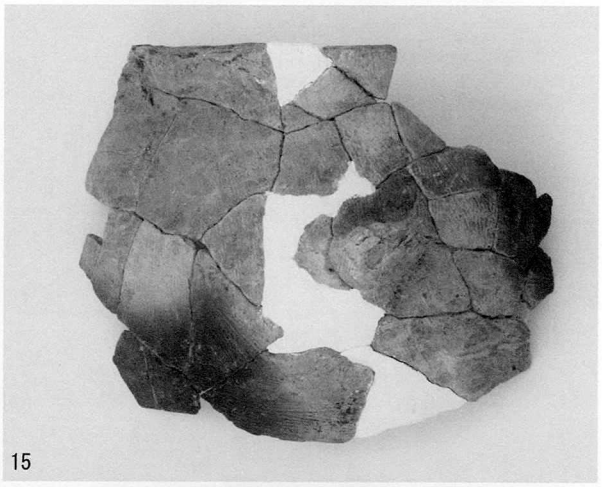

7

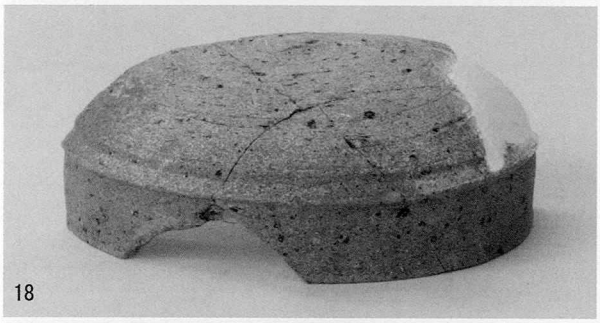
8

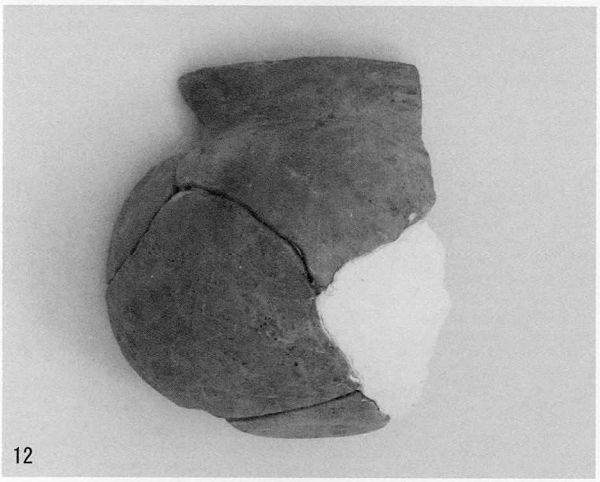
10

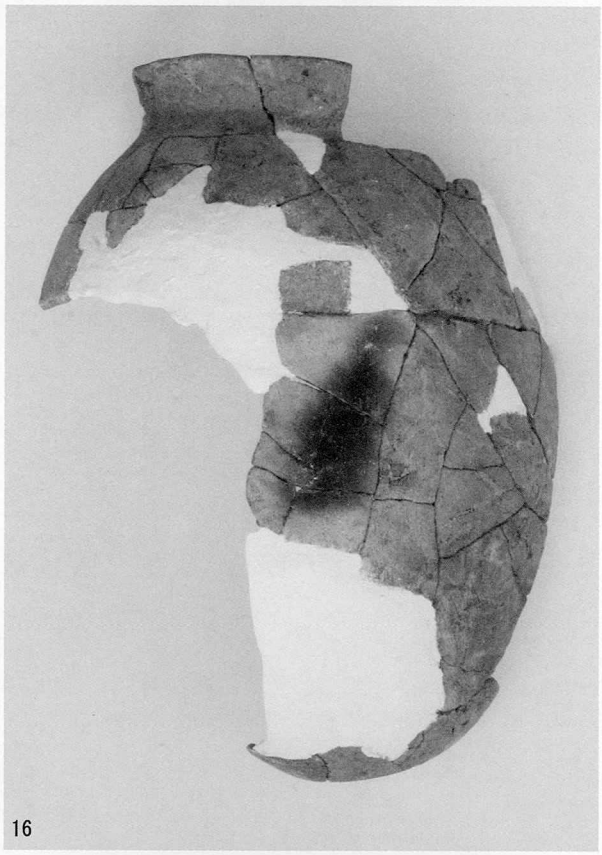
図版5

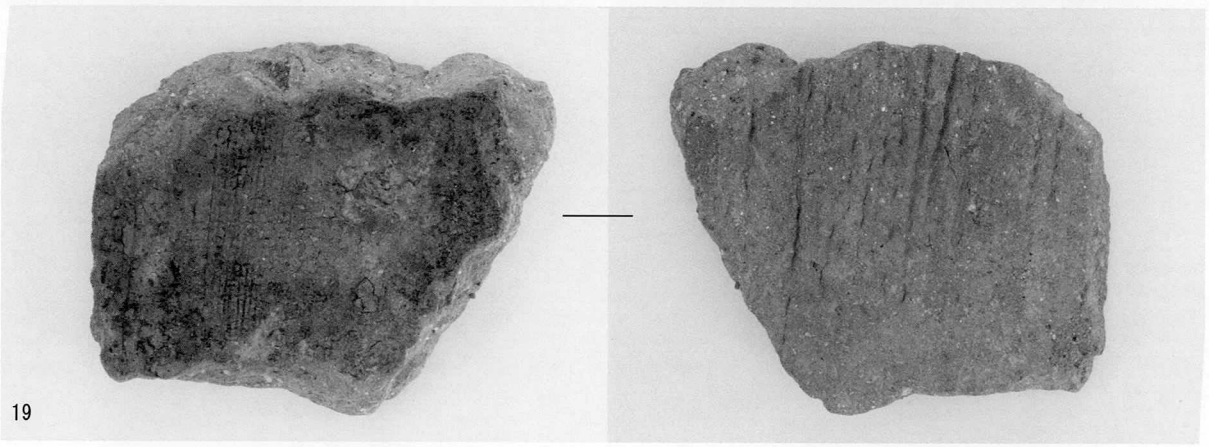

11


15


18


12


16


19

Ⅱ　老原遺跡第14次調査（ＯＨ2012－14）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市東老原２丁目46で実施した電力管埋設工事に伴う発掘調査報告書である。

1．本書で報告する老原遺跡第14次調査（ＯＨ2012－14）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づくもので、申請者と公益財団法人八尾市文化財調査研究会の間で、八尾市教育委員会を立会者として締結した契約により、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が申請者から委託を受けて実施したものである。

1．調査は当調査研究会　坪田真一が担当した。

1．現地調査は、平成24年９月10日～９月21日（実働７日）に実施した。調査面積は約95.5㎡である。

1．現地調査には飯塚直世・市森千恵子・芝﨑和美・村井俊子が参加した。

1．内業整理は下記が行い、現地調査終了後に着手して平成25年３月をもって終了した。

　遺物実測－飯塚・市森・伊藤静江・永井律子

　遺物トレース－市森

1．本書の執筆・編集は坪田が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……13

2．調査概要……14

　1）調査の方法と経過……14

　2）基本層序……15

　3）検出遺構と出土遺物……15

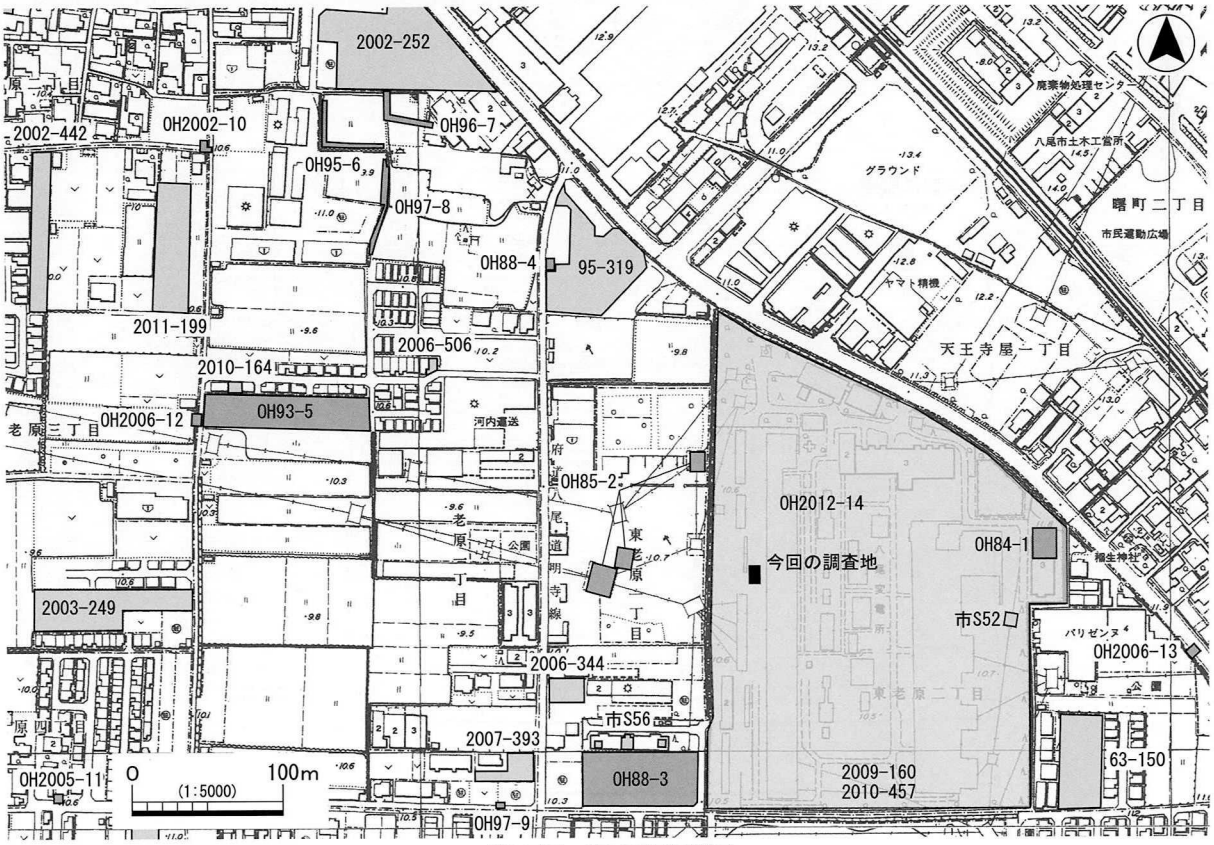
3．まとめ……18

Ⅱ　老原遺跡第14次調査（ＯＨ2012－14）

１．はじめに

老原遺跡は八尾市南西部にあたり、現在の行政区画では老原１～４丁目、東老原１・２丁目がその範囲となっている。地理的には旧大和川の主流である長瀬川左岸の沖積地上に位置している。当遺跡周辺には南に志紀遺跡・田井中遺跡が隣接し、長瀬川を挟んで北東部には矢作遺跡・中田遺跡・東弓削遺跡が存在する。また当遺跡北側は長瀬川左岸に平行する奈良街道に面している。街道沿いにあたる老原１丁目地内の田中には、一辺約５ｍ・高さ約１ｍを測る方形の高まりが現存しており、「五条宮」と称されている。この付近からは奈良時代後期の細弁蓮華文軒丸瓦が出土していることから、ここを中心として奈良時代の寺院（五条宮寺）の存在が想定されている。しかしこれまでの発掘調査では当該期の遺構・遺物は確認されていない。

当遺跡における最初の発掘調査は、昭和52年に市教委により実施された（市S52）で、弥生時代相当の地層が確認された。続く（市S56）では古墳時代後期・鎌倉時代前期の遺構が検出され、さらにその後の市教委・研究会による発掘調査や遺構確認調査によって、当遺跡は弥生時代～近世の遺跡として認識されている。地域毎に概観すると、遺跡範囲北部～中心部の（OH85-2）・（OH88-4）・（OH95-6）・（OH96-7）・（OH97-8）・（95-319）では平安時代後期以降の集落域が検出されている。また南部～東部の（市S56）・（OH84-1）では古墳時代後期以降の遺構・遺物が見られるが、（OH84-1）では後期古墳の副葬品を暗示するような遺物が認められ注目される。



第１図　調査地位置図

2．調査概要

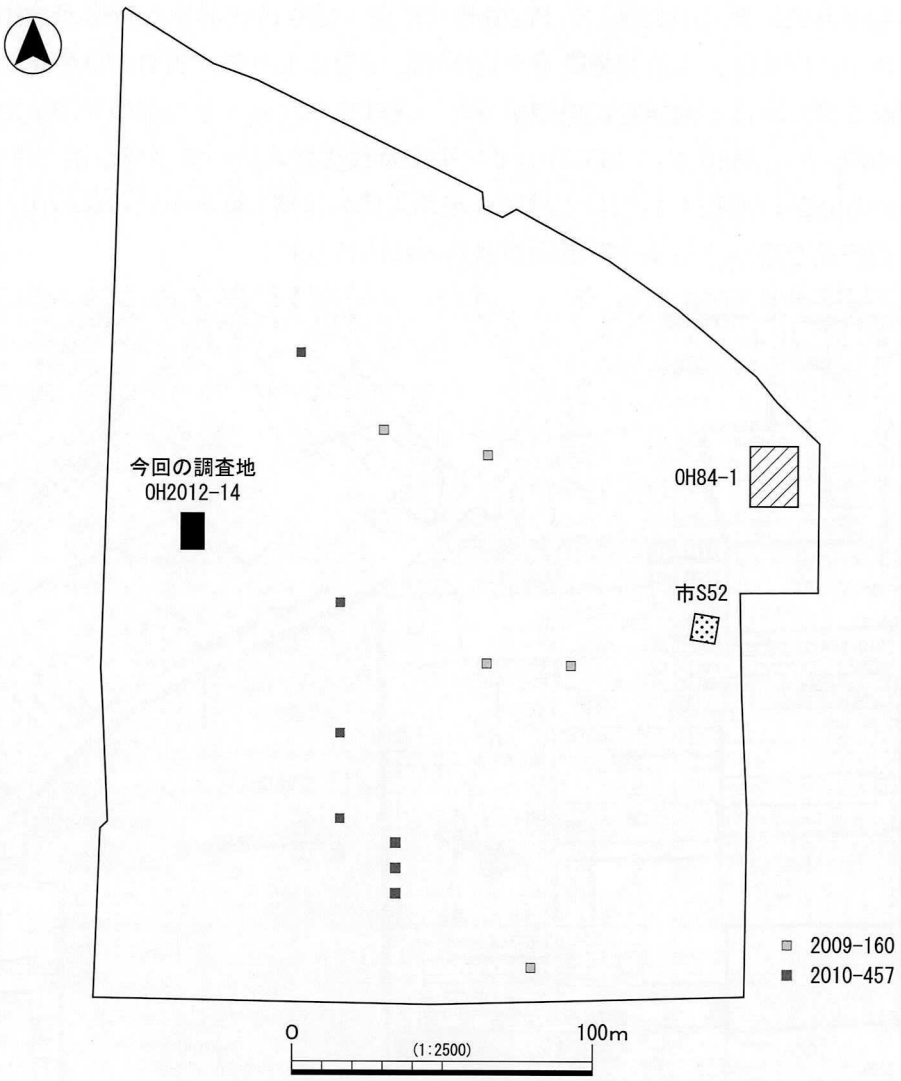
1）調査の方法と経過

今回の調査は、八尾市東老原２丁目所在の老原変電所内で実施される電力管埋設工事に伴う調査で、当研究会が老原遺跡内で行った第14次調査（ＯＨ2012－14）である。同変電所内においては市教委による市S52調査、当研究会による第１次調査（OH84-1）の他、遺構確認調査（2009-160、2010-457）を実施している。

調査区は立坑部分で、調査区平面形は東西約8.0m×南北約12.4mの長方形を呈し、総面積は約95.5㎡を測る。

調査にあたっては、現地表（約T.P.+11.4～11.5m）下約1.4mまでを機械掘削し、以下を人力掘削により調査を行った。また調査区北部に東西約５m×南北約２mの下層確認トレンチを設定し、機械による掘削後、断面観察を行った。

調査では、調査地北東部に位置する八尾市街区多角点〈20A17：T.P.+12.171m〉を標高の基準とした。



第２図　調査区設定図

２）基本層序

０層は盛土・撹乱で、現地表面の標高は約T.P.+11.4mを測る。１層は水成層で、洪水砂あるいは河川堆積である。撹乱のため明確ではないが、北壁では西端でのみ、また東壁では南半部で確認できた。南東部の調査地(2010-457)においても相当層が確認されており、北西－南東方向の河川を想定した場合、当地が北岸に位置すると考えられる。層位的に時期は近世に比定される。２・３層はFe斑を多く含む撹拌された作土で、水田あるいは島畑盛土の可能性もある。時期は中世～近世であろう。４層は暗色を呈する撹拌された作土である。12～13世紀頃の土師器、瓦器、須恵器、瓦の細片を含んでいる。５・６層も撹拌された作土である。７～９層も作土で、８層はブロック状を呈する。７～９層の作土層は北壁及び東壁北端にのみ見られることから、当地より北～西側に生産域が展開していたことが看取される。５～９層はほとんど遺物を含んでおらず時期は明確ではないが、周辺の調査成果から勘案して古代末～中世と考えられる。10層以下は水成層となっており、10層は湿地性堆積、11層以下は河川堆積である。この水成層からは、磨耗した弥生土器や古墳時代中期頃までの土師器(土錘・他)、須恵器が出土した。13・15層の砂礫層から勘案して、当地は河川の流心に近いものと考えられる。なお12層の液状化による噴砂が認められた。高さは最大50cm程度を測り、作土である８層により削平されている。

３）検出遺構と出土遺物

４層下面(T.P.+10.0m)で南北方向に平行して延びる溝３条(ＳＤ101～103)を検出した。

ＳＤ101・102

調査区西部で隣接して延びるもので、南部では一部合流している。検出長7.8mで、ＳＤ101は幅25～80cm・深さ５～10cm、ＳＤ102は幅25～40cm・深さ５～10cmを測る。共に断面皿状を呈し、埋土は作土である基本層序４層である。耕作関連の溝であろう。13世紀頃の土師器皿、瓦器椀の小片が出土しており、このうち瓦器椀(１)を図化した。１は口縁部の小片で、口縁部～体部のヘラミガキは内面のみに粗く施す。13世紀初頭頃に比定される。

ＳＤ103

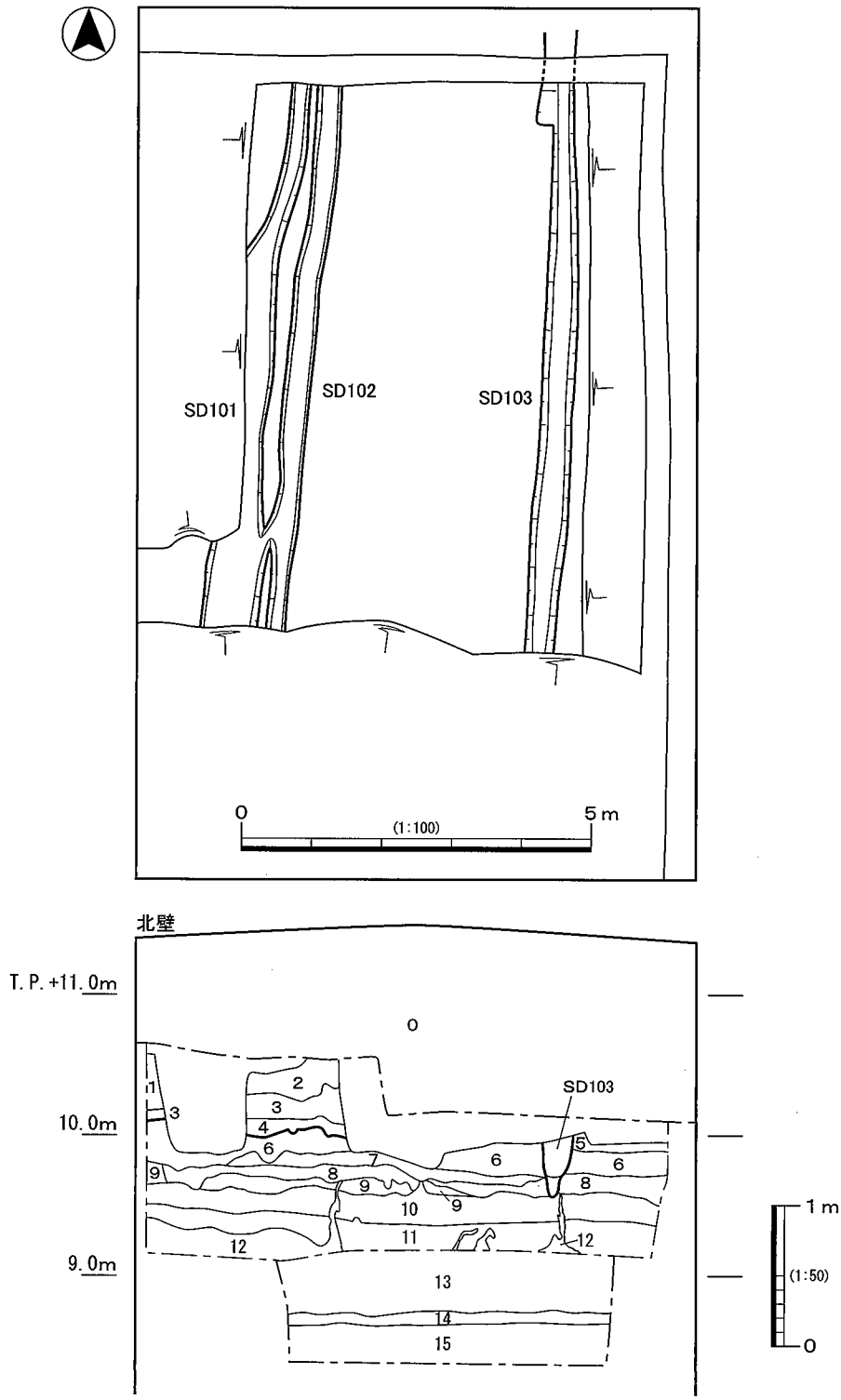
調査区東部に位置する。検出長8.8m・幅25～55cm・深さ20～45cmを測り、北部で幅を増している。断面逆台形に近く、埋土は上層が2.5Y6/1黄灰色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土(ブロック状。Fe斑含む)、下層が5Y6/1灰色細粒砂多混粘土質シルト(Fe斑含む)である。耕作関連の溝と考えられるがＳＤ101・102に比して深い。12世紀中葉～13世紀頃の土師器皿・羽釜、瓦器椀、須恵器の小片が出土しており、このうち瓦器椀(２)を図化した。２は内面に密にヘラミガキを施すもので、外面は摩耗の為不明である。12世紀中葉頃に比定される。

地層出土遺物

４層－３～５は土師器皿で、３・４が褐色系、５は淡褐色系である。６・７は瓦器椀・皿である。６は摩耗の為ヘラミガキが不明瞭であるが、12世紀後半～13世紀初頭に比定できる。８・９は東播系須恵器鉢で、口縁部の形態から８は11世紀後半～12世紀前半、９は12世紀後半～13世紀に比定される。10は須恵器壺である。体部下位外面に「＋」のヘラ記号を施す。

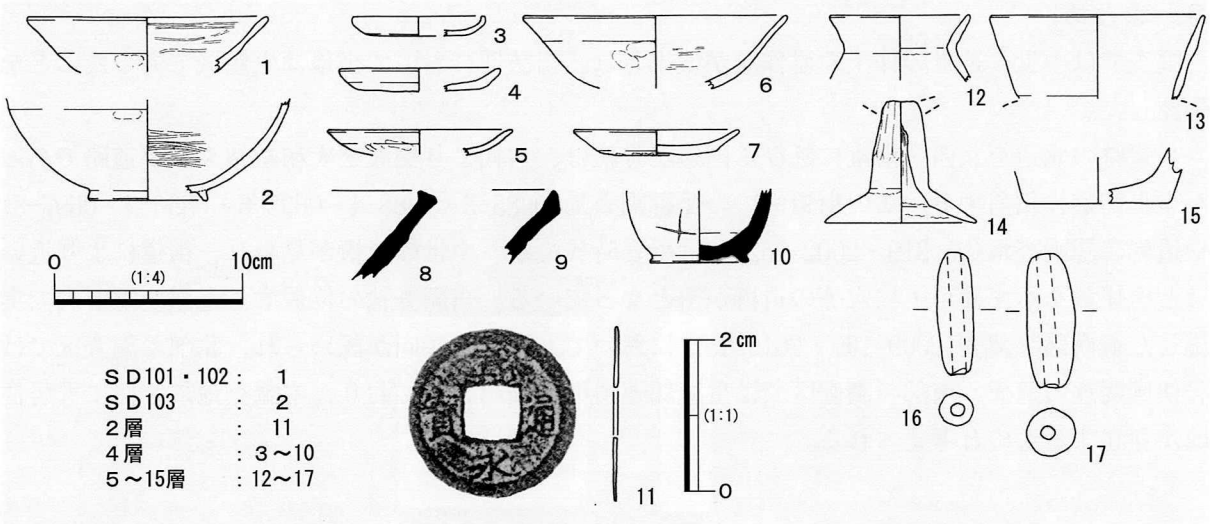
２層－11は江戸時代の銅銭「寛永通宝」である。17世紀末以降の新寛永にあたる。

10～15層－12・13は土師器壺である。14は土師器高杯で、脚端部に黒斑を有する。12～14は古

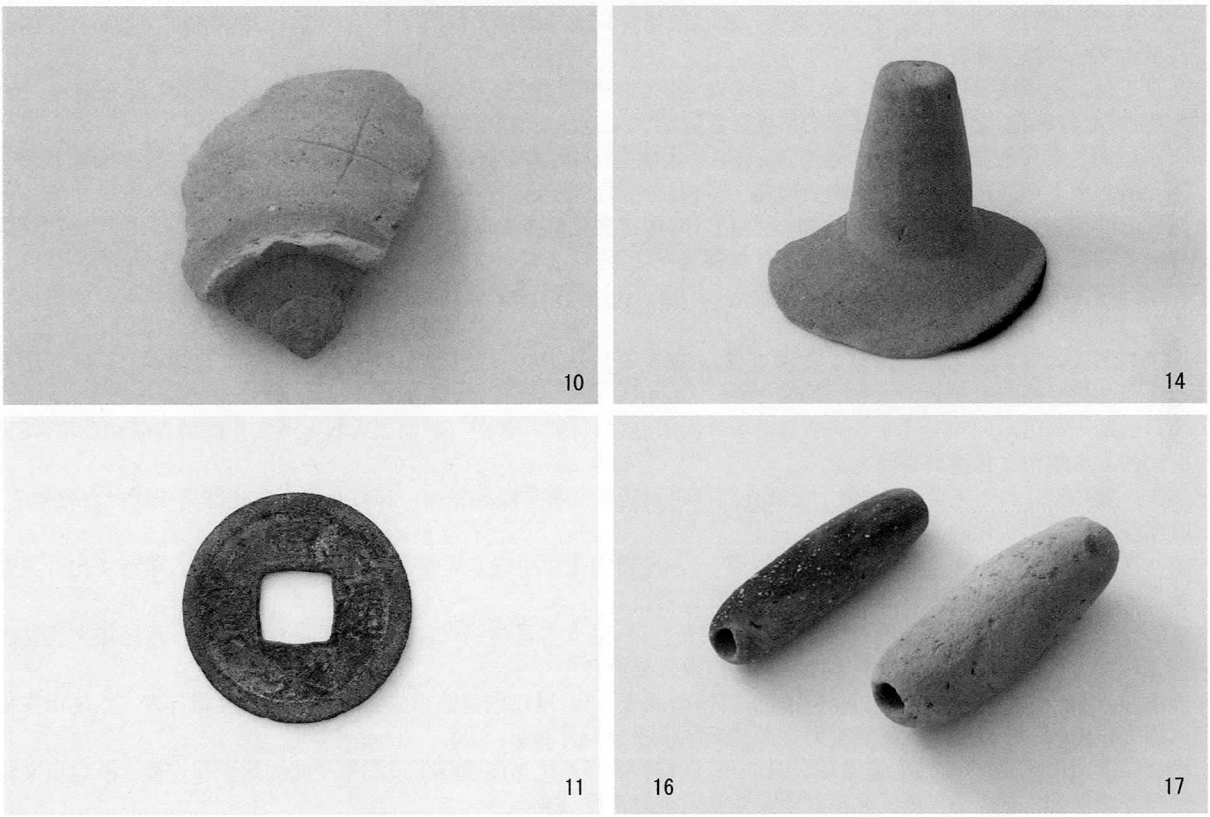


0．盛土・撹乱
1．10YR6/4にぶい黄橙色粘土質シルト～シルト互層　水成層
2．10YR6/2灰黄褐色極細粒砂～粗粒砂多混シルト　Fe斑多　撹拌作土
3．10YR6/2灰黄褐色極細粒砂～細粒砂混シルト　Fe斑　撹拌作土
4．10YR6/1褐灰色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土　撹拌作土
5．2.5Y6/2灰黄色極細粒砂～細粒砂少混粘土質シルト　撹拌作土
6．2.5Y7/2灰黄色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト　Fe斑多　撹拌作土
7．2.5Y6/1黄灰色シルト混極細粒砂～細粒砂　撹拌作土
8．2.5Y6/3にぶい黄色シルト～粗粒砂　Fe斑　ブロック状作土
9．7.5Y5/1灰色細粒砂混粘土質シルト　Fe斑　撹拌作土
10．2.5GY5/1オリーブ灰色極細粒砂～細粒砂少混粘土質シルト　水成層
11．2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土質シルト～極細粒砂互層　水成層
12．7.5Y6/1灰色シルト質粘土～極細粒砂互層　水成層
13．2.5Y6/2灰黄色細粒砂～中礫互層　水成層
14．5Y5/2灰オリーブ色シルト質粘土　水成層
15．5Y6/1灰色細粒砂～中礫　互層　水成層

第３図　平断面図



第４図　出土遺物



墳時代前期後半～中期に比定されよう。15は弥生土器底部で、中期頃に比定される。16・17は土師器土錘である。法量は16が長さ6.4cm・直径約1.7cm、17が7.1cm・2.5cmを測る。

３．まとめ

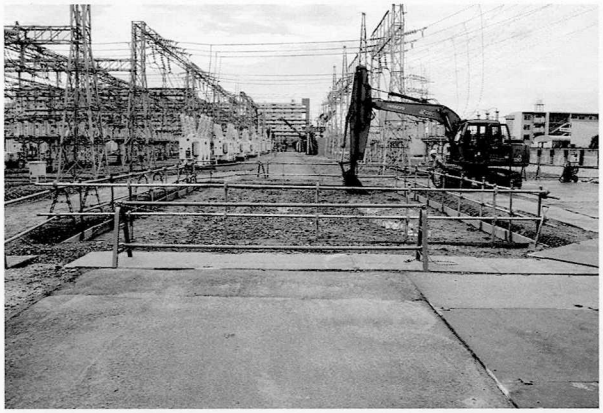
調査では中世～近世の作土や耕作溝が検出され、当該期において当地は生産域であったことを確認した。

当遺跡の北辺を北西－南東に延びる国道25号線は、古代より難波と大和を結ぶ主要道路であった奈良街道に相当する。この街道沿いの発掘調査地(0H85-2・0H88-4・0H95-6・0H96-7・0H97-8)や遺構確認調査地(95-319・2002-252)では平安時代後期～中世の遺構が見られ、街道により近いほど居住域を示す井戸・柱穴等の遺構が密となっている。当調査地の位置する老原変電所内で実施した遺構確認調査(2009-160・2010-457)においても同様の傾向が認められ、北部の調査区では居住域関連の遺構、南部の調査区では生産関連遺構が検出されており、本調査地の北側にも居住域が存在するものと考えられる。

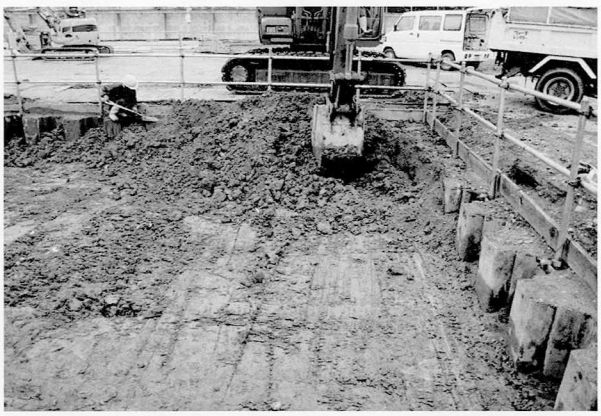
参考文献

・八尾市教育委員会1979「5. 神宮寺遺跡、東弓削遺跡、老原遺跡」『昭和51・52年度埋蔵文化財発掘調査年報 八尾市文化財調査報告４』
・高萩千秋・米田敏幸1983「第７章　老原遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報 1980・1981年度　(財)八尾市文化財調査研究会報告２』財団法人八尾市文化財調査研究会
・原田昌則・成海佳子1987「Ⅱ　老原遺跡(第２次調査)発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 昭和61年度　(財)八尾市文化財調査研究会報告13』財団法人八尾市文化財調査研究会
・西村公助1989「16　老原遺跡(第４次調査)」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和63年度 (財)八尾市文化財調査研究会報告25』財団法人八尾市文化財調査研究会
・原田昌則2004「Ⅲ　老原遺跡第６次調査(ＯＨ95－６)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告81』財団法人八尾市文化財調査研究会
・原田昌則2004「Ⅳ　老原遺跡第７次調査(ＯＨ96－７)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告81』財団法人八尾市文化財調査研究会
・西村公助・原田昌則2004「Ⅴ　老原遺跡第８次調査(ＯＨ97－８)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告81』財団法人八尾市文化財調査研究会
・駒澤　敦1985「11　老原遺跡(第１次調査)」『昭和59年度事業概要報告　(財)八尾市文化財調査研究会報告７』財団法人八尾市文化財調査研究会
・滝　斎1997「２. 老原遺跡(95-319)の調査」『八尾市内遺跡平成８年度発掘調査報告書Ⅰ　八尾市文化財調査報告36　平成８年度国庫補助事業』八尾市教育委員会
・成海佳子2003「３　老原遺跡(2002-252)の調査」『八尾市内遺跡平成14年度発掘調査報告書　八尾市文化財調査報告48　平成14年度国庫補助事業』八尾市教育委員会
・坪田真一2010「Ⅱ－３－４)老原遺跡(2009-160)の調査」『八尾市内遺跡平成21年度発掘調査報告書　八尾市文化財調査報告61　平成21年度国庫補助事業』八尾市教育委員会
・樋口　薫2012「Ⅱ－３－３)老原遺跡(2010-457)の調査」『八尾市内遺跡平成23年度発掘調査報告書　八尾市文化財調査報告69　平成23年度国庫補助事業』八尾市教育委員会

図版1

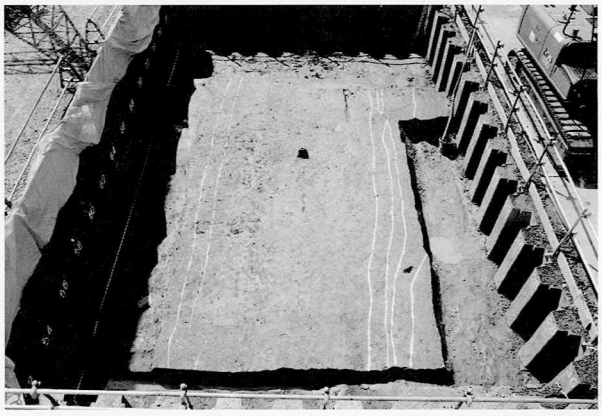


調査地（北から）

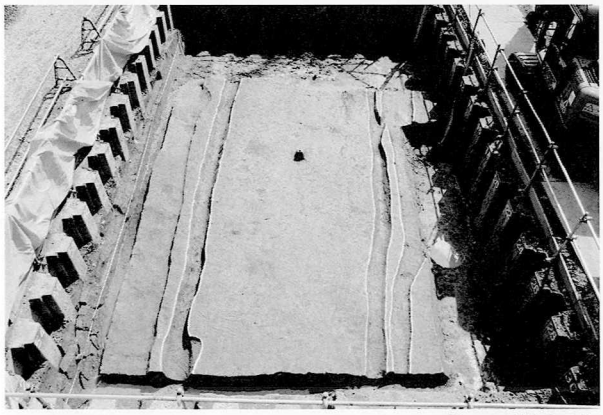


機械掘削（東から）

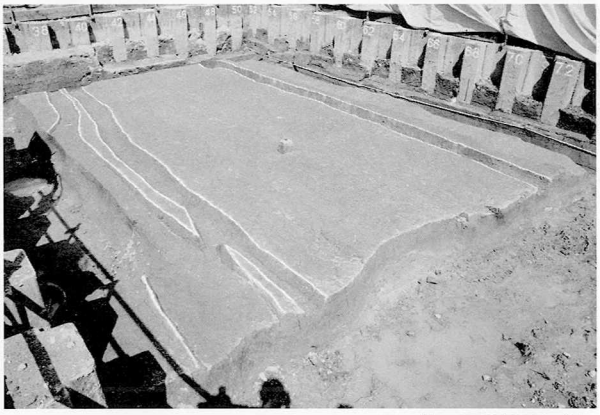
調査状況（北東から）



第１面検出状況（北から）

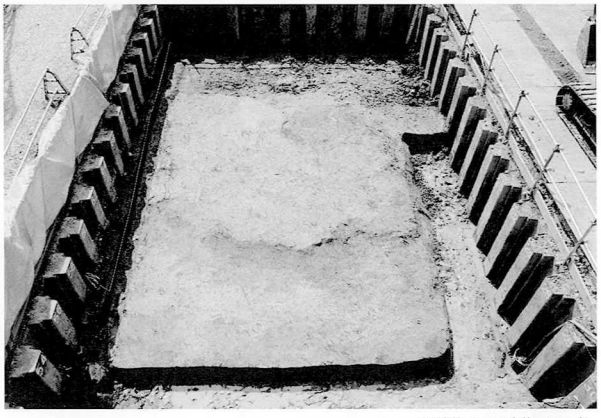


第１面（北から）



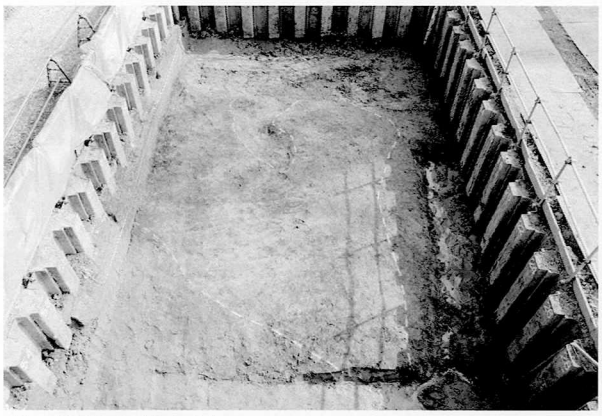
第１面（南西から）

ＳＤ103北壁



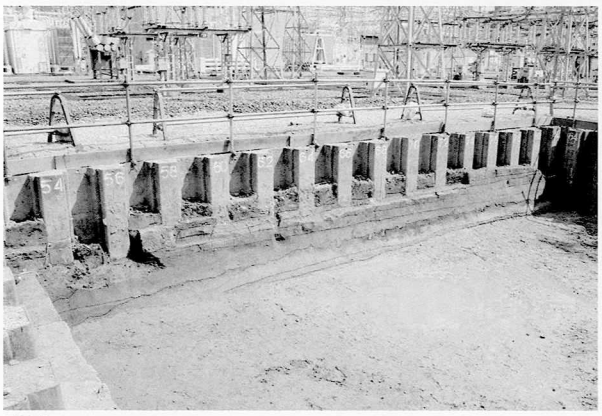
10層上面（北から）

図版2

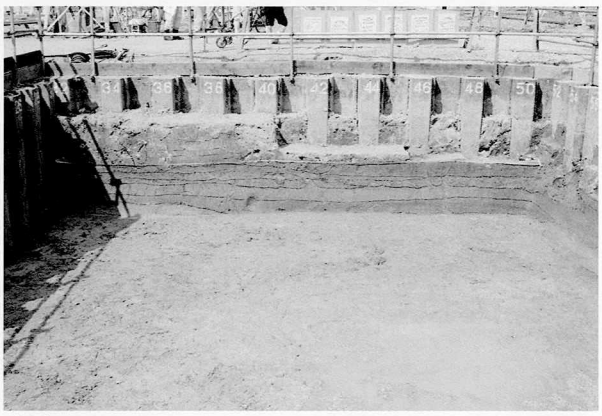


12・13層上面(北から)

調査状況(北から)

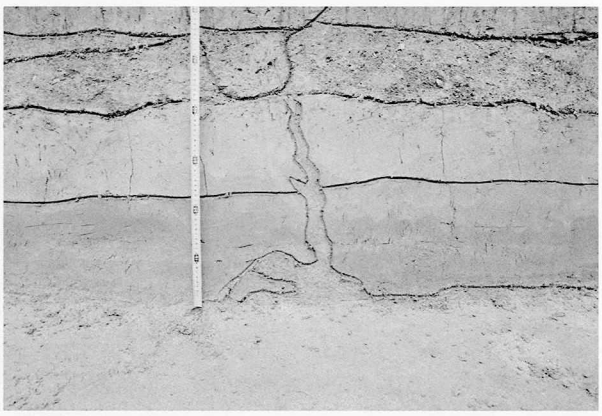


東壁

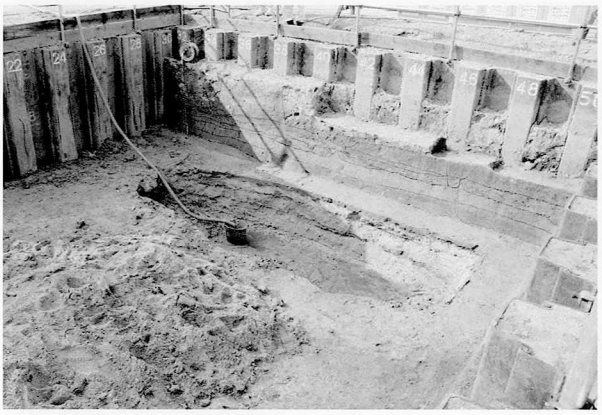


北壁

北壁噴砂



北壁噴砂



下層確認トレンチ(南東から)

下層確認トレンチ北壁

Ⅲ　萱振遺跡第29次調査（ＫＦ2013－29）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市緑ヶ丘１丁目50－１で実施した保育所建設に伴う発掘調査報告書である。

1．本書で報告する萱振遺跡第29次調査（ＫＦ2013－29）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づくもので、申請者と公益財団法人八尾市文化財調査研究会の間で、八尾市教育委員会を立会者として締結した契約により、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が申請者から委託を受けて実施したものである。

1．調査は当調査研究会　坪田真一が担当した。

1．現地調査は、平成25年５月13日～５月17日（現場実働５日）に実施した。調査面積は約70.5㎡である。

1．現地調査には飯塚直世・伊藤静江・梶本潤二・國津れいこ・芝﨑和美・竹田貴子・田島宣子が参加した。

1．内業整理は下記が行い、現地調査終了後に着手して平成26年３月をもって終了した。

　遺物復元－梶本・竹田・田島

　遺物実測－飯塚・市森千恵子・伊藤

　遺物トレース－市森

1．本書の執筆・編集は坪田が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……21

2．調査概要……22

　1）調査の方法と経過……22

　2）基本層序……22

　3）検出遺構と出土遺物……24

3．まとめ……27

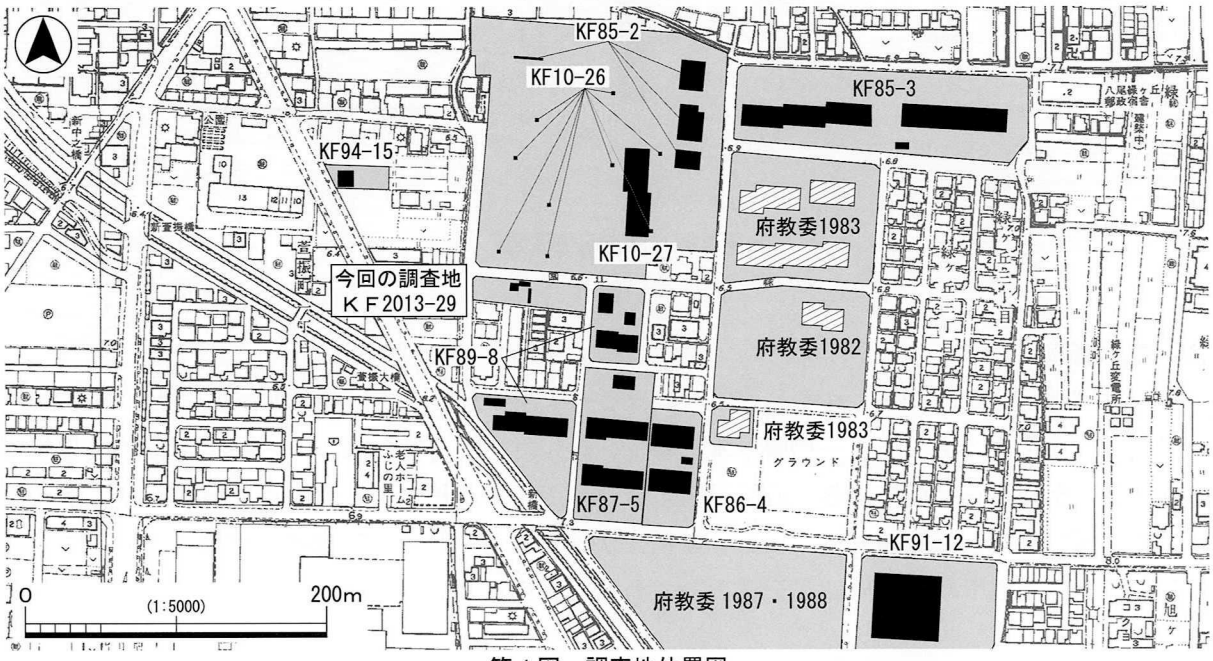
Ⅲ　萱振遺跡第29次調査（ＫＦ2013－29）

１．はじめに

萱振遺跡は、大阪府八尾市の北西部に位置し、緑ヶ丘１～５丁目、萱振町１～７丁目、北本町３・４丁目、楠根町１丁目の東西約0.5～0.9km、南北約1.1kmがその範囲とされている。地理的には、旧大和川の主流であった長瀬川と玉串川に挟まれた低位沖積地に位置している。

当遺跡は、遺跡範囲南東部の緑ヶ丘に存在した八尾競馬場［昭和５(1925)～15(1940)年］跡地内において、昭和18(1943)年に防空壕を構築する際に、古墳時代中期の土師器片や子持勾玉が出土したことにより遺跡として認識された。昭和57(1982)年以降には、府営・市営住宅の建替えや、府立八尾北高校、市立生涯学習センター等の公共施設建設に伴う大規模な発掘調査や、公共下水道工事等に伴う小規模な発掘調査が、大阪府教育委員会、八尾市教育委員会、当調査研究会により実施されてきた。これら一連の調査の結果、当遺跡は弥生時代中期～鎌倉時代に至る複合遺跡であることが明らかとなっている。

主な調査成果を概観すると、遺跡範囲北部の府立八尾北高校建設に伴う発掘調査では、弥生時代後期～室町時代の遺構・遺物が検出され、古墳時代前期後半の「萱振１号墳」からは、鰭付円筒埴輪・朝顔形埴輪の他、靭形埴輪をはじめとする豊富な形象埴輪が多量に出土しており、古墳時代前期の地域首長の動向を知る上で新たな知見を提供した。一方、遺跡範囲南部では、緑ヶ丘２丁目の府営住宅に伴う発掘調査(府教委1982・1983)で、古墳時代前期前半を中心とする居住域が検出された他、第３次調査(KF85-3)では方墳で主体部に木棺が直葬された古墳時代後期後半の「萱振２号墳」が検出されている。今回の調査地北側の市立八尾中学校内では第２・26・27次調査を、また東・南側では市営住宅建替えに伴う第４・５・８次調査を当調査研究会が実施しており、主に古墳時代前期～鎌倉時代の遺構・遺物を検出している。



第１図　調査地位置図

2．調査概要

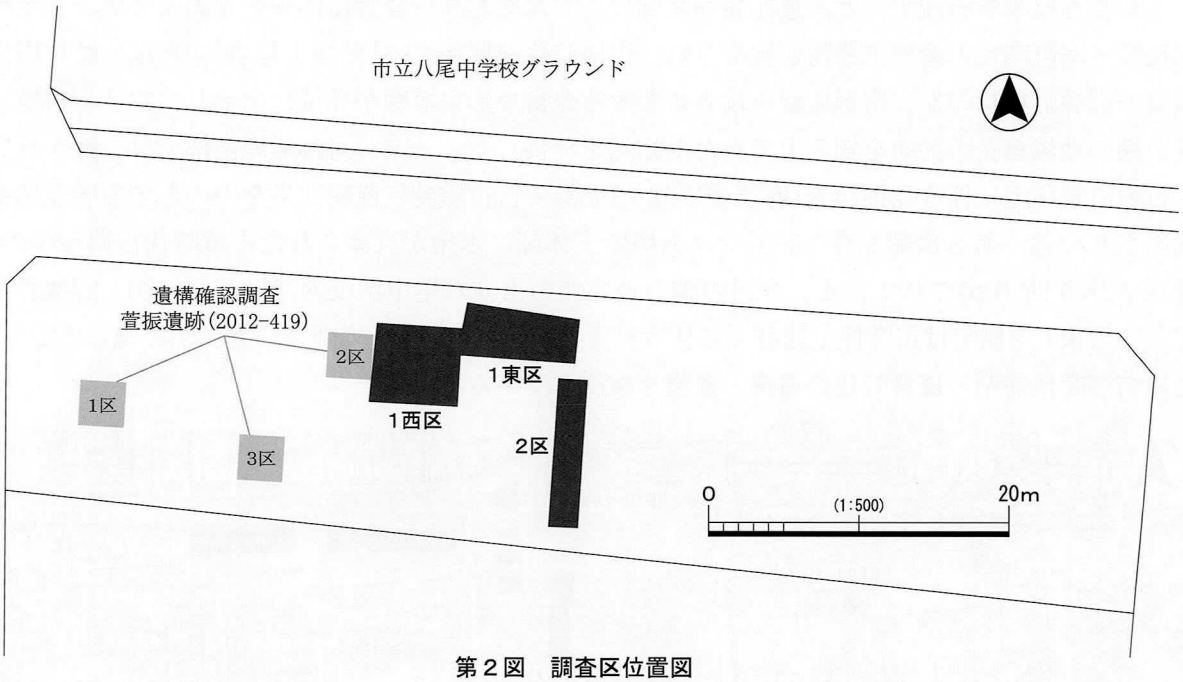
1）調査の方法と経過

今回の調査は、平成25年４月17日に実施した遺構確認調査〈萱振遺跡(2012-419)〉の結果を受けて実施した保育所建設に伴う調査で、当調査研究会が萱振遺跡内で行った第29次調査(ＫＦ2013－29)である。

調査区は２箇所(北から１・２区)で、１区は１西区・１東区に分かれる。調査区平面形は１西区が東西6.0m×南北4.5m、１東区が東西7.0m×南北3.5m、２区が東西2.0m×南北9.5mの長方形を呈し、総面積約70.5㎡を測る。

掘削は、現地表(約T.P.+7.0～7.4m)下約1.0～1.2mまでを機械掘削し、以下の約0.2mを人力掘削により調査を行った。また１西区南東角、及び２区北端において下層確認調査をした。なお１西区北東部～１東区については既設構造物による撹乱がT.P.+5.5m付近まで及んでいた。

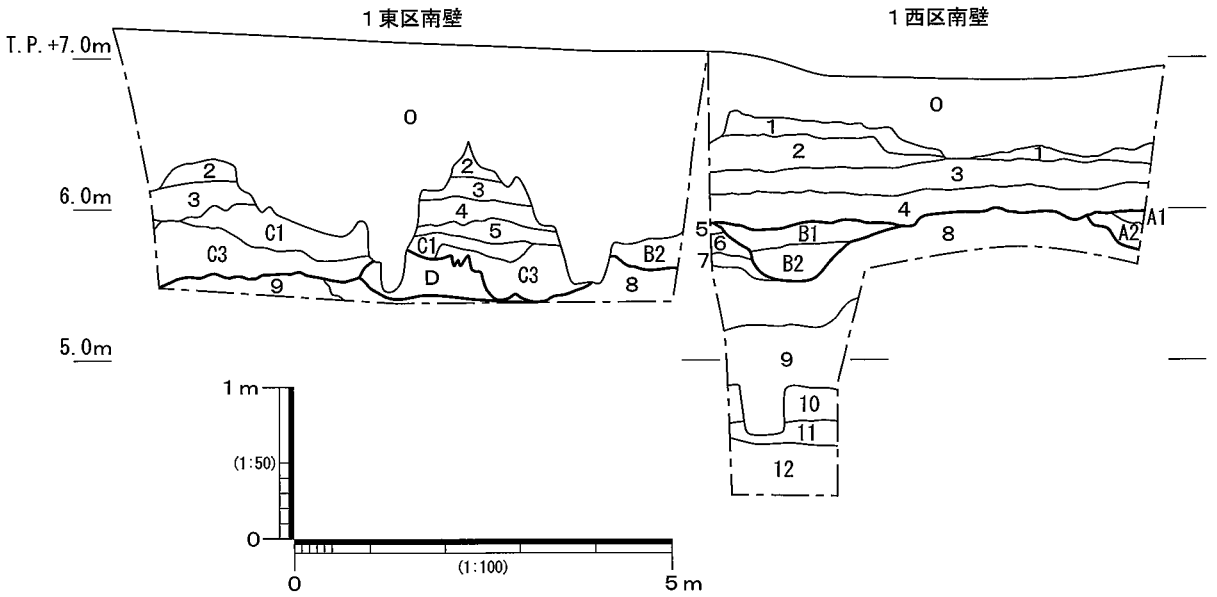
調査で使用した標高の基準は、調査地北西部に位置する八尾市街区補助点〈3B128:T.P.+6.821m〉である。

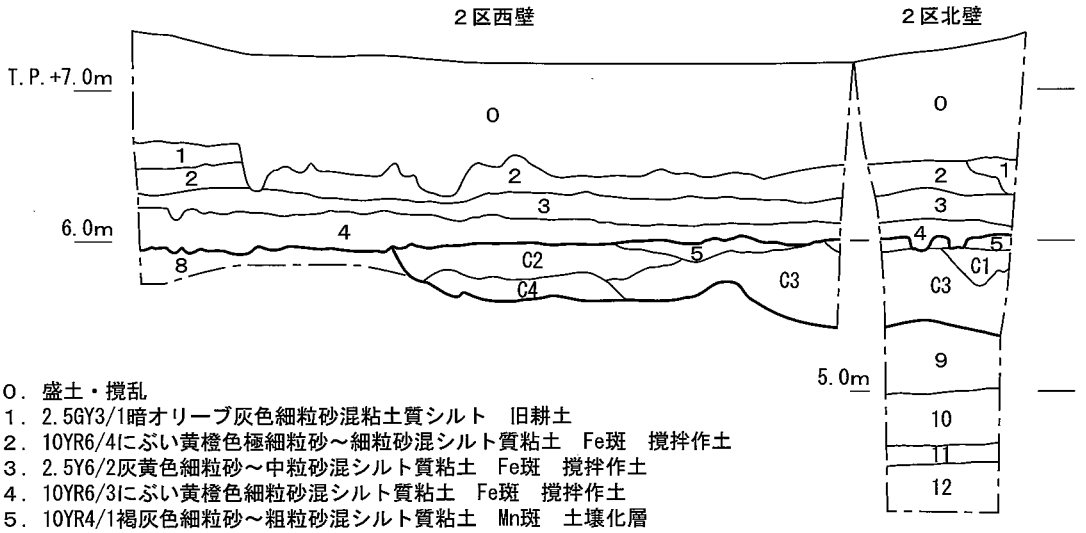


第２図　調査区位置図

2）基本層序

０層は盛土・撹乱。１層は旧耕土。２～４層は撹拌された作土で、時期は中世～近世であろう。４層下面が第１面である。５～10層は水成層で、河川堆積である。５層や８層上部は土壌化しており、この上面が第２面である。11層は暗色を呈する土壌化層で、作土の可能性がある。遺構確認調査３区で確認した９層(T.P.+5.2m)に相当すると考えられる。12層は水成層で、河川堆積である。なお10層以下は下層確認調査において断面で確認した。





０．盛土・撹乱
１．2.5GY3/1暗オリーブ灰色細粒砂混粘土質シルト　旧耕土
２．10YR6/4にぶい黄橙色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土　Fe斑　撹拌作土
３．2.5Y6/2灰黄色細粒砂～中粒砂混シルト質粘土　Fe斑　撹拌作土
４．10YR6/3にぶい黄橙色細粒砂混シルト質粘土　Fe斑　撹拌作土
５．10YR4/1褐灰色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土　Mn斑　土壌化層
６．10YR6/2灰黄褐色シルト質粘土～粗粒砂　水成層　上部土壌化
７．5Y6/1灰色シルト質粘土　水成層
８．10YR6/3にぶい黄橙色シルト質粘土混細粒砂～粗粒砂　水成層　上部土壌化
９．2.5GY5/1オリーブ灰色粘土～極粗粒砂互層　水成層
10．2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土～シルト互層　水成層
11．5GY2/1オリーブ黒色粘土　暗色土壌化層　作土？
12．5GY5/1オリーブ灰色粘土～細粒砂互層　水成層

ＳＤ201
　A1．10YR5/2灰黄褐色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト　Mn斑　ブロック状
　A2．10YR6/1褐灰色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土　Mn斑　ブロック状
ＳＤ202
　B1．10YR6/2灰黄褐色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土　ブロック状
　B2．10YR6/3にぶい黄橙色極細粒砂～細粒砂混粘土　ブロック状
ＳＯ201
　C1．10YR6/1褐灰色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土　Mn斑
　C2．10YR7/3にぶい黄橙色極細粒砂～細粒砂少混シルト質粘土　Fe斑
　C3．10YR6/3にぶい黄橙色シルト～極粗粒砂　Fe斑
　C4．10YR7/2にぶい黄橙色シルト質粘土
ＳＤ203
　Ｄ．5Y5/1灰色シルト混シルト質粘土

第３図　断面図

3）検出遺構と出土遺物

〈第１面(T.P.+6.0m)〉

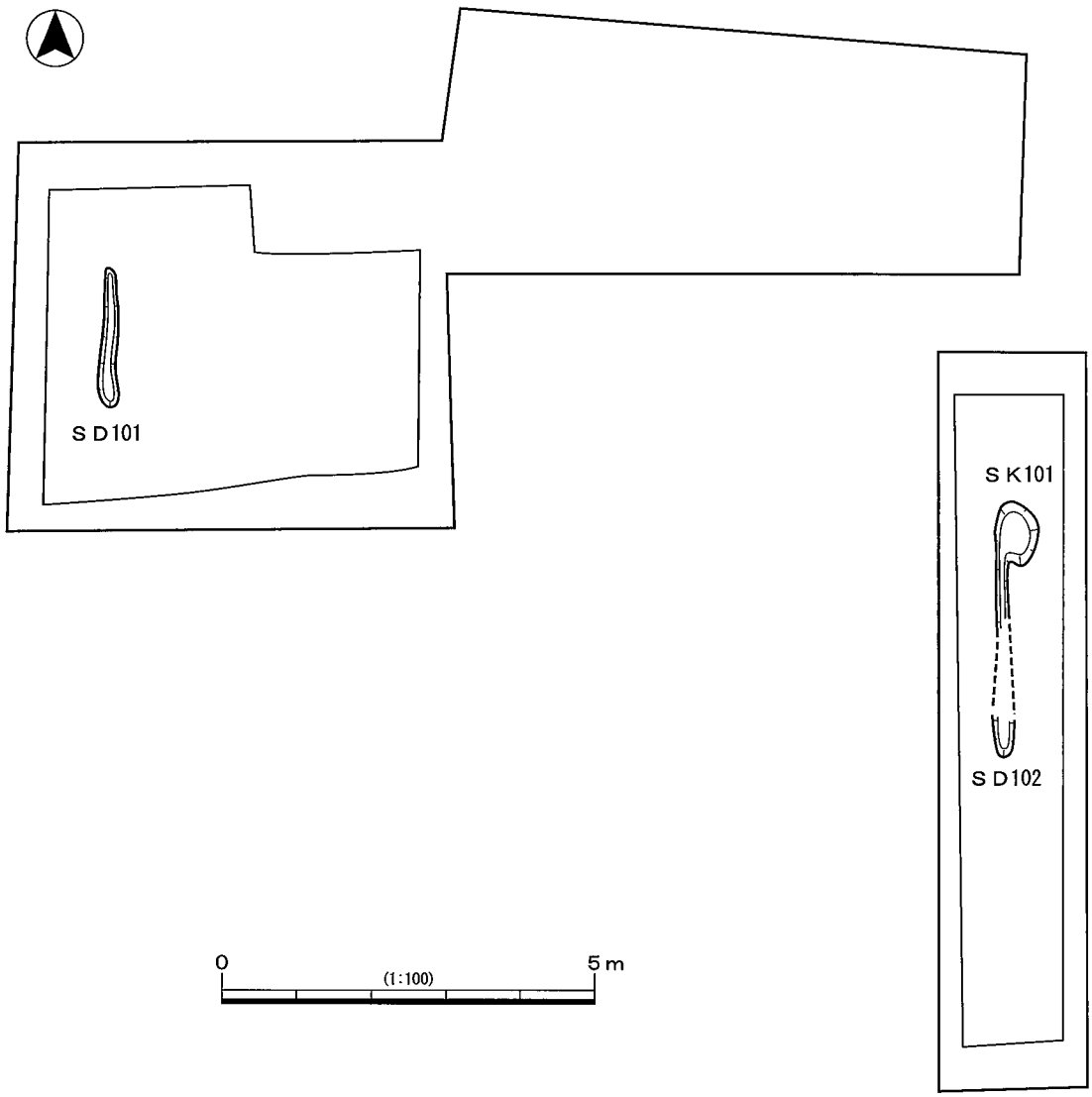
４層下面で土坑１基(ＳＫ101)、溝２条(ＳＤ101・102)を検出した。これらは耕作関連遺構である可能性が高く、出土遺物からみて時期は中世頃であろう。

ＳＫ101

２区北部で検出した土坑で、平面形は南北約80cm×東西約60cmの楕円形をなす。断面逆台形を呈し、深さ約18cmで、埋土はブロック状の単層である。南西部でＳＤ102と接続する。土師器、須恵器、瓦器椀の小片が少量出土した。

ＳＤ101

１西区で検出した南北方向の溝である。幅15～25cm・深さ約５cm・検出長約1.8mを測る。断面逆台形を呈し、埋土は基本層序４層が落ち込む。遺物は巻き上げられたと考えられる古墳時代後期の須恵器高杯片が出土した。



第４図　第１面平面図

ＳＤ102

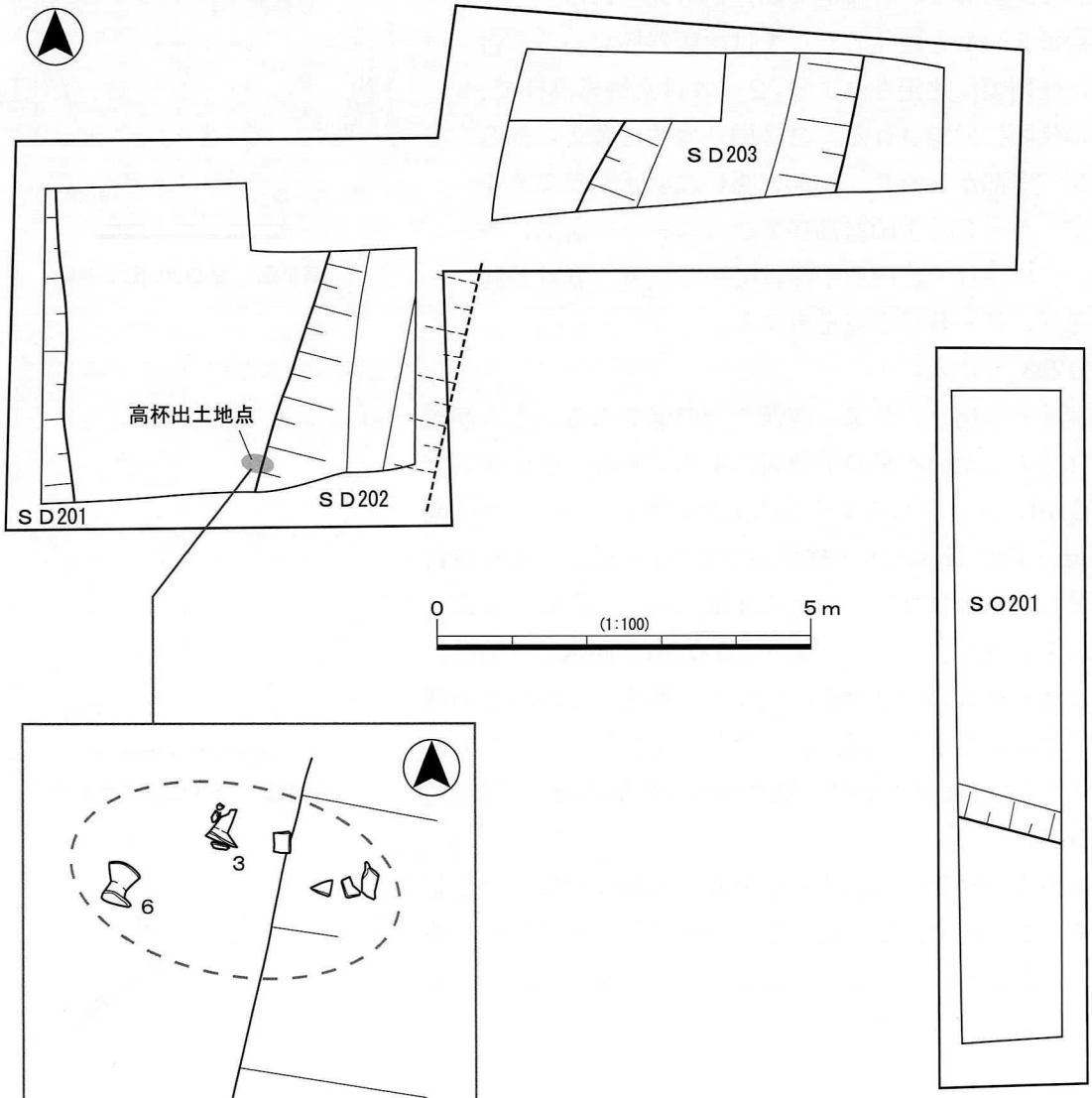
２区で検出した南北方向の溝である。幅15～30cm・深さ約５cm・検出長約3.0mを測る。断面逆台形を呈し、埋土はＳＫ101と同じである。

〈第２面(T.P.+6.0m)〉

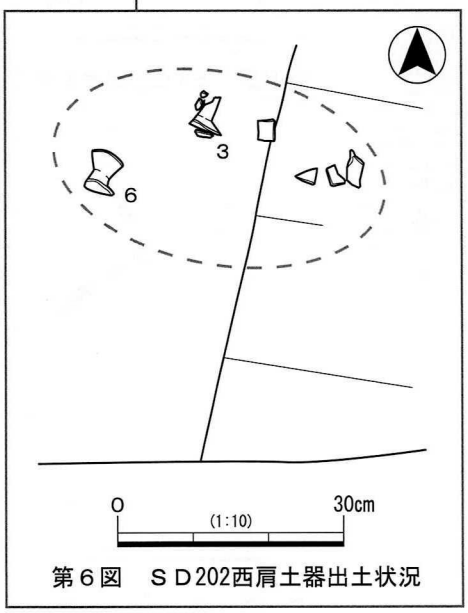
５・８層上面で溝３条（ＳＤ201～203）、落ち込み１基（ＳＯ201）を検出した。

ＳＤ201

１西区西端で検出した南北方向の溝である。東肩のみの検出で、規模は深さ約25cm・検出長約4.2mを測る。遺構確認調査２区で検出した溝ＳＤ１の東肩にあたると考えられることから、幅は1.3～2.0mを測る。断面皿状と考えられ、埋土はブロック状の２層(A1・A2層)からなる。遺物は



第５図　第２面平面図



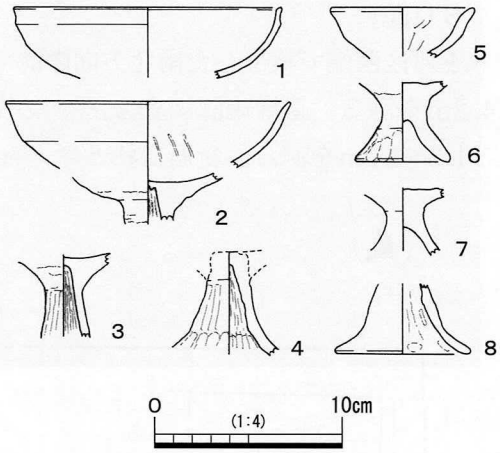
第６図　ＳＤ202西肩土器出土状況

ＳＤ１と同様に古式土師器と考えられる土器片が少量出土しており、時期は古墳時代前期に比定される。

ＳＤ202

１西区東部で検出した北東－南西方向の溝である。北部が撹乱により削平されているため、１東区では平面的には捉えられず南壁でのみ確認できた。規模は幅2.0m以上・深さ約40cm・検出長約3.3mを測る。断面逆台形を呈し、埋土はブロック状の２層(B1・B2層)からなる。遺物は古墳時代後期～奈良時代頃の土師器・須恵器が出土した。また南部西肩際ではミニチュア品を含む土師器高杯が数点出土しており、当溝との有機的な関連が考えられる。

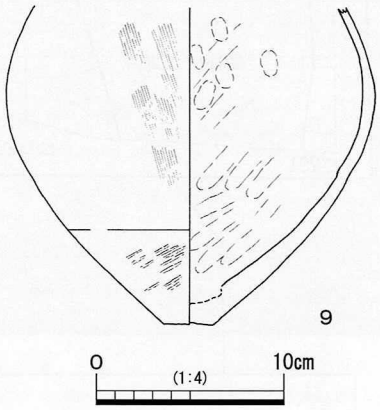
遺物は１～８を図化した。１は土師器杯である。古墳時代後期頃に比定されよう。２～４は土師器高杯で、飛鳥時代頃に比定される。２は同一個体と考えられる口縁部・底部からなり、内面に粗い放射状ヘラミガキを施す。５～８は土師器高杯で、ミニチュア製品にあたる。５は杯部で、内面が煤けている。６～８は基部～脚部で、７・８は黒斑を有する。



第７図　ＳＤ202出土遺物

ＳＤ203

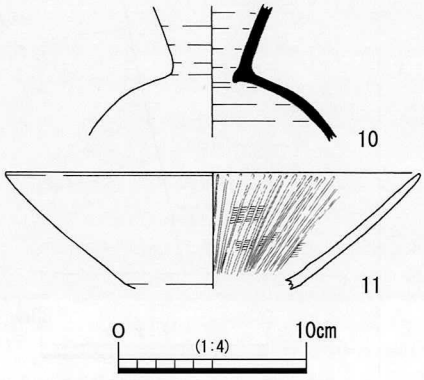
１東区で検出した北東－南西方向の溝である。上部が撹乱されているため本来の構築層は不明である。断面観察ではＳＯ201に削平されるような状況が確認できた。規模は幅約3.0m・深さ最大30cm・検出長約2.0mを測る。断面逆台形を呈し、埋土はブロック状の単層(Ｄ層)である。古式土師器(９)が出土しており、時期はＳＤ201と同様に古墳時代前期に比定される。９は壺の底体部である。摩耗のため調整は不明瞭であるが、外面はヘラミガキと思われ、下位には平行タタキも認められる。底体部外面に黒斑を有する。



第８図　ＳＤ203出土遺物

ＳＯ201

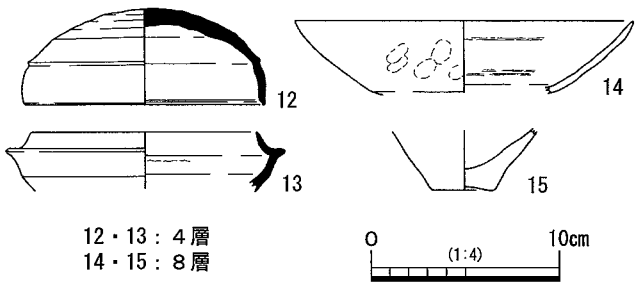
２区中央で検出した北西－南東方向の直線的な肩から北に落ち込むもので、２区北半を占めるほか、断面のみの確認であるが１東区の大部分も含んでいる。規模は南北10m以上・東西８m以上で、深さは最大60cmを測る。埋土は４層(C1～C4層)を確認した。遺物は古墳時代初頭～奈良時代頃までの土師器・須恵器が出土しており、10・11を図化した。10は須恵器で、壺かあるいは平瓶の可能性がある。肩部に灰が被る。飛鳥～奈良時代頃に比定される。11は古式土師器高杯である。内面調整はヨコハケ後放射状ヘラミガキである。古墳時代初頭後半(庄内式新相)に比定される。



第９図　ＳＯ201出土遺物

地層出土遺物

４層出土の12・13、８層出土の14・15を図化した。12は須恵器杯蓋で、６世紀初頭、13は須恵器杯身で、６世紀後半に比定される。14は古式土師器高杯で、古墳時代初頭後半（庄内式新相）に比定される。15は弥生土器の甕底部である。後期に比定される。



第10図　地層出土遺物

３．まとめ

調査では、古墳時代前期～中世の遺構・遺物を検出した。出土遺物量はコンテナ１箱を数える。第２面では古墳時代前期の溝、奈良時代頃の溝・落ち込みを検出した。

古墳時代前期では溝ＳＤ201・203がある。古墳時代前期の遺構は南部～東部の第４・５・８次調査、府教委1982・1983、北東部の第２次調査、北西部の第15次調査で検出している他、北西側に近接する第26次調査８区ではT.P.+6.0m前後で当該期の遺物を含む地層を確認している。八尾中学校校地の中央部には、小阪合分流路と呼ばれる弥生時代後期～古墳時代前期の主要河川が南東－北西方向に流れていたことが推定されている。そのため流心部に近いと考えられる北東部第27次調査ではこの時期の遺構は確認されておらず、河川両岸に集落域が展開しているようである。

奈良時代頃では溝ＳＤ202がある。周辺の調査地における奈良時代の遺構は、北東部の第27次調査で土坑や東西方向の溝、南東部の第４次調査で土器集積が検出されている程度であり、当該期の様相については不明な点が多い。ＳＤ202肩際からはミニチュアの土師器高杯が数点出土しており、何らかの祭祀が行われた可能性があり注目される。南東約300mの第12次調査では同じく溝から祭祀遺物である土馬が出土している。

第１面では中世頃の耕作関連遺構と考えられる土坑や溝が検出され、当地は中世以降は生産域となっている。

参考文献

・大野　薫1983『萱振遺跡発掘調査概要・Ⅰ－八尾市緑ヶ丘２丁目所在－』大阪府教育委員会
・阪田育功1984『萱振遺跡発掘調査概要・Ⅱ－八尾市緑ヶ丘２丁目所在－』大阪府教育委員会
・西村公助1990『萱振遺跡発掘調査概要報告　財団法人八尾市文化財調査研究会報告20』財団法人八尾市文化財調査研究会
・広瀬雅信1992『萱振遺跡　大阪府文化財調査報告書第39輯』大阪府教育委員会
・西村公助1993「Ⅳ　萱振遺跡第４次調査（ＫＦ86－４）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告　財団法人八尾市文化財調査研究会報告37』財団法人八尾市文化財調査研究会
・西村公助1993「Ⅴ　萱振遺跡第５次調査（ＫＦ87－５）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告　財団法人八尾市文化財調査研究会報告37』財団法人八尾市文化財調査研究会
・西村公助1993「Ⅵ　萱振遺跡第８次調査（ＫＦ89－８）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告　財団法人八尾市文化財調査研究会報告37』財団法人八尾市文化財調査研究会
・岡田清一1996「Ⅳ　萱振遺跡第15次調査（ＫＦ94－15）」『萱振遺跡　財団法人八尾市文化財調査研究会報告52』財団法人八尾市文化財調査研究会
・原田昌則2008「Ⅰ　萱振遺跡第12次調査（ＫＦ91－12）」『萱振遺跡　財団法人八尾市文化財調査研究会報告109』財団法人八尾市文化財調査研究会
・高萩千秋・原田昌則2011『萱振遺跡　第26次・第27次調査　財団法人八尾市文化財調査研究会報告133』財団法人八尾市文化財調査研究会

図版1

調査地（西から）

１西区機械掘削（東から）

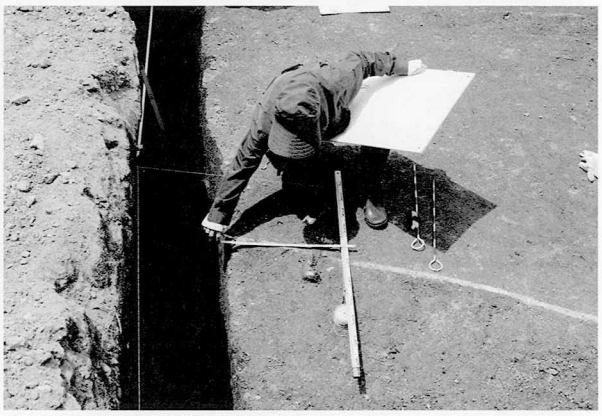
第１面２区全景（南から）

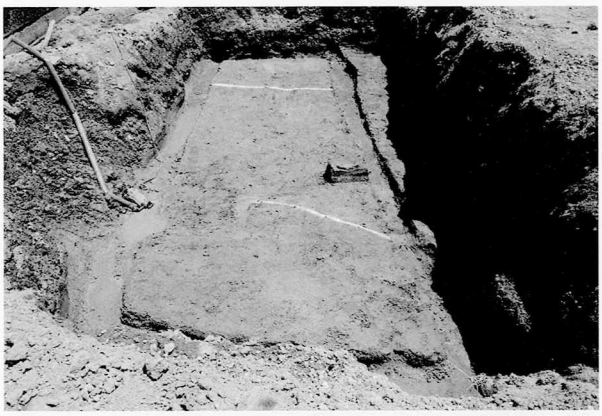
第１面２区ＳＫ101（南から）

第２面１西区ＳＤ201（北から）

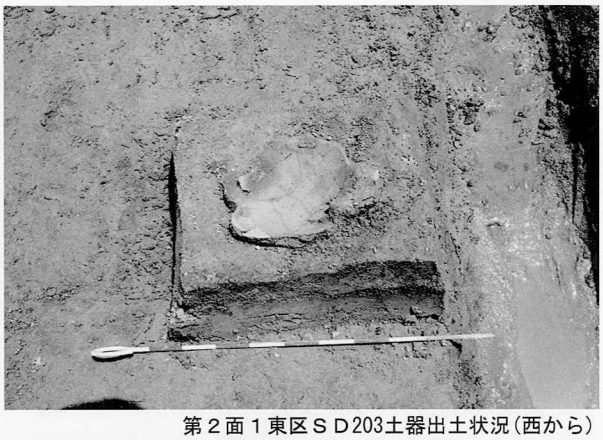
第２面１西区ＳＤ202（北から）

第２面１西区ＳＤ202西肩土器出土状況（北から）


第２面１西区調査状況（東から）

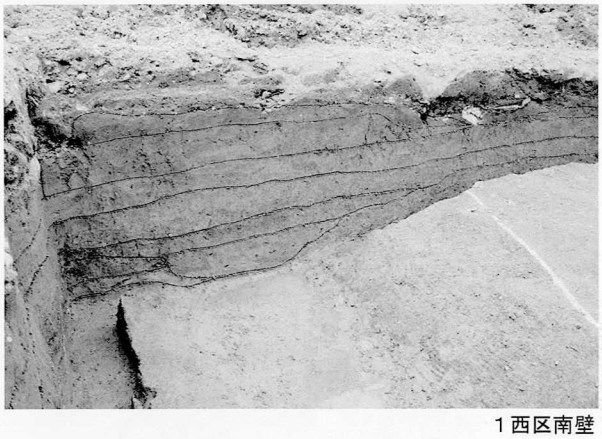


第２面１東区ＳＤ203（西から）



第２面１東区ＳＤ203土器出土状況（西から）

第２面２区全景（北から）

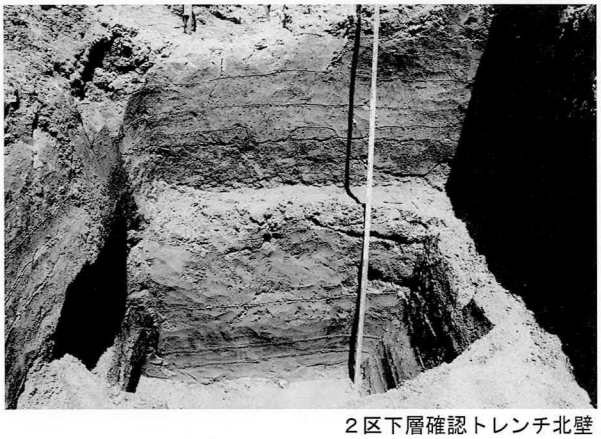


１西区南壁

１東区南壁

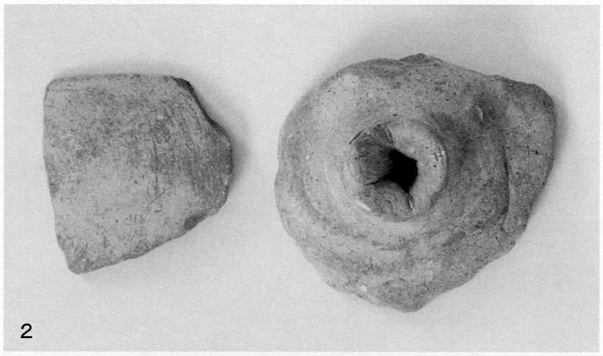
２区西壁

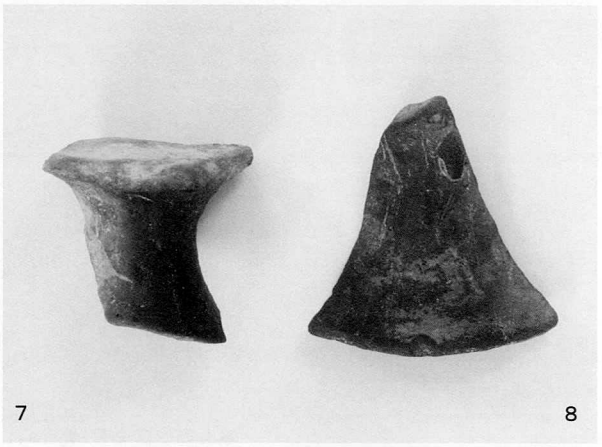
１西区下層確認トレンチ南壁

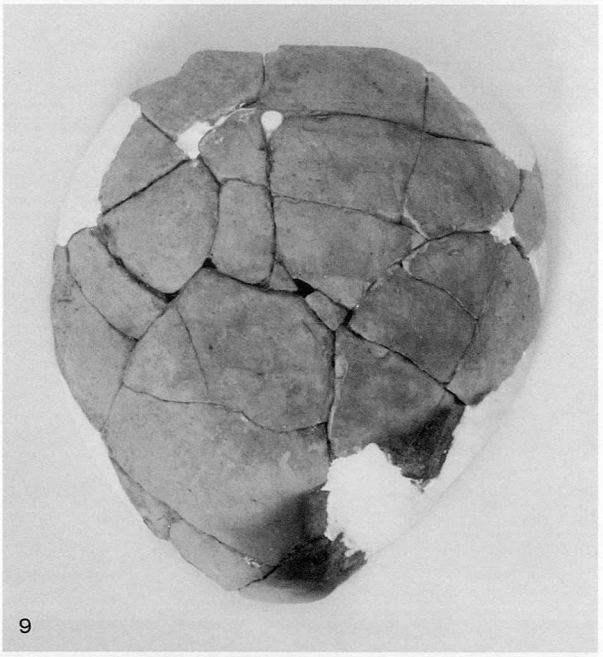


２区下層確認トレンチ北壁

図版3







Ⅳ　中田遺跡第52次調査（ＮＴ2011－52）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市八尾木北二丁目48番１、48番２で実施した寄宿舎建設に伴う発掘調査報告書である。

1．本書で報告する中田遺跡第52次調査（ＮＴ2011－52）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づくもので、申請者と財団法人八尾市文化財調査研究会（調査時）の間で、八尾市教育委員会を立会者として締結した契約により、財団法人八尾市文化財調査研究会が申請者から委託を受けて実施したものである。

1．調査は当調査研究会　坪田真一が担当した。

1．現地調査は、平成23年９月26日～９月30日（実働５日）に実施した。調査面積は約23㎡である。

1．現地調査には伊藤静江・梶本潤二・芝﨑和美・竹田貴子・永井律子・村井俊子・村田知子・山内千恵子が参加した。

1．内業整理は下記が行い、現地調査終了後に着手して平成26年３月をもって終了した。

　遺物復元－梶本・竹田・田島宣子

　遺物実測－飯塚直世・市森千恵子・芝﨑・永井・村井・村田

　遺物トレース－市森

1．本書の執筆・編集は坪田が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……31

2．調査概要……32

　1）調査の方法と経過……32

　2）１区の調査……32

　3）２区の調査……35

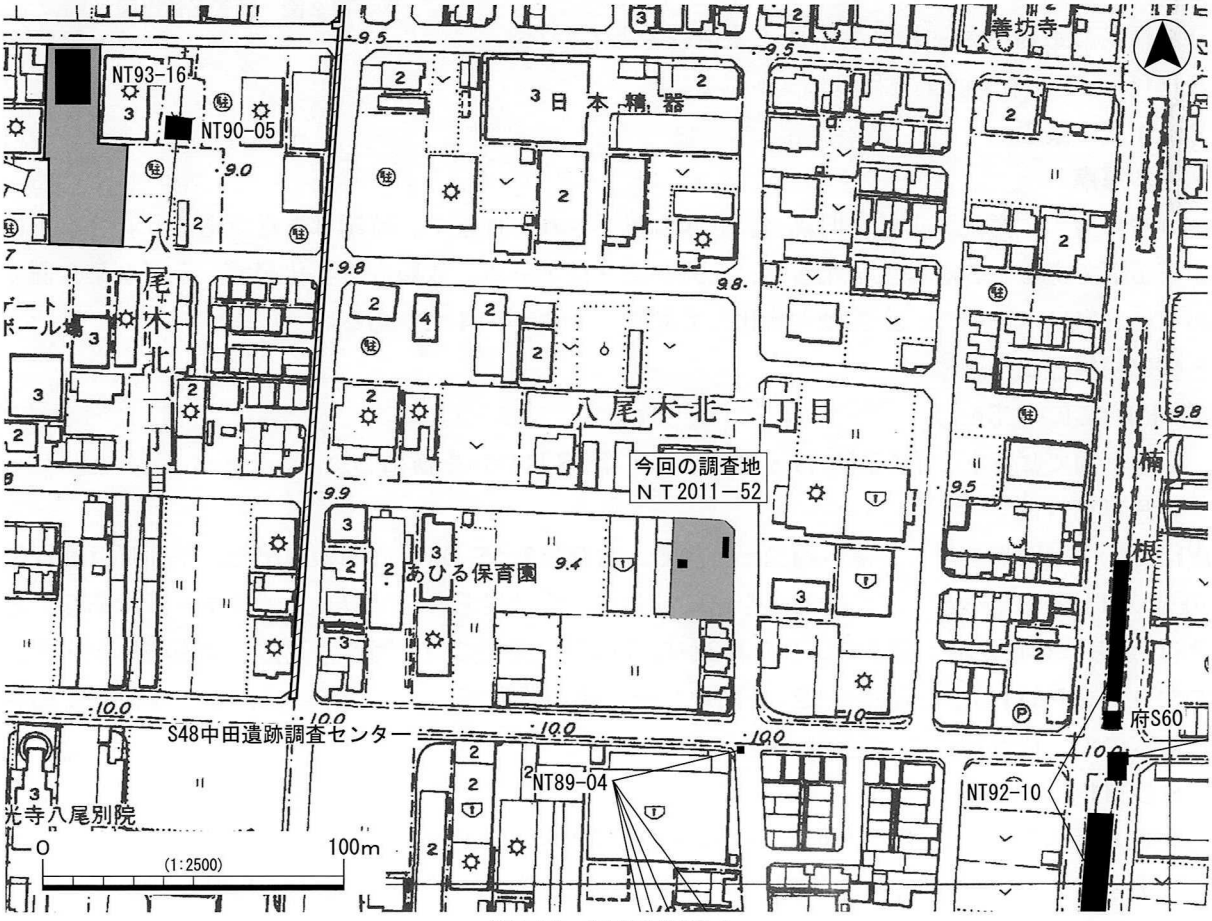
3．まとめ……40

Ⅳ　中田遺跡第52次調査（ＮＴ2011－52）

１．はじめに

中田遺跡は、八尾市のほぼ中央に位置し、現在の行政区画では中田１～５丁目、刑部１～４丁目、八尾木北１～６丁目がその範囲となっている。地理的には旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に立地し、北側で小阪合遺跡、西側で矢作遺跡、南側で東弓削遺跡に接している。当遺跡は、昭和45年の区画整理事業の際発見された遺跡で、以後中田遺跡調査会・中田遺跡調査センター・八尾市教育委員会・大阪府教育委員会・当調査研究会により調査が続けられている。これらの調査成果から、当遺跡は弥生時代中期～古墳時代前期を中心に、弥生時代前期～中世にわたる複合遺跡であることが確認されている。また同地形上に展開する東郷遺跡・小阪合遺跡等を包括して「東郷・中田遺跡群」と称されており、これらの遺跡は特に古墳時代初頭～前期において最盛期を迎えることが確認されている。

今回の調査地周辺では、北西部で第５次・第16次調査、南部で第４次調査、南東部で第６次・第10次調査を実施している。第５次・第16次・第６次・第10次調査では主に古墳時代前期の集落遺構を検出しており、第10次調査出土の陶質土器の可能性がある壺は特筆される。また第４次調査では弥生時代前期～中期の遺構を確認している。



第１図　調査地位置図

2．調査概要

1）調査の方法と経過

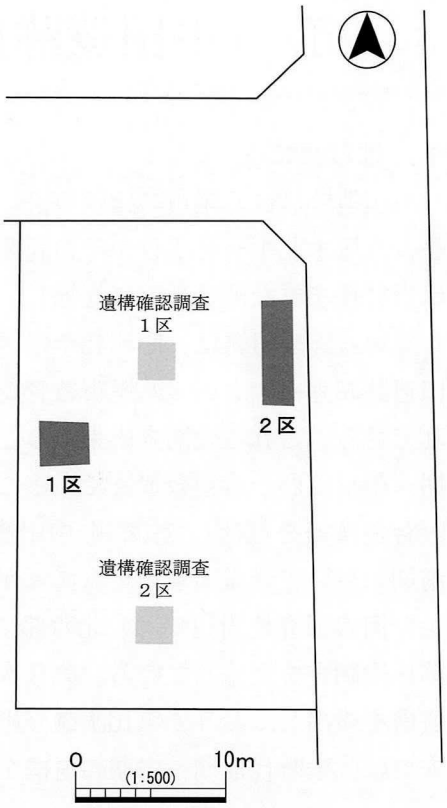
今回の調査は、平成23年８月23日に実施した遺構確認調査〈中田遺跡(2011-200)〉の結果を受けて実施した寄宿舎建設に伴う調査で、当調査研究会が中田遺跡内で行った第52次調査(ＮＴ2011－52)である。

調査区は２箇所(西から１・２区)で、調査区平面形は１区が東西3.0m・南北3.0mの正方形、２区が東西2.0m・南北7.0mの長方形を成す。調査は１・２区を並行して実施した。

掘削は、現地表(約T.P.+10.1～10.5m)下約0.9mまでを機械掘削し、以下の約0.5mを人力掘削により調査を行った。また２区では下層確認において古墳時代前期の遺物包含層を確認したため、中間層を機械掘削した後、人力掘削により現地表下約2.0mまで調査を行った。

調査で使用した標高の基準は、調査地北東部に位置する八尾市街区多角補助点〈3E034：T.P.+10.086m〉である。

遺構名は遺構略号＋地区名＋面＋遺構番号とした(例、ＳＰ111：１区第１面１番目のピット)。



第２図　調査区位置図

2）１区の調査

・基本層序

０層は盛土・撹乱。１層は旧耕土。２層も撹拌された作土で、時期は近世であろう。２層下面が第１面である。３層は土壌化層で、上面が第２面である。４層も土壌化層で、上面が第３面である。５層は水成層で、上面が第４面である。

・検出遺構と出土遺物

〈第１面(T.P.+9.5m)〉

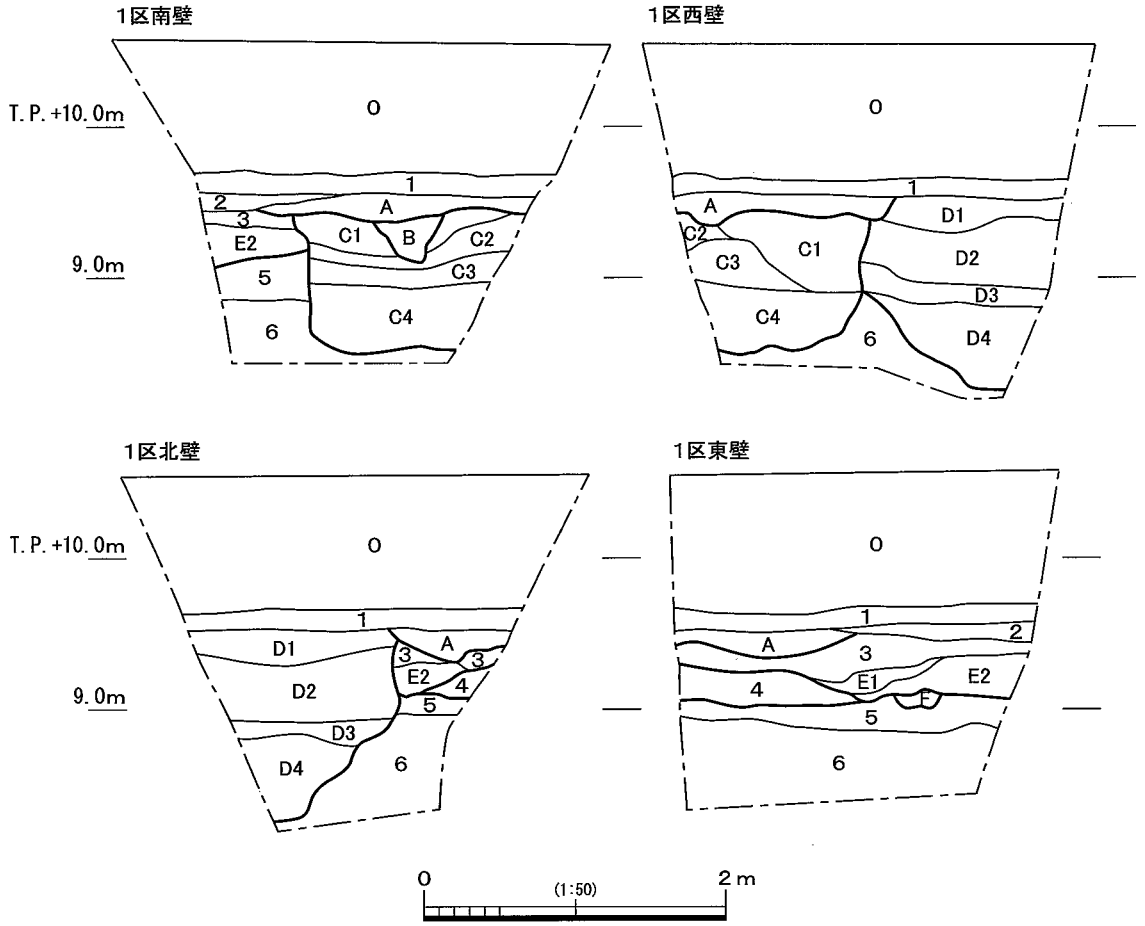
２層下面でピット２個(ＳＰ111・112)、溝１条(ＳＤ111)を検出した。

ＳＰ111・112

直径約20cmの円形を呈し、深さ約22cmを測る。ＳＰ112はＳＤ111底部の検出で、平面形は直径約40cmの円形と考えられ、深さ約32cmを測る。共に埋土は炭を含むブロック状の単一層である。ＳＰ111からは13世紀前半頃まで、ＳＰ112からは12世紀代までの土師器・瓦器・須恵器片が出土しており、ＳＰ111出土の瓦器椀(２)を図化した。浅い器形で、ヘラミガキは内面のみに粗く施されるもので、13世紀代に比定される。

ＳＤ111

北東－南西方向に延び、平面形は幅35～95cmの不定形を成す。埋土はブロック状の単一層で、耕作関連遺構の可能性が高い。12世紀代の土師器・瓦器・須恵器片が出土しており、土師器皿(１)を図化した。口縁部のヨコナデにより、底部との境には外面に明瞭な段が生じている。



０．盛土・撹乱
１．7.5GY4/1暗緑灰色細粒砂～粗粒砂少混シルト　旧耕土
２．5GY5/1オリーブ灰色細粒砂～粗粒砂混シルト　撹拌作土
３．10YR6/1褐灰色細粒砂～極粗粒砂混シルト　Mn斑　Fe斑　土壌化層
４．2.5Y6/2灰黄色極細粒砂混粘土質シルト　Fe斑多　土壌化層
５．5Y6/2灰オリーブ色粘土質シルト細粒砂～粗粒砂少混シルト　上部土壌化　水成層
６．2.5Y6/2灰黄色細粒砂～粗粒砂　水成層

ＳＤ111
Ａ．2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂～中粒砂混シルト

ＳＰ111・112
Ｂ．2.5Y5/1黄灰色極細粒砂～細粒砂混シルト　炭

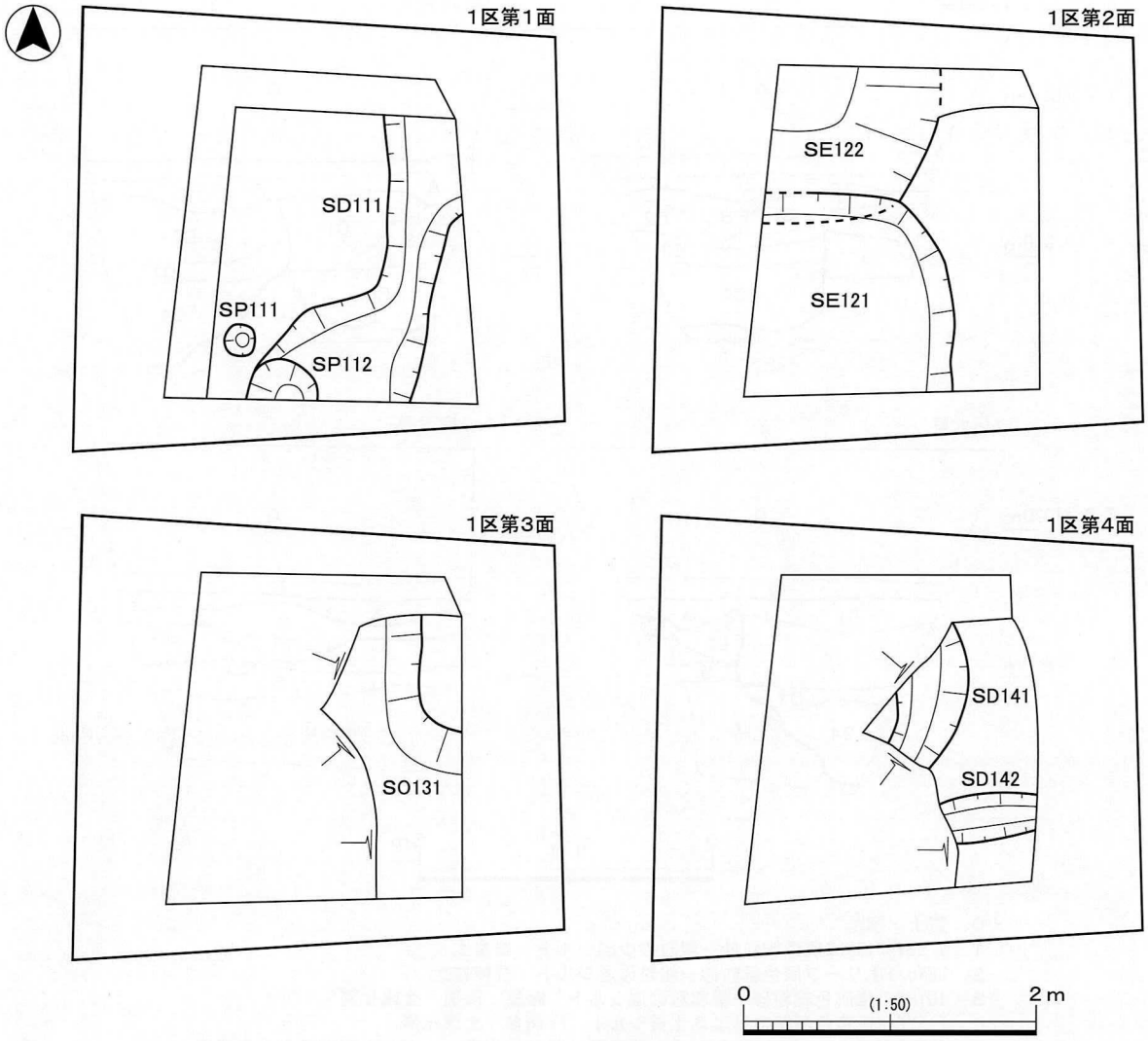
ＳＥ121
C1．10YR6/1褐灰色粘土質シルトブロック混細粒砂～粗粒砂　Fe斑　ブロック状
C2．2.5Y6/1黄灰色細粒砂～粗粒砂多混粘土質シルト　Fe斑　ブロック状
C3．10YR5/2灰黄褐色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト　Fe斑　ブロック状
C4．7.5GY4/1暗緑灰色シルト質粘土～細粒砂互層

ＳＥ122
D1．10YR6/2灰黄褐色極細粒砂～極粗粒砂混シルト　Mn斑　Fe斑　ブロック状
D2．10YR5/2灰黄褐色細粒砂～極粗粒砂多混シルト　Mn斑多　Fe斑多　ブロック状
D3．5GY5/1オリーブ灰色極細粒砂～細粒砂多混粘土質シルト　Fe斑多　ブロック状
D4．5BG4/1暗青灰色細粒砂混シルト質粘土　炭　一部ラミナ

ＳＯ131
E1．10YR6/3にぶい黄橙色極細粒砂少混シルト質粘土　Mn斑　Fe斑
E2．10YR4/2灰黄褐色極細粒砂～粗粒砂多混シルト　Mn斑

ＳＤ141・142
Ｆ．10YR5/2灰黄褐色細粒砂～極粗粒砂混シルト　Mn斑

第３図　１区断面図



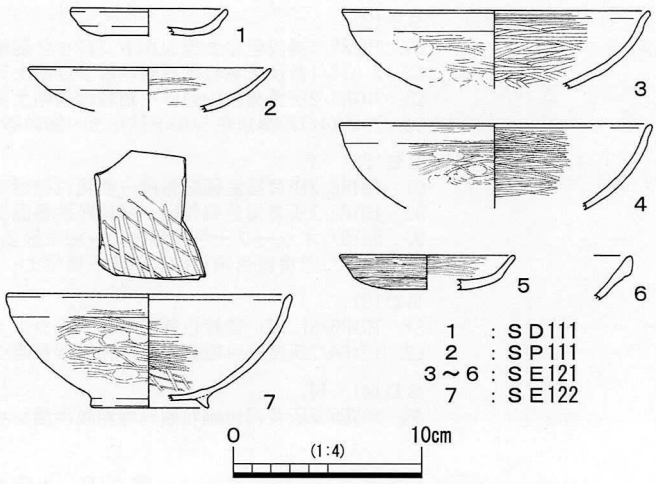
第４図　１区平面図

〈第２面(T.P.+9.4m)〉

３層上面で井戸２基(ＳＥ121・122)を検出した。

ＳＥ121

調査区北西部に位置しており、井戸南東部を検出した。掘方は円形を呈すると思われるが全容は不明である。規模は径約1.1m以上・深さ約1.3mで、断面逆台形を呈し、埋土は４層から成る。曲物の残片が出土しており、曲物井戸であったと考えられる。遺物は12世紀後半までの土師器・瓦器・輸入白磁が出土しており、３～６を図化した。３・４は瓦器椀である。ヘラミガキは内面が密で、外面はやや粗い。５は瓦器皿で、内外面のヘラミ



第５図　１区出土遺物

ガキは比較的密である。６は玉縁状口縁の中国製白磁碗である。これらの遺物は12世紀後半に比定される。

ＳＥ122

ＳＥ121の掘方を切って南に隣接しており、井戸北東部を検出した。掘方は方形に近いと思われるが全容は不明である。規模は径約1.4m以上・深さ約0.9mで、断面方形を呈し、埋土は４層から成る。遺物は12世紀後半までの土師器・瓦器・須恵器が出土しており、瓦器椀（７）を図化した。ＳＥ121出土の３・４と同様に、ヘラミガキは内面が密で、外面はやや粗く、見込みの暗文は斜格子状である。12世紀後半に比定される。

〈第３面（T.P.+9.3m）〉

４層上面で落ち込み１基（ＳＯ131）を検出した。

ＳＯ131

調査区北東部に見られる４層を肩とし、西・南に落ち込む状況である。深さ約15cm程度で、埋土は２層からなる。遺物は出土していない。

〈第４面（T.P.+9.1m）〉

５層上面で溝２条（ＳＤ141・142）を検出した。

ＳＤ141は南北方向に延びる弧状を成し、規模は幅30～50cm・深さ約15cmを測る。ＳＤ142は東西方向に伸び、規模は幅約30cm・深さ約10cmを測る。埋土は同じ単一層である。遺物はＳＤ141から弥生時代後期～古墳時代初頭頃の土器片１点が出土したのみで、遺構の時期は不明である。

３）２区の調査

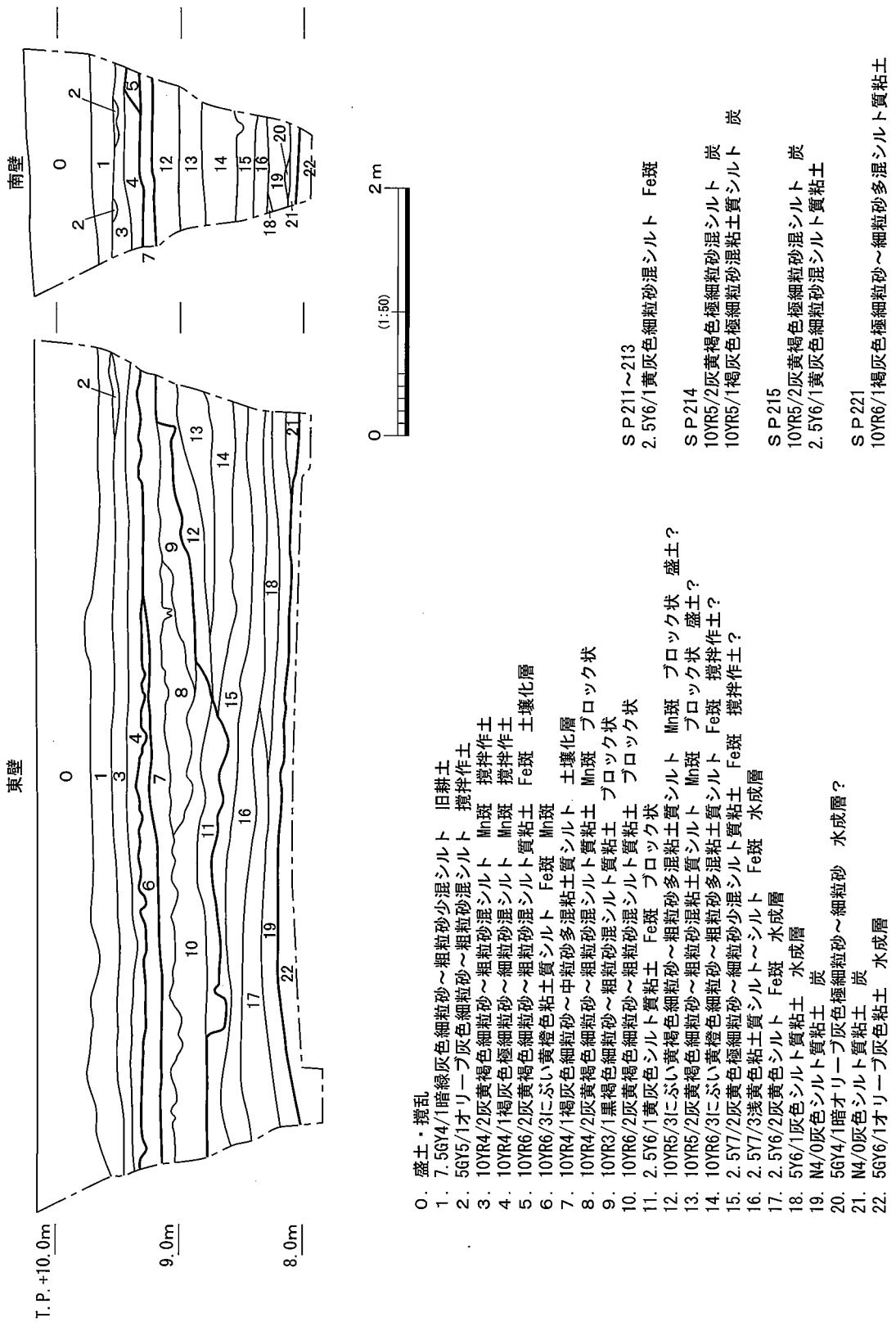
・基本層序

０～２層は１区と同じである。３・４層は撹拌された作土で、時期は中世～近世であろう。５層は南部で見られた土壌化層である。４層下面、５層上面が第１面である。６層は土壌化層で、作土の可能性がある。７層も土壌化層で、下部には奈良時代頃までの土器等が多く含まれており、この頃の整地層である可能性がある。上面が第２面である。８～11層はブロック状を呈し、第３面ＳＯ231の埋土にあたる。９層は暗色を呈する。12・13層は南部で見られ、ブロック状を呈する。12層上面が第３面である。14・15層は撹拌された土壌化層で、作土の可能性がある。16層以下は粘土～シルトを基調とし、水成層と考えられるが、19・21層は炭を多く含む層相で、古墳時代前期の遺物包含層となっている。このことから22層上面が遺構面である可能性があり、第４面とした。

・検出遺構と出土遺物

〈第１面（T.P.+9.4m）〉

４層下面、５層上面でピット５個（ＳＰ211～215）を検出した。北部のＳＰ211～213については、作土である４層を埋土としていることから、耕作痕の可能性が高い。ＳＰ214は南北30cm・東西25cmの偏円形を成し、深さ約35cmを測る。埋土は炭を含む２層から成る。遺物は12世紀代の土師器・瓦器・須恵器片が出土しており、土師器杯（９）を図化した。内面に粗いヘラミガキを施すもので、口縁部が煤けている。ＳＰ215は南北32cm・東西25cmの不定形を成し、深さ約17cmを測る。埋土は２層から成る。12世紀代の土師器・瓦器片が出土しており瓦器椀（８）を図化した。８は内面に比較的密にヘラミガキを施すもので、12世紀後半に比定される。



第６図　２区断面図

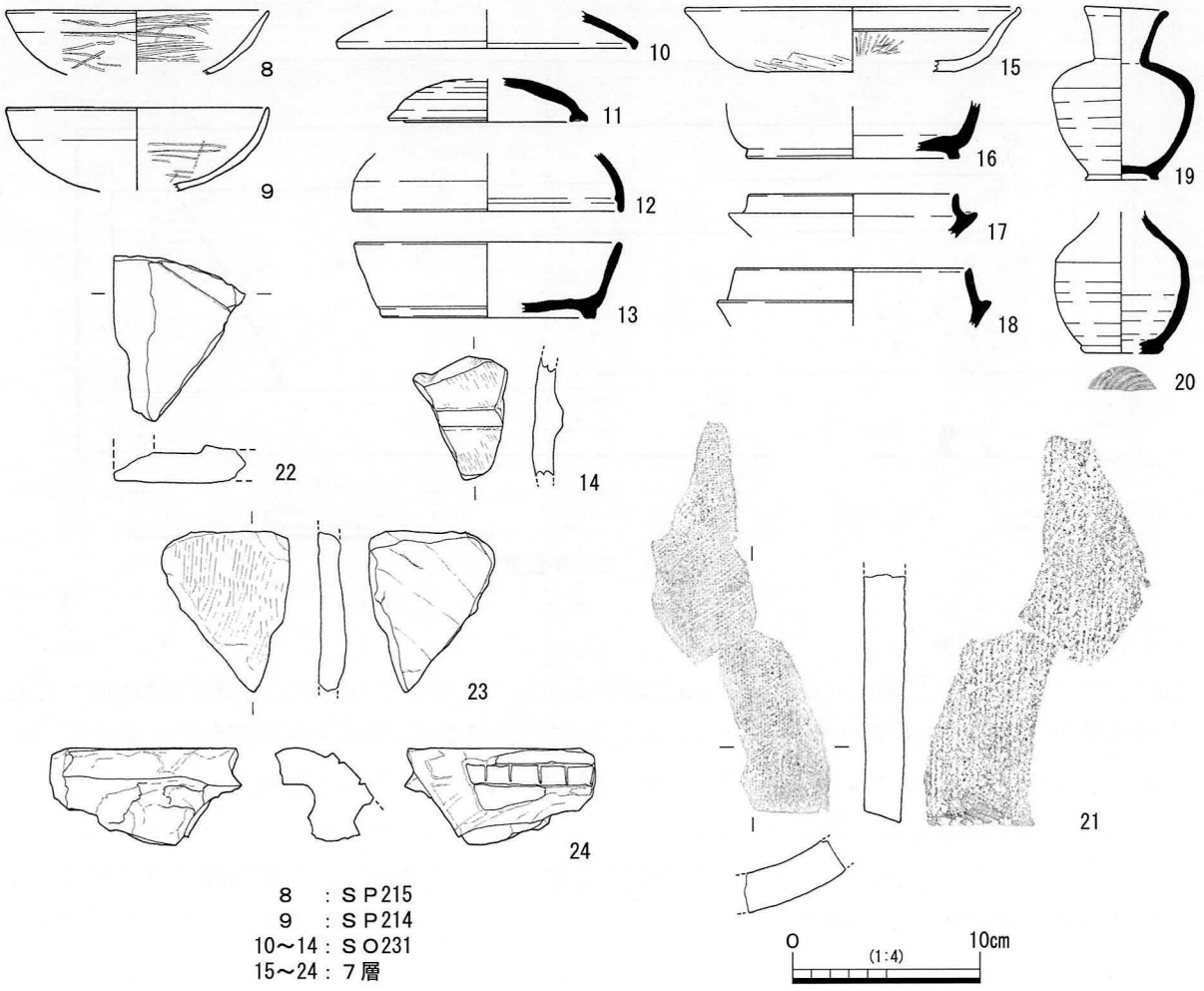
〈第２面(T.P.+9.3m)〉

６・７層上面でピット１個(ＳＰ221)を検出した。南北30cm・東西35cmの楕円形を成し、深さ約13cmを測る。埋土は単一層で、遺物は12世紀代頃の土師器の他、円筒埴輪片が出土した。

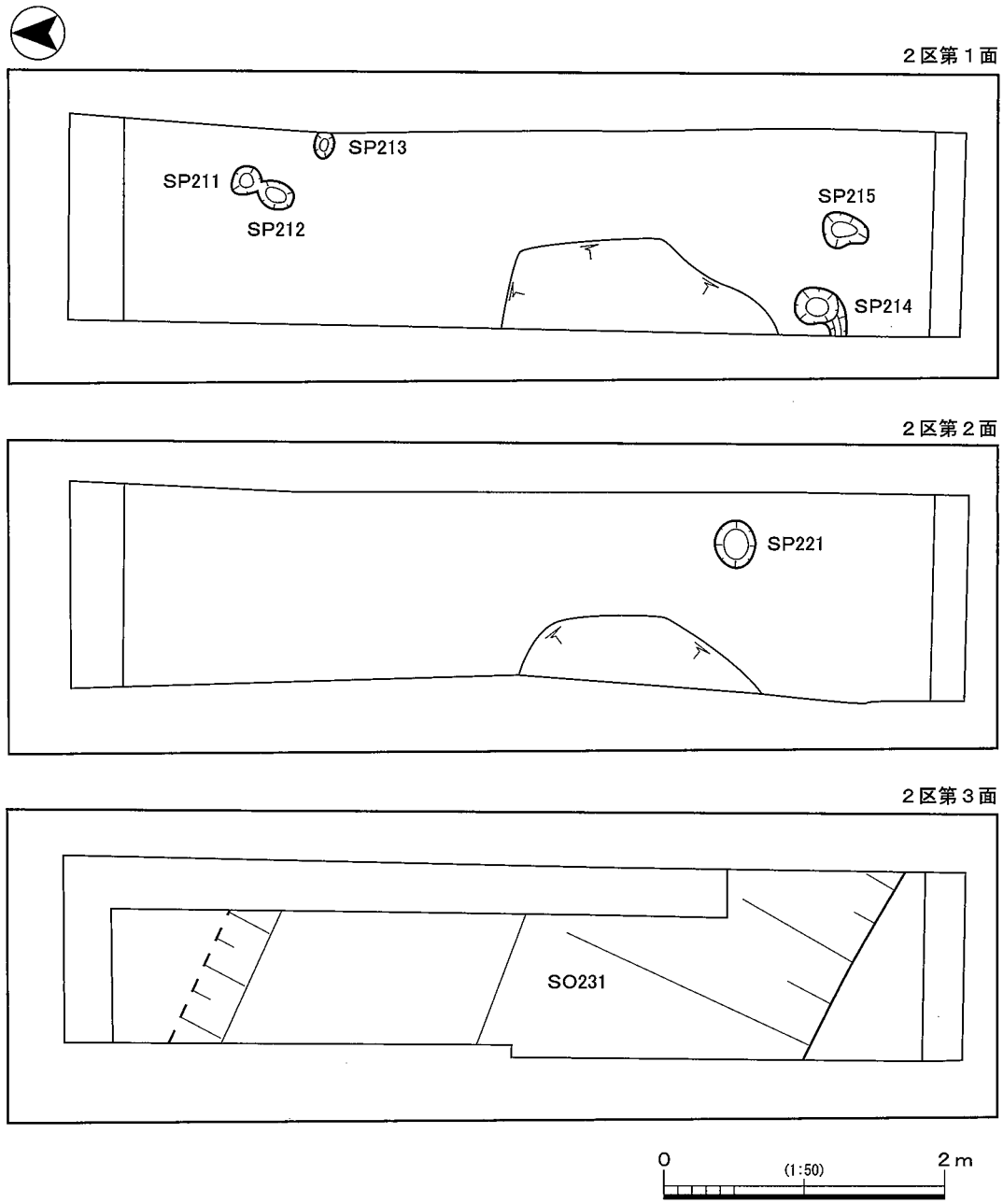
〈第３面（T.P.+9.2m）〉

12層上面で落ち込み１基（ＳＯ231）を検出した。12層は調査区南部に見られ、北西－南東方向の直線的な肩から北東方向に落ち込むものである。規模は検出部分の肩の延長約1.5m・深さ最大0.6mを測り、ブロック状の８～11層が埋土に当たる。遺物は古墳時代後期～奈良時代の土師器・須恵器の他、円筒埴輪・形象埴輪が出土した。肩を形成する12・13層はブロック状を呈しており、埋土から埴輪が出土していることから勘案して、12・13層を墳丘盛土とする古墳の存在が想定でき、ＳＯ231は周溝にあたる可能性が高い。平面的には捉えられなかったが、11層堆積部分が溝状を呈していることから、周溝の底部にあたる可能性があり、この場合周溝幅は約４ｍとなる。なお遺構確認調査２区においても、北西－南東方向の直線的な肩を有する溝を検出しており、ここからも埴輪が出土している。この溝が対面の周溝であると想定すると、一辺（直径）18m程度の方墳が復元できる。

出土遺物のうち10～14を図化した。10～12は須恵器杯蓋である。10は奈良時代、11は飛鳥時代、12は古墳時代後期に比定される。13は須恵器杯身で、奈良時代に比定される。14は円筒埴輪である。凸帯は低い台形で、外面にはタテハケが認められる。Ⅴ期に位置付けられ、時期は６世紀代に比定される。



第７図　２区出土遺物①

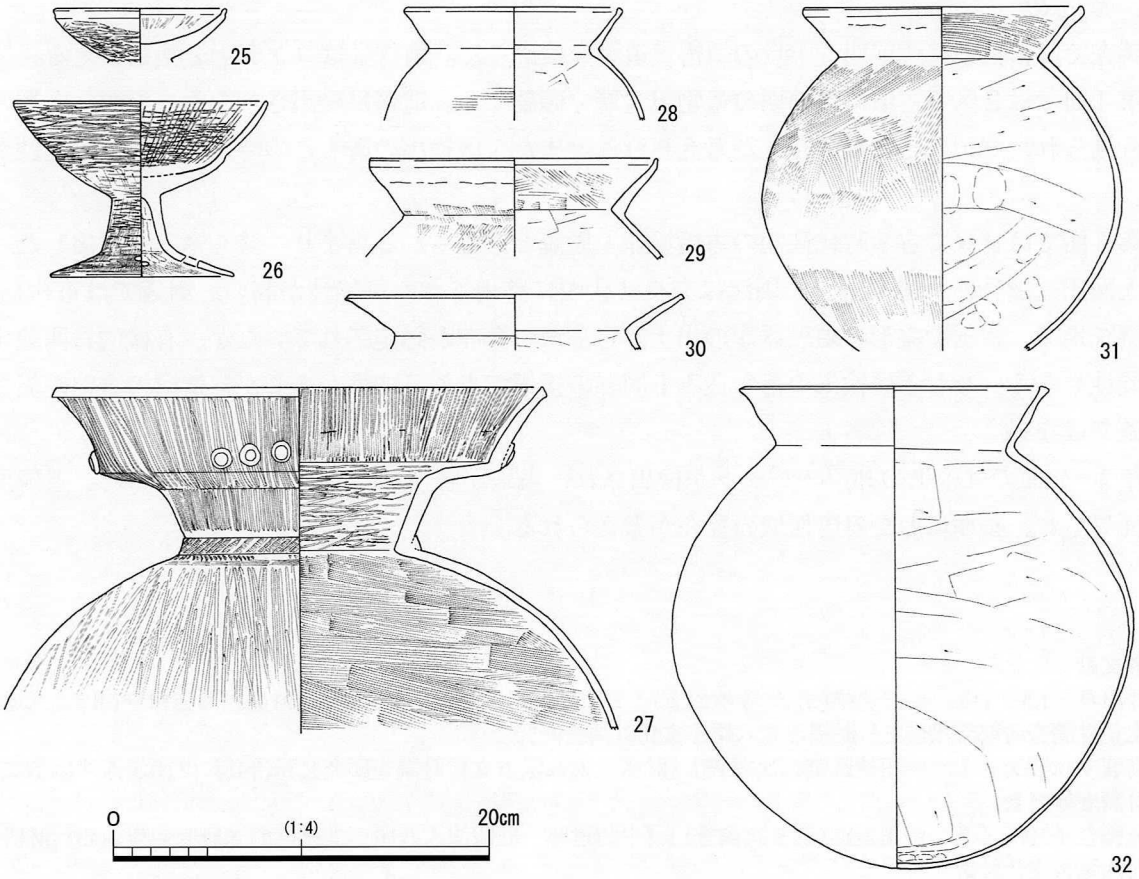


第8図　2区平面図

〈第4面(T.P.+8.2m)〉

19・21層から古墳時代前期(布留式期)の土器が出土しており、22層上面が該期の遺構面となる可能性があり、居住域の存在が考えられる。遺物の出土状況では、調査区北西部角で完形の甕(32)が横位で出土した他、中央部・南部では壺の口縁部(27)や甕(31)が出土した。

遺物は25～32を図化した。25はヘラミガキを多用する精製の小形器台である。口縁部内面は放射状ヘラミガキを施す。26はヘラミガキを多用する精製の小型高杯で、杯部内面には放射状ヘラミガキを施す。脚部には先行するハケが認められる。なお火を受けた破片が認められる。27は大形の複合口縁壺で、口頸部は完存しており、口径26.2cmを測る。調整はヘラミガキを多用し、肩部外面最上位にヨコハケが認められる。体部内面はヨコハケである。装飾では口縁部外面に中央が突



第９図　２区出土遺物②

出する円形浮文（３個一組）を４方向に配する他、頸基部には刻み目を施した凸帯を巡らせる。口頸部内面に黒斑を有する他、26と同様、火を受けた破片が認められる。28～32は甕で、29～31が古墳時代初頭後葉（庄内式新相）、28・32が古墳時代前期前葉（布留式古相）に比定される。32はほぼ完形で、口径16.5cm、器高25.5cm、体部最大径24.5cmを測る。調整は口縁部ヨコナデ、底体部外面ナデ（極めて細かいハケ）、内面ヘラケズリである。外面は全体に煤ける。

〈７層出土遺物〉

７層は第２面のベース層で、整地層の可能性がある。奈良時代頃までの土器等が多く出土しており、15～24を図化した。15は土師器杯である。内面には放射状のヘラミガキ、底部外面にはヘラケズリを施す。16～18は須恵器杯身で、16は奈良時代、17は古墳時代後期後半、18は古墳時代後期初頭に比定される。19・20は須恵器壺で、19は高台を有し、20は平底で、底面には糸切り痕が認められる。19は口縁部が歪んで平面楕円形を呈するもので、口径4.0～4.5cm・器高9.2cm・体部最大径7.6cm・底径3.8cmを測る。口縁部内面・肩部外面に灰が被る。21は平瓦で、焼成良好で須恵質に近い。凹面布目、凸面縄目タタキである。22～24は埴輪である。22は屈曲部分を有する板状の破片で、表面には段を成す。調整はナデである。家形埴輪の壁等が考えられる。23は円筒埴輪と考えられる。外面調整はタテハケで、表面には朱塗りを施しているようである。24は切妻あるいは入母屋造の家形埴輪の屋根と考えられる。頂部付近の端部にあたり、破風板の接合面が認められる他、線刻により押縁が表現されている。

３．まとめ

調査では、古墳時代前期～中世の遺構・遺物を検出した。遺物量はコンテナ２箱を数える。

第４面では２区で古墳時代前期の遺物包含層を確認した。遺構は検出されなかったが、完形の土器も見られ、周辺に居住域の存在が考えられる。また１区検出の溝もこの時期にあたる可能性がある。

第３面では２区で古墳時代後期の古墳墳丘・周溝と考えられる高まり・落ち込みを検出した。周溝上面出土遺物から勘案して、周溝は奈良時代頃に整地された可能性が高い。周辺では東約150mの調査地で、管玉や完形の須恵器壺の出土から墓域の存在が想定されていたが、有機的に関連する可能性もある。なお１区検出の落ち込みも同様の遺構である可能性があるが、遺構の方位が異なり明確ではない。

第１・２面では中世の井戸・ピットが検出され、当地が居住域であることを確認した。遺構面は２面見られ、長期にわたる居住域の存在が考えられる。

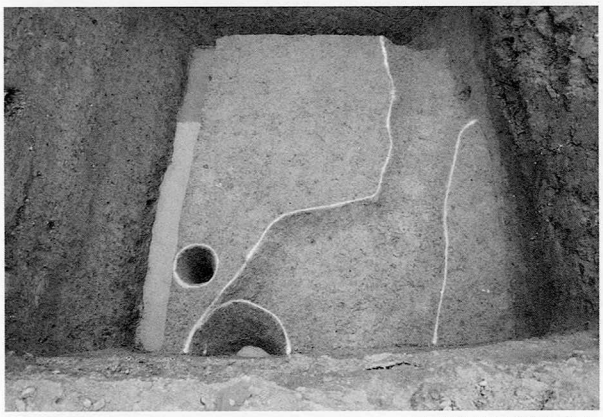
参考文献

・坪田真一1992「Ⅱ　中田遺跡(第３・４次調査)」『平成４年度　八尾市埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅱ)　八尾市文化財調査研究会報告35』財団法人八尾市文化財調査研究会
・高萩千秋1994「Ⅰ　中田遺跡第16次調査」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告43』財団法人八尾市文化財調査研究会
・成海佳子1995「Ⅰ　中田遺跡(第５次調査)」『中田遺跡　財団法人八尾市文化財調査研究会報告49』財団法人八尾市文化財調査研究会
・成海佳子1995「Ⅱ　中田遺跡(第６次調査)」『中田遺跡　財団法人八尾市文化財調査研究会報告49』財団法人八尾市文化財調査研究会
・原田昌則2004「Ⅵ　中田遺跡第10次調査(NT92-10)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告81』財団法人八尾市文化財調査研究会
・樋口　薫2009「Ⅰ－３－７)中田遺跡(2007-290)の調査」『八尾市内遺跡平成20年度発掘調査報告書　八尾市文化財調査報告59　平成20年度国庫補助事業』八尾市教育委員会
・樋口　薫2012「Ⅱ－３－32)中田遺跡(2011-200)の調査」『八尾市内遺跡平成23年度発掘調査報告書　八尾市文化財調査報告69　平成23年度国庫補助事業』八尾市教育委員会

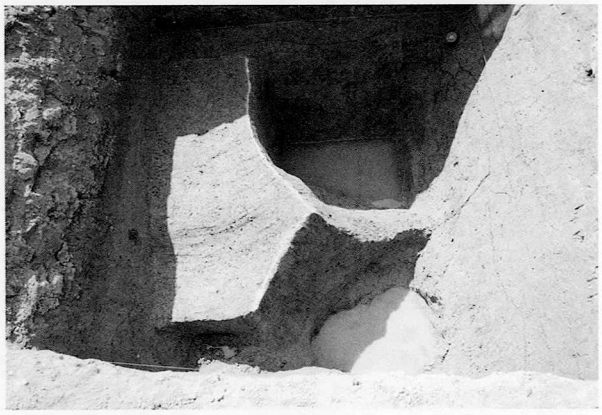
図版1

調査地（北から）

１区機械掘削（南から）



１区第１面（南から）



１区第２面（北から）

１区ＳＥ121（北東から）

１区ＳＥ122（南東から）

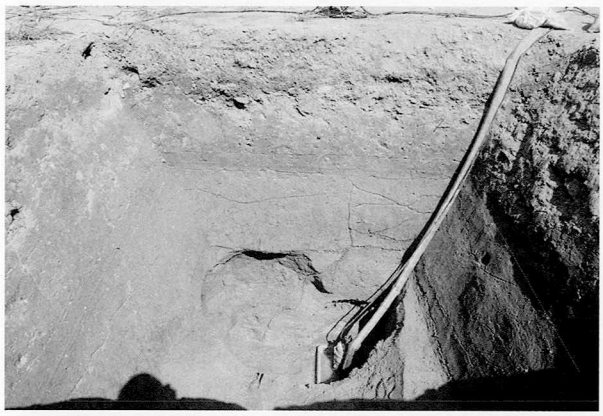
１区第３面（西から）

１区第４面（南から）

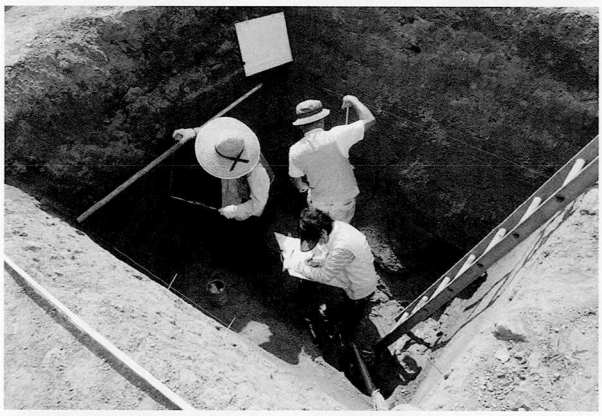
図版2

1区南壁

1区西壁

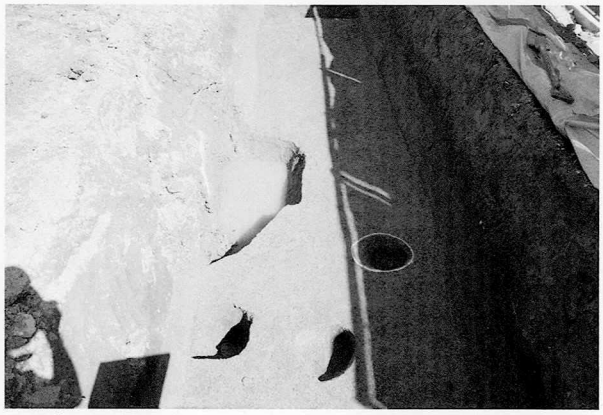

1区北壁

1区東壁


1区調査状況(北東から)

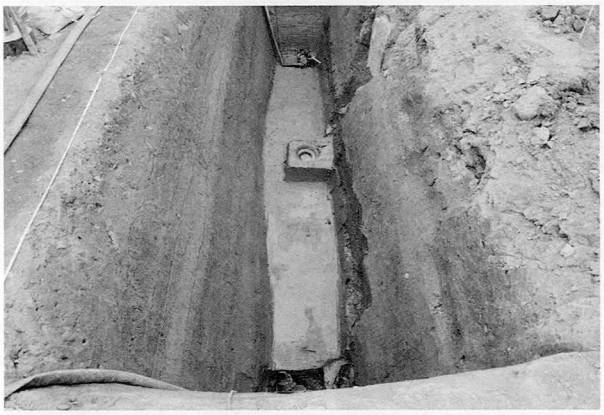
2区機械掘削(南から)

2区第1面(南から)


2区第2面(南から)

２区第３面（北から）

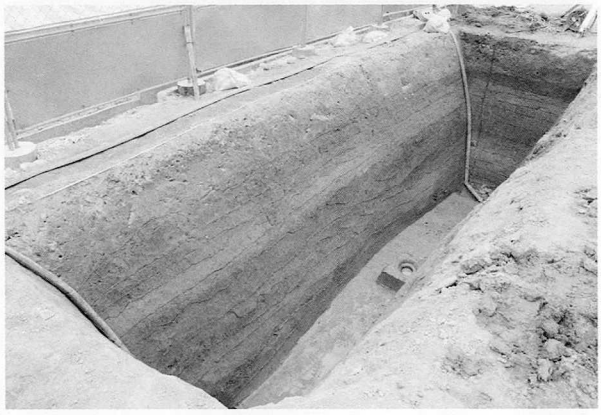
２区第３面北部（北西から）



２区第４面（北から）

２区第４面土器出土状況（南東から）

２区第４面土器出土状況（南から）

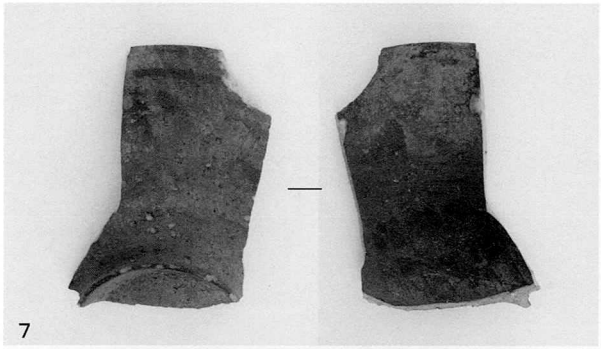


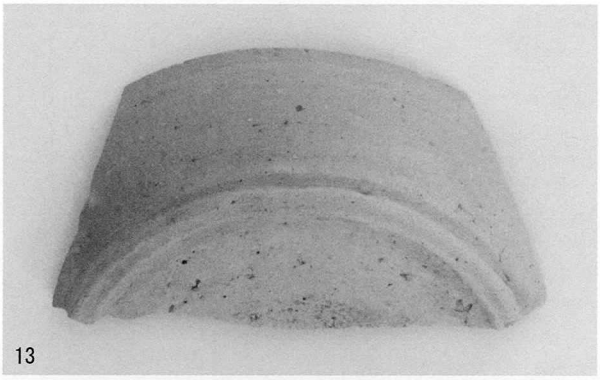
２区東壁

２区調査状況（南から）

２区調査状況（南から）

図版4


7

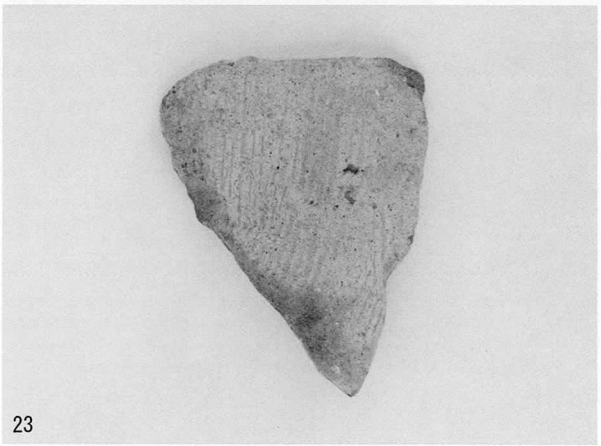

13

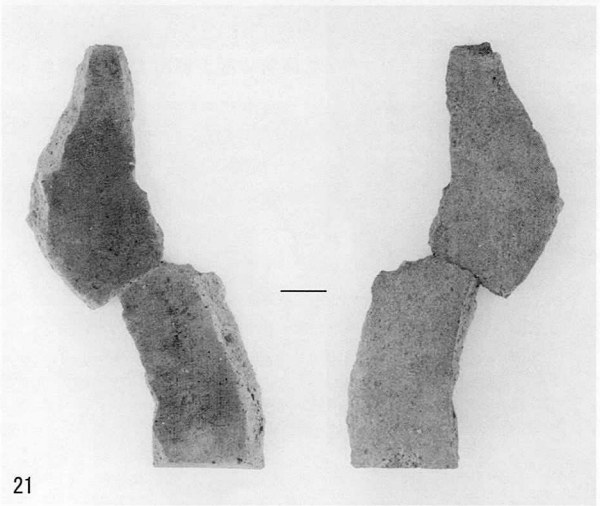
14

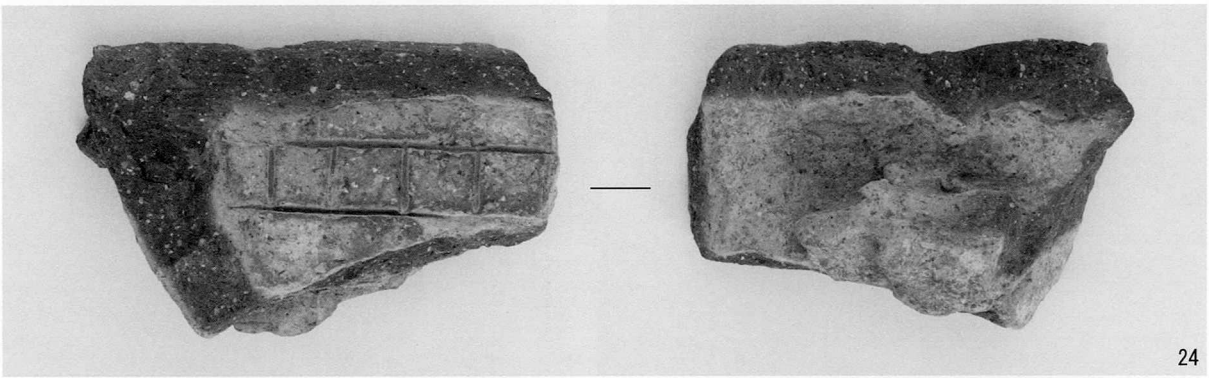
19

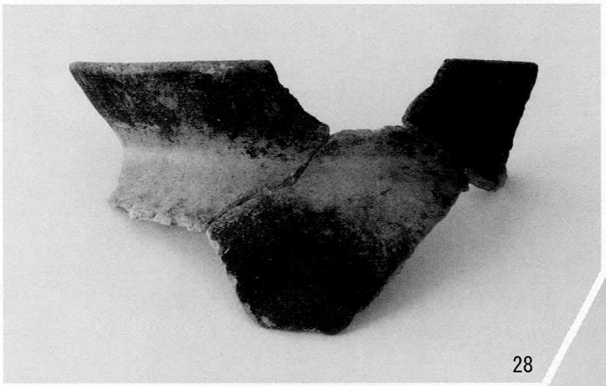
22

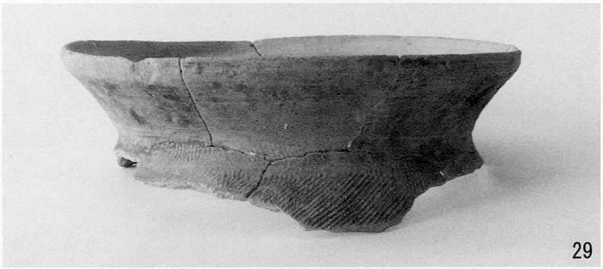
20


23


21


24


28


29

27

26

31

32

V　中田遺跡第53次調査（ＮＴ2011－53）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市刑部４丁目389番から391番までの各一部で実施した分譲住宅建設に伴う発掘調査報告書である。

1．本書で報告する中田遺跡第53次調査（ＮＴ2011－53）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づくもので、申請者と財団法人八尾市文化財調査研究会の間で、八尾市教育委員会を立会者として締結した契約により、財団法人八尾市文化財調査研究会が申請者から委託を受けて実施したものである。

1．調査は当調査研究会　坪田真一が担当した。

1．現地調査は、平成23年12月12・13日（実働２日）に実施した。調査面積は約15㎡である。

1．現地調査には梶本潤二・竹田貴子・田島宣子・永井律子・村田知子が参加した。

1．内業整理は下記が行い、現地調査終了後に着手して平成24年３月をもって終了した。

　遺物復元－梶本・竹田・田島宣子

　遺物実測－市森千恵子・山内千恵子

　遺物トレース－市森・山内

1．本書の執筆・編集は坪田が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……47

2．調査概要……48

　1）調査の方法と経過……48

　2）基本層序……48

　3）検出遺構と出土遺物……48

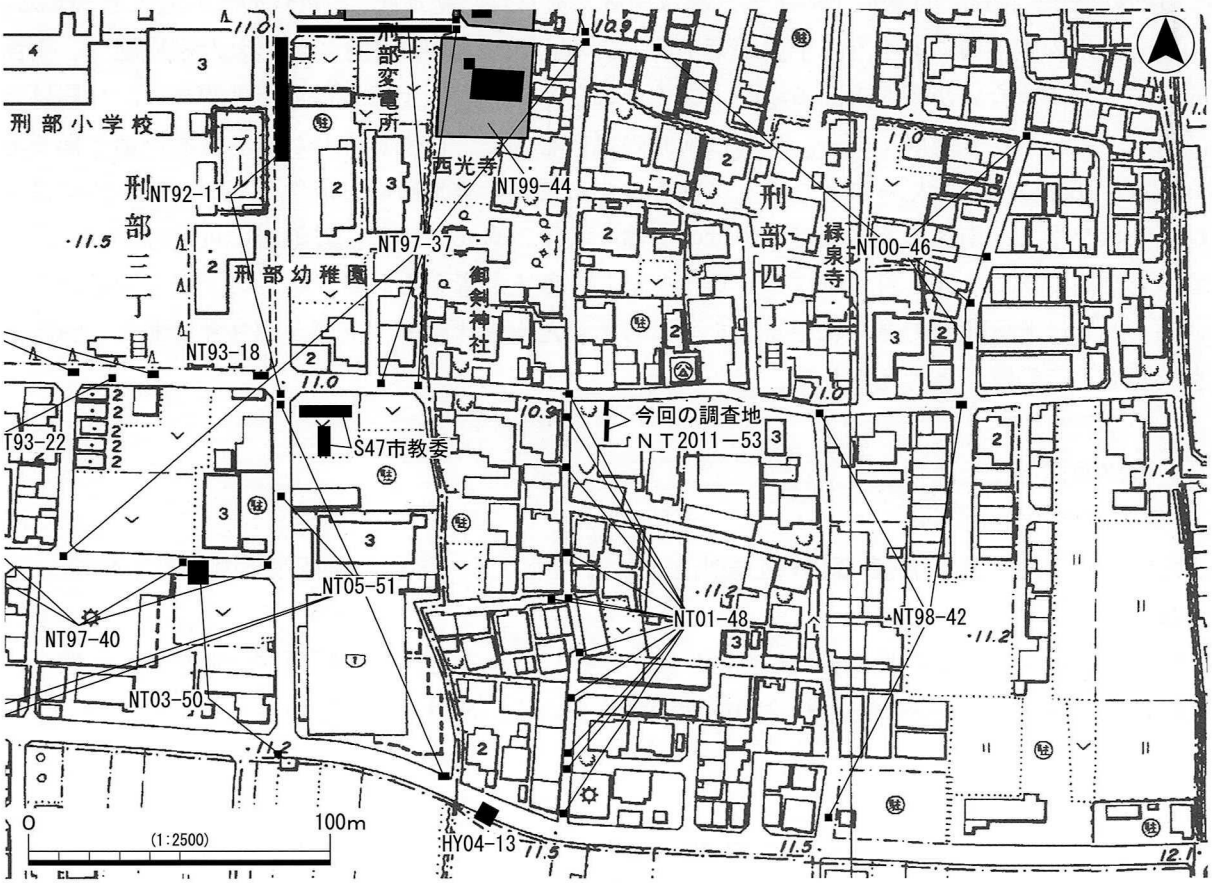
3．まとめ……53

Ⅴ　中田遺跡第53次調査（ＮＴ2011－53）

１．はじめに

中田遺跡は、八尾市のほぼ中央に位置し、現在の行政区画では中田１～５丁目、刑部１～４丁目、八尾木北１～６丁目がその範囲となっている。地理的には旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に立地し、北側で小阪合遺跡、西側で矢作遺跡、南側で東弓削遺跡に接している。当遺跡は、昭和45年の区画整理事業の際発見された遺跡で、以後中田遺跡調査会・中田遺跡調査センター・八尾市教育委員会・大阪府教育委員会・当調査研究会により調査が続けられている。これらの調査成果から、当遺跡は弥生時代中期～古墳時代前期を中心に、弥生時代前期～中世にわたる複合遺跡であることが確認されている。また同地形上に展開する東郷遺跡・小阪合遺跡等を包括して「東郷･中田遺跡群」と称されており、これらの遺跡は特に古墳時代初頭～前期において最盛期を迎えることが確認されている。

今回の調査地周辺では、北側道路上で第37次、東側道路上で第42次、西側道路上で第48次調査を、下水道工事に伴い実施している。第42次調査では古墳時代中期の古墳周溝と考えられる落ち込みを確認しており、多くの円筒・形象埴輪や、土師器・須恵器の集積を検出した。また第37次調査においても形象埴輪が出土している。第48次調査では弥生時代後期～古墳時代、中世の遺構･遺物を検出した。



第１図　調査地位置図

2．調査概要

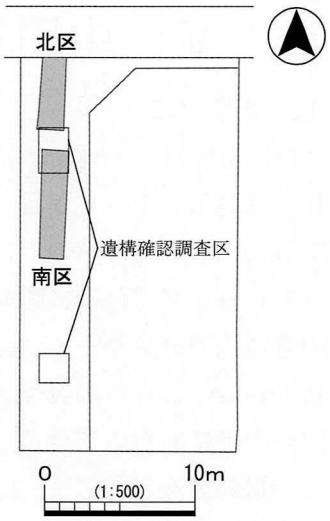
1）調査の方法と経過

今回の調査は、平成23年11月28日に実施した遺構確認調査〈中田遺跡(2011-378)〉の結果を受けて実施した分譲住宅建設に伴う調査で、当調査研究会が中田遺跡内で行った第53次調査(ＮＴ2011－53)である。

調査区は遺構確認調査区を挟んで南北に連なる２箇所(北・南区)で、北区が東西1.5m×南北3.0m、南区が東西1.5m×南北7.0mの長方形を成し、総面積約15㎡を測る。なお南区北部が遺構確認調査区と重複していたため、北区を約1.5m南に拡張した。

掘削は、現地表(約T.P.+10.7～11.1m)下約0.8mまでを機械掘削し、以下の約0.3mを人力掘削により調査を行った。ただし北区では下層で遺構が見られたため、現地表下約2.0mまで調査を行った。

調査で使用した標高の基準は、調査地北東部に位置する八尾市街区多角補助点〈1A255：T.P.+10.644m〉である。



第２図　調査区位置図

2）基本層序

０層は盛土・撹乱。０層直下の１～３層は南区で見られた整地層で、近代のごみ穴と思われる。４層も近年の整地層であろう。下面が第１面である。５～８層は北区で見られた水成層で、平面的には捉えていないが東西方向の流路、あるいは落ち込みの埋土である可能性が高い。９層は南区南端で見られた整地層である。10層は締りの悪い層相で、作土と思われる。上面が第１面である。11～16層は南区で見られ、ブロック状を呈する層相で整地層の可能性が高い。17～19層はブロック状を呈し、南区の北半部では中世の遺物を大量に含んでいる。整地層の可能性が高く、上面が第２面である。20・21層はブロック状を呈し、作土と考えられる。中世の土器を少量含んでいる。22層は北区北部で見られた暗色を呈する汚れた土壌化層で、上面が第３面である。23層は水成層で、河川堆積と考えられる。

3）検出遺構と出土遺物

〈第１面(T.P.+10.7m)〉

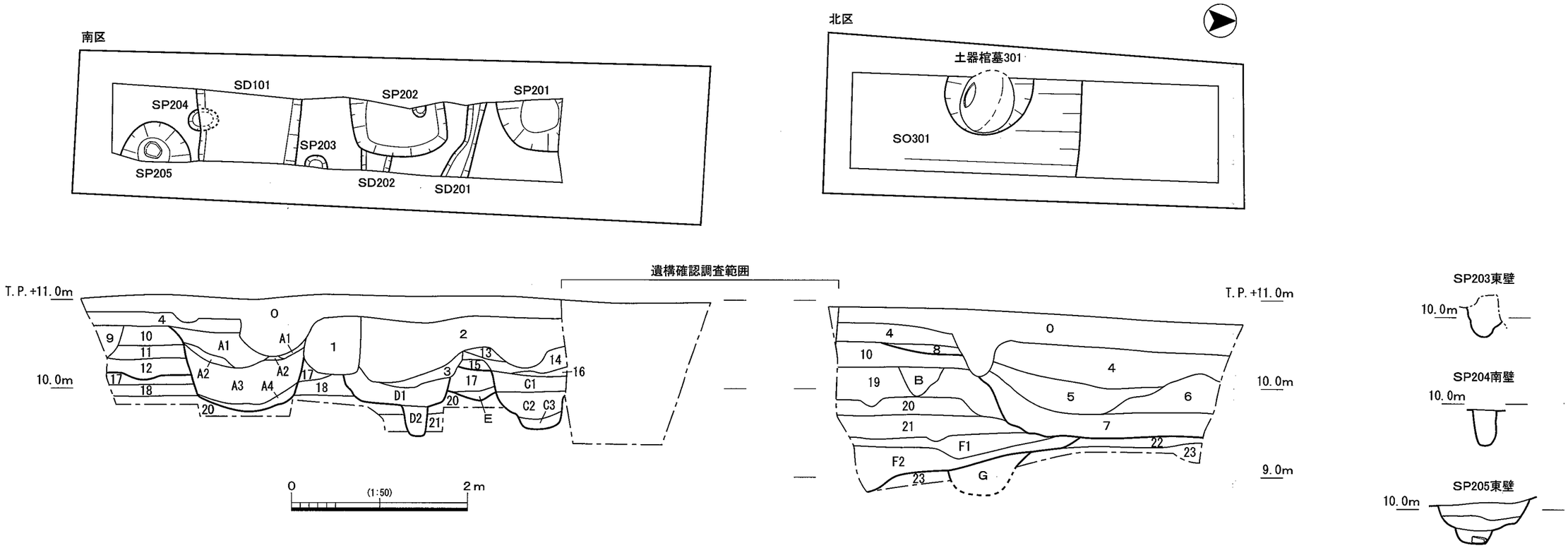
南区４層下面で溝１条(ＳＤ101)を検出した。また北区５～８層も遺構埋土の可能性がある。

ＳＤ101

東西方向の溝と考えられ、規模は幅約1.3m・深さ約1.0mを測る。断面逆台形を呈し、埋土は４層からなる水成層である。水路等の機能が考えられる。近世陶磁器等が出土した。

〈第２面(T.P.+10.2m)〉

南区17～20層上面でピット５基(ＳＰ201～205)、溝２条(ＳＤ201・202)を検出した。ピットは17～19層上面、溝は20層上面の構築である。また北区西壁においてもピット状の落ち込みが見られた。



０．盛土・攪乱
１．10YR4/1褐灰色シルト～粗粒砂互層
２．10YR5/2灰黄褐色細粒砂～極粗粒砂混シルト
３．10YR5/3にぶい黄褐色細粒砂～中粒砂混シルト
４．10YR5/2灰黄褐色細粒砂～極粗粒砂混粘土質シルト　整地層
５．10YR5/1褐灰色シルト～細礫　Fe斑　Mn斑　水成層
６．2.5Y6/2灰黄色極細粒砂～細粒砂混シルト　Fe斑　水成層
７．5GY5/1オリーブ灰色細粒砂～粗粒砂混シルト　ブロック状　水成層
８．10YR4/1褐灰色細粒砂～極粗粒砂　水成層
９．2.5Y4/1黄灰色細粒砂～極粗粒砂混シルト　整地層
10．2.5Y4/1黄灰色細粒砂～極粗粒砂少混シルト　炭　締まり悪い　作土？
11．2.5Y5/2暗灰黄色シルト質粘土～極粗粒砂ブロック混シルト　整地層？
12．2.5Y4/1黄灰色シルト質粘土～粗粒砂ブロック混シルト　整地層？
13．2.5Y7/2灰黄色シルト～極細粒砂
14．2.5Y5/1黄灰色極細粒砂～細粒砂混シルト　ブロック状　整地層？
15．10YR5/1褐灰色細粒砂混シルト　ブロック状　整地層？
16．10YR6/3にぶい黄橙色細粒砂～粗粒砂少混シルト質粘土　Fe斑
17．10YR6/2灰黄褐色極細粒砂～中粒砂少混粘土質シルト　ブロック状
18．10YR5/1褐灰色細粒砂少混粘土質シルト　ブロック状
19．2.5Y6/2灰黄色細粒砂～極粗粒砂少混シルト　ブロック状
20．2.5Y6/3にぶい黄色シルト　ブロック状作土？
21．2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト　ブロック状作土？
22．N3/0暗灰色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト　土壌化層
23．2.5Y5/3黄褐色細粒砂～極粗粒砂　水成層

ＳＤ101
A1．2.5Y5/2暗灰黄色極細粒砂～粗粒砂混シルト
A2．2.5Y6/3にぶい黄色極細粒砂～中粒砂
A3．2.5Y5/1黄灰色シルト～粗粒砂
A4．2.5Y6/1黄灰色シルト質粘土～極細粒砂

Ｂ．2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂～極粗粒砂混シルト

ＳＰ201
C1．10YR5/2灰黄褐色極細粒砂～細粒砂少混粘土質シルト　Fe斑　ブロック状
C2．2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂～粗粒砂少混粘土質シルト　Fe斑　ブロック状
C3．10YR5/1褐灰色細粒砂～粗粒砂少混粘土　ブロック状

ＳＰ202
D1．2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂～中粒砂混シルト　Fe斑　ブロック状
D2．2.5Y5/1黄灰色細粒砂～中粒砂混シルト質粘土　ブロック状

ＳＤ201
Ｅ．10YR5/1褐灰色細粒砂少混粘土質シルト　ブロック状

ＳＯ301
F1．N5/0灰色細粒砂～極粗粒砂混粘土
F2．N4/0灰色シルト混細粒砂～極粗粒砂

土器棺墓301
Ｇ．2.5GY3/1暗オリーブ灰色細粒砂～極粗粒砂混シルト質粘土　ブロック状

ＳＰ203
2.5Y5/1黄灰色細粒砂～粗粒砂少混シルト質粘土　ブロック状

ＳＰ204
2.5Y5/1黄灰色細粒砂～中粒砂混シルト質粘土　ブロック状

ＳＰ205
10YR5/2灰黄褐色極細粒砂～細粒砂少混粘土質シルト　Fe斑　ブロック状
2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂～粗粒砂少混粘土質シルト　Fe斑　ブロック状
10YR5/1褐灰色細粒砂～粗粒砂少混粘土　ブロック状

ＳＤ202
2.5Y5/2暗灰黄色粘土質シルト

第３図　平断面図

ＳＰ201

南東部のみの検出で詳細は不明である。規模は東西60cm以上・南北75cm以上・深さ約65cmを測る。断面逆凸状を呈し、埋土はブロック状の３層からなる。遺物は12世紀末～13世紀初頭に比定される土師器・瓦器・須恵器・中国製青磁が出土しており、１～３を図化した。１・２は瓦器椀である。共に内面に圏線状、見込みに粗い平行線状にヘラミガキを施すもので、外面には見られない。13世紀初頭頃に比定される。３は中国製青磁碗で、内面の施文は片切彫りによる。大宰府分類の龍泉窯系青磁椀Ⅰ－４類に当たり、12世紀後半に比定される。

ＳＰ202

東部のみの検出で詳細は不明であるが、平面形は方形に近いと考えられる。規模は東西60cm以上・南北105cm・深さ約65cmを測る。断面逆台形を呈し、底面の北部には直径約25cmを測る円形の柱痕が見られた。埋土はブロック状の２層からなる。12世紀末～13世紀初頭に比定される土師器・瓦器・須恵器・中国製青磁が出土しており、４を図化した。４は土師器皿で、12世紀後半に比定されよう。

ＳＰ203

西部のみの検出で詳細は不明であるが、平面形は円形と考えられる。規模は直径約35cm・深さ約45cmを測る。埋土はブロック状の単一層である。遺物は土師器皿片が１点出土した。

ＳＰ204

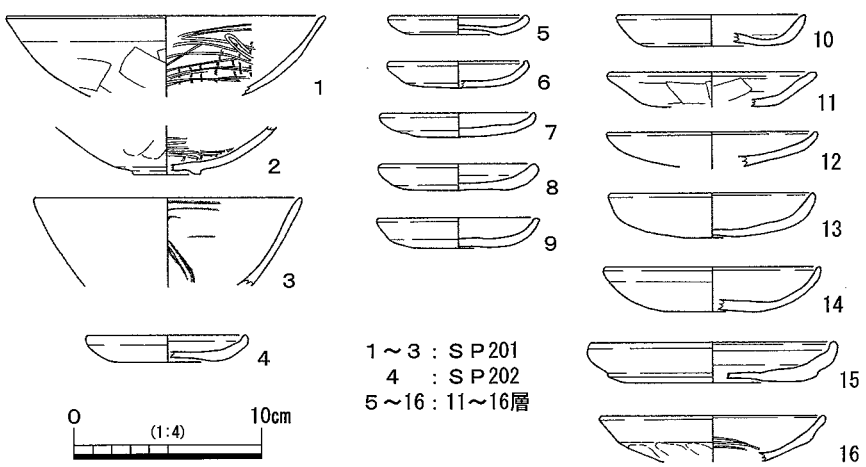
北部をＳＤ101に削平されており詳細は不明であるが、平面形は円形と考えられる。規模は直径約25cm・深さ約40cmを測る。埋土はブロック状の単一層である。土師器皿片が２点出土した。

ＳＰ205

西部のみの検出で詳細は不明であるが、平面形は円形に近いと考えられる。規模は東西45cm以上・南北105cm・深さ約50cmを測る。断面逆凸形を呈し、底部中央にはやや扁平な根石を据えている。埋土はブロック状の３層からなる。12世紀末～13世紀初頭に比定される土師器・瓦器が出土した。

ＳＤ201

東西方向に延び、規模は検出長85cm・幅15～30cm・深さ約10cmを測る。断面皿状を呈し、埋土はブロック状の単一層である。作土と考えられる20層上面検出であり、耕作関連の溝と考えられ



第４図　南区出土遺物

る。土師器皿・瓦器椀が出土した。

ＳＤ202

東西方向に延び、西部はＳＰ202に削平される。規模は検出長20cm・幅約30cm・深さ約10cmを測る。断面皿状を呈し、埋土は単一層である。ＳＤ201と同様、耕作関連の溝と考えられる。土師器片１点が出土した。

第２面出土遺物

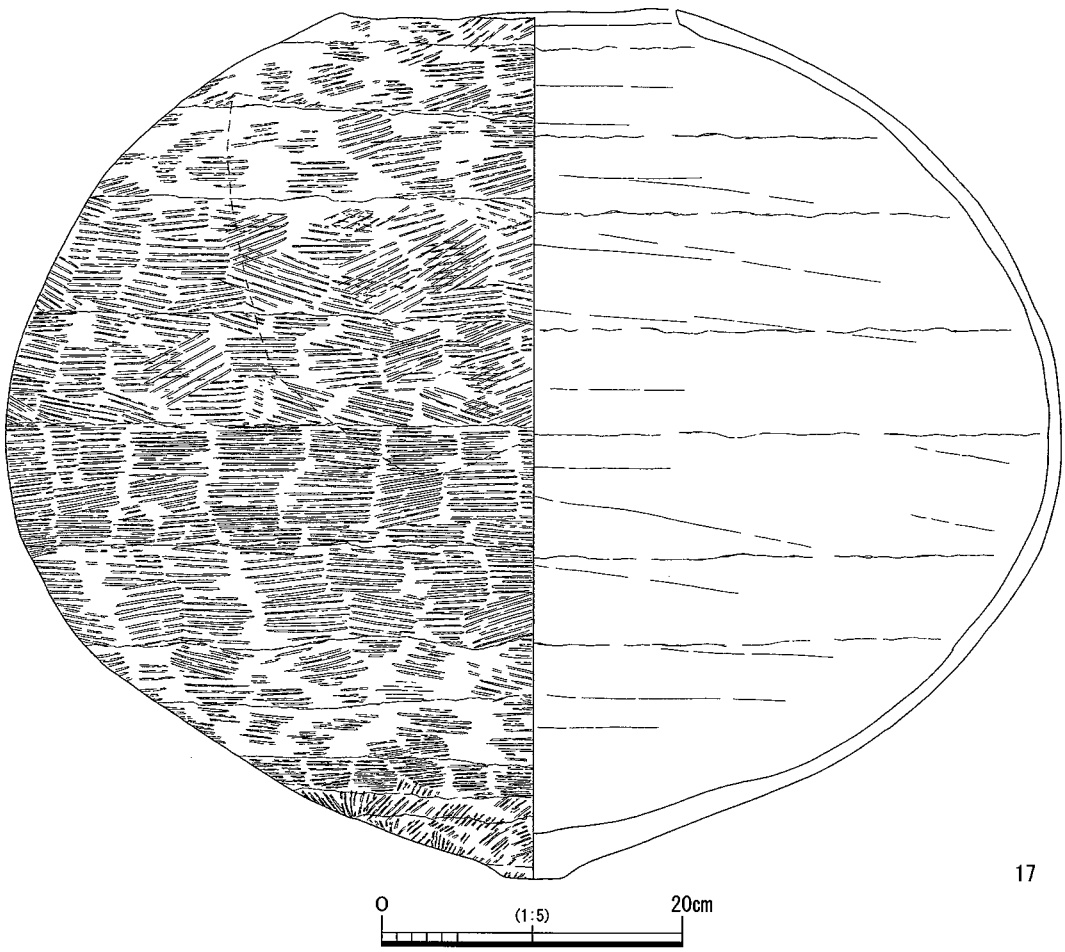
第２面検出時に11～16層から出土した遺物のうち、５～16を図化した。５～15は土師器皿である。法量的には５・６、７～９、10～14、15の４種類に分類できる。最も小形の５・６は焼成良好で硬質である。16は瓦器椀である。内面のヘラミガキは粗く、13世紀中葉に比定されよう。

〈第３面(T.P.+9.5m)〉

北区22層上面で落ち込み１基(ＳＯ301)、土器棺墓１基(土器棺墓301)を検出した。

ＳＯ301

東西方向に直線的に延びる肩から南になだらかに落ち込む状況で、深さ最大70cmを測る。埋土は２層からなり、下層は水成層の可能性がある。遺物は弥生時代後期頃に比定される土器片が少量出土した。



第５図　土器棺墓301出土遺物

土器棺墓301

ＳＯ301の肩から傾斜部を約１ｍ下がった地点で検出した。主体部は口頸部を打ち欠いた大形壺(17)で、南に傾けて埋置している。検出時には土圧のため肩部が内部に落ち込んでいた。内部から遺物等は出土しなかった。掘方は直径約1.0mの円形と思われ、深さは約50cmを測る。埋土はブロック状の単一層である。

17は最大径が体部のやや下位に位置する大形壺で、法量は体部最大径約70cm・底体部高57.6cm・頸部径22.4cm・底径4.0cmを測り、体部に比して底径が極めて小さい。調整は外面平行タタキ、内面横位のナデである。内外面の器壁には幅５～８cm程度の粘土紐接合痕が認められ、体部外面上位には黒斑を有する。生駒西麓産の胎土である。弥生時代後期に比定されよう。

３．まとめ

今回の調査では、弥生時代後期、中世、近世の遺構・遺物を検出した。遺物量はコンテナ３箱を数える。

第３面では北区で弥生時代後期の**土器棺墓301**を検出し、当地が墓域であったことを確認した。土器棺墓の存在から勘案して、落ち込みＳＯ301についても方形周溝墓の南辺である可能性がある。類例としては、北約１kmの小阪合遺跡第28次調査において、方形周溝墓・土器棺墓からなる墓域が確認されている。

第２面では南区で中世の遺構を検出した。下層では耕作関連溝、上層ではピット群があり、生産域から居住域へと移り変わっていることを確認した。整地層内には大量の土器が含まれていることから集落の中心である可能性がある。また遺構確認調査区では完形の土師器皿も多く出土しており、これらの土器は地鎮祭祀に伴う可能性もある。さらにピットには直径１ｍ程度を測るものや根石を有するものが見られ、大規模な建物の存在が推察される。

第１面では近世の水路と考えられる溝等を検出した。

参考文献

・古川晴久2000「Ⅸ　中田遺跡第37次調査（ＮＴ97－37）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告66』（財）八尾市文化財調査研究会
・坪田真一2000「ＸⅡ　中田遺跡第42次調査（ＮＴ98－42）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告65』（財）八尾市文化財調査研究会
・澁　斎2002「Ⅳ　中田遺跡第48次調査（ＮＴ2001－48）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告73』（財）八尾市文化財調査研究会
・河村恵理2008「Ⅰ　小阪合遺跡第28次調査（ＫＳ94－28）」『小阪合遺跡　財団法人八尾市文化財調査研究会報告116』財団法人八尾市文化財調査研究会
・樋口　薫2012「Ⅱ－３－33）中田遺跡（2011-378）の調査」『八尾市内遺跡平成23年度発掘調査報告書　八尾市文化財調査報告69　平成23年度国庫補助事業』八尾市教育委員会

図版1

調査地全景（北から）

南区　機械掘削（南から）

南区　全景（北から）

南区　ＳＤ101（東から）

南区　ＳＰ201・202西壁

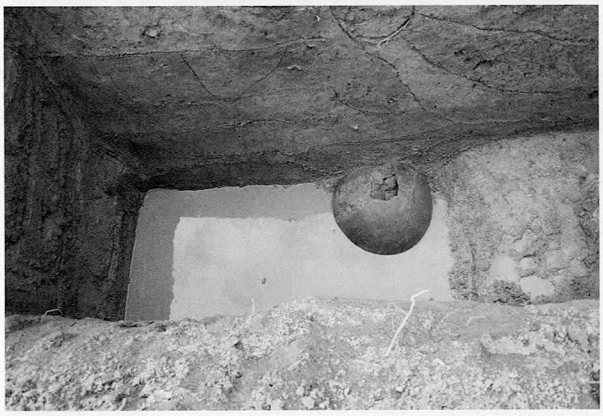
南区　ＳＰ202（東から）

南区　ＳＰ204（北から）

南区　ＳＰ205（西から）

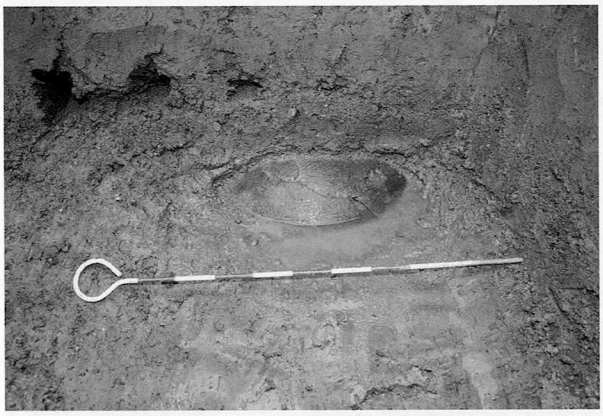
北区　機械掘削（北西から）

北区　全景（北から）



北区　ＳＯ301（東から）

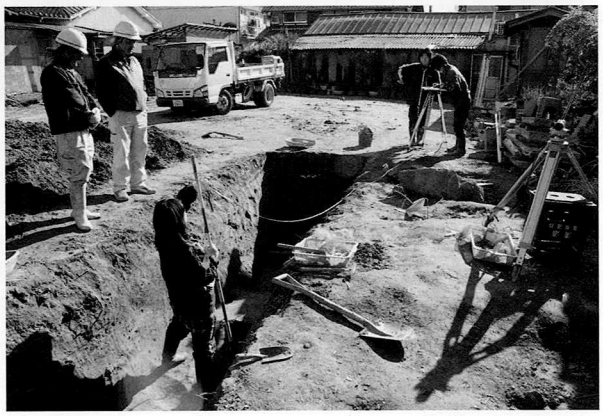
北区　ＳＯ301（南から）



北区　土器棺墓301検出（北から）

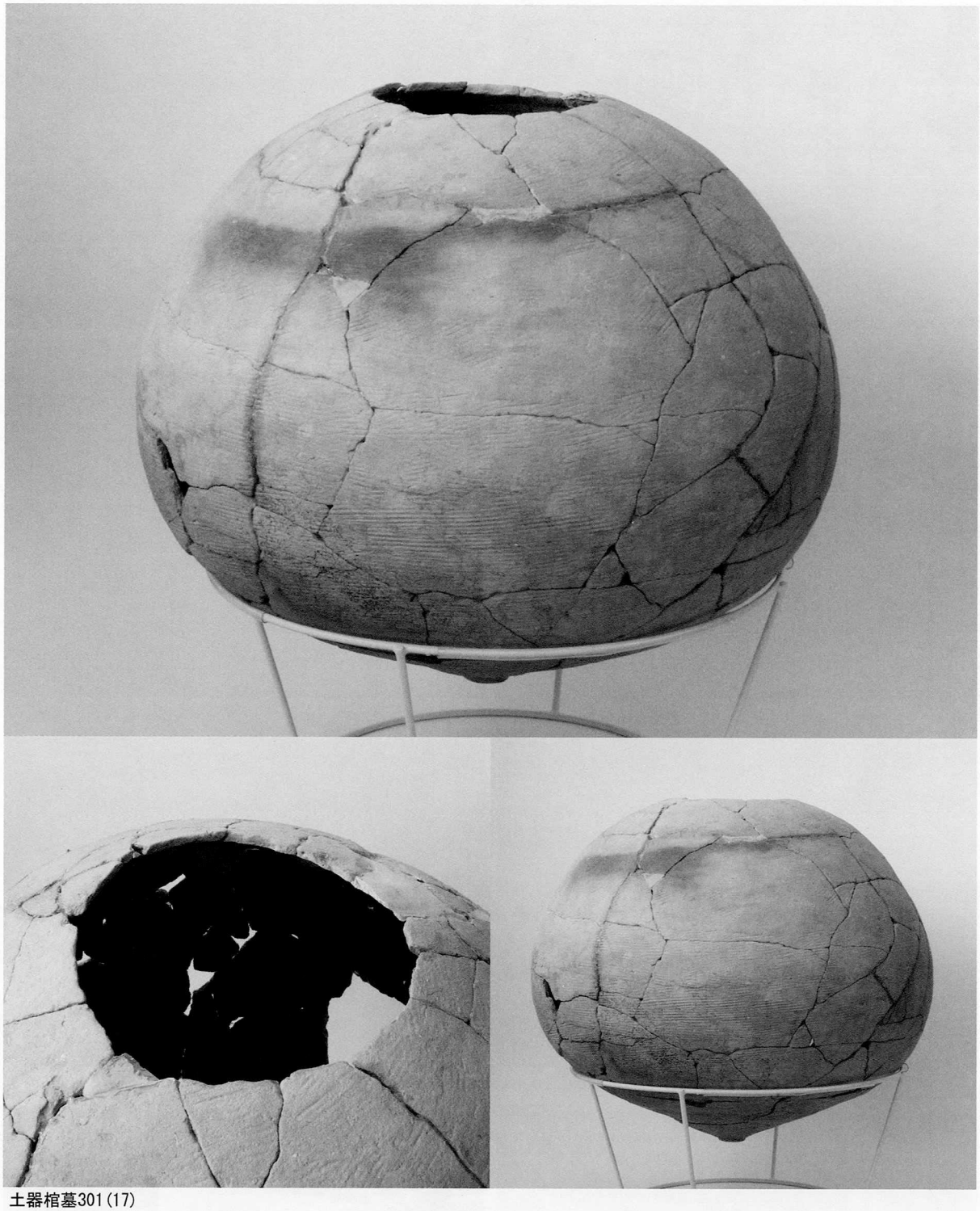
北区　土器棺墓301（北から）

北区　土器棺墓301（東から）



南区　調査状況（北西から）

図版3



土器棺墓301(17)

Ⅵ　中田遺跡第54次調査（ＮＴ2012－54）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市中田１丁目47番１及び47番２から47番４までの各一部で実施した分譲住宅建設に伴う発掘調査報告書である。

1．本書で報告する中田遺跡第54次調査（ＮＴ2012－54）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づくもので、申請者と公益財団法人八尾市文化財調査研究会の間で、八尾市教育委員会を立会者として締結した契約により、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が申請者から委託を受けて実施したものである。

1．調査は当調査研究会　坪田真一が担当した。

1．現地調査は、平成24年５月31日～６月１日（実働２日）に実施した。調査面積は約12㎡である。

1．現地調査には永井律子・村田知子が参加した。

1．内業整理は下記が行い、現地調査終了後に着手して平成26年３月をもって終了した。

　遺物復元・実測・トレース－山内千恵子

1．本書の執筆・編集は坪田が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……57

2．調査概要……58

　1）調査の方法と経過……58

　2）基本層序……58

　3）検出遺構と出土遺物の概要……58

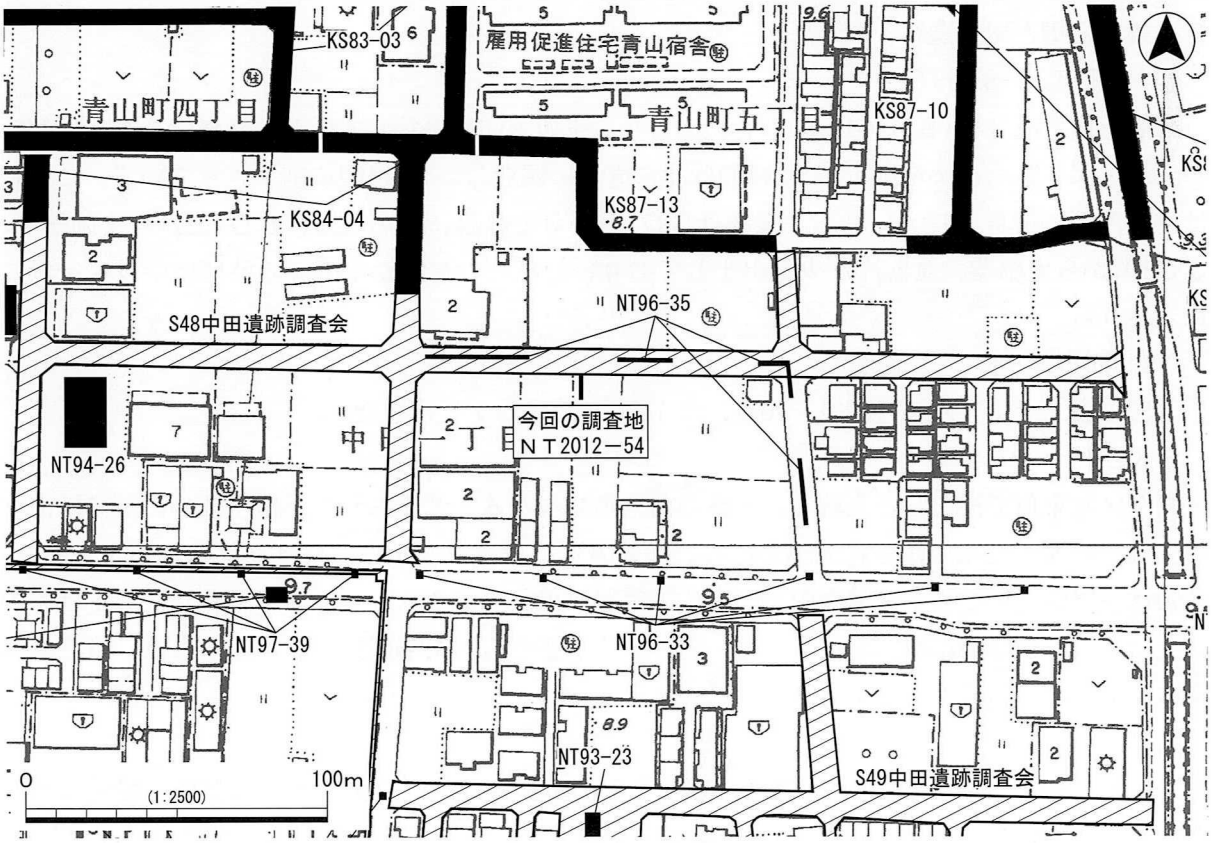
3．まとめ……62

Ⅵ　中田遺跡第54次調査（ＮＴ2012－54）

１．はじめに

中田遺跡は、八尾市のほぼ中央に位置し、現在の行政区画では中田１～５丁目、刑部１～４丁目、八尾木北１～６丁目がその範囲となっている。地理的には旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に立地し、北側で小阪合遺跡、西側で矢作遺跡、南側で東弓削遺跡に接している。当遺跡は、昭和45年(1970)の区画整理事業の際発見された遺跡で、以後中田遺跡調査会・中田遺跡調査センター・八尾市教育委員会・大阪府教育委員会・当調査研究会により調査が続けられている。これらの調査成果から、当遺跡は弥生時代中期～古墳時代前期を中心に、弥生時代前期～中世にわたる複合遺跡であることが確認されている。また同地形上に展開する東郷遺跡・小阪合遺跡等を包括して「東郷･中田遺跡群」と称されており、これらの遺跡は特に古墳時代初頭～前期において最盛期を迎えることが確認されている。

今回の調査地は中田遺跡北端にあたり、北側道路部分は区画整理事業に伴い中田遺跡調査会が調査を実施している他、下水道工事に伴い当調査研究会が第35次調査を実施している。また昭和56年(1981)に北西約40m地点で八尾市教育委員会が実施した調査では、古墳時代初頭(庄内式期新相)の土坑２基が検出され、他地域からの搬入土器を多く含む多量の土器が出土し、この資料については『中田１丁目39土坑出土土器』として、当該期の土器研究において標式資料と認識されている。



第１図　調査地位置図

2．調査概要

1）調査の方法と経過

今回の調査は、平成24年５月17・18日に実施した遺構確認調査〈中田遺跡(2012-16)〉の結果を受けて実施した分譲住宅建設に伴う調査で、当調査研究会が中田遺跡内で行った第54次調査(ＮＴ2012－54)である。

調査区は下水管路部分で、規模は東西1.5m×南北8.0m、面積約12㎡を測る。
掘削は、現地表(約T.P.+9.8m)下約0.9mまでを機械掘削し、以下約2.0mまでを人力・機械掘削併用により調査を行った。

調査では、調査地南西部に位置する八尾市街区多角点〈10D78：T.P.+9.818m〉を標高の基準とした。

2）基本層序

0A層は現作土、0B層は盛土・撹乱である。0B層は南部では現地表下1.5mまで及んでおり、１～４層は削平されている。１層は撹拌された作土である。２層は作土と考えられるが、固く締まる層相であることから整地層の可能性もある。下面が第１面である。３・４層は固く締まる土壌化層で、４層上面が第２面である。５層はやや撹拌が認められる土壌化層である。６層は北部で見られた河川堆積である。７～９層は粘土～シルトからなる静水性の水成層で、７層上面が第３面である。

3）検出遺構と出土遺物

〈第１面(T.P.+8.8m)〉

２層下面で溝３条(ＳＤ101～103)を検出した。東西方向に平行して延びる溝群で、規模は幅25～50cm・深さ５～15cmを測る。ＳＤ103は北に直角に屈曲し、ＳＤ102に削平されている。これらは耕作関連の溝群と捉えられる。遺物はＳＤ101から土師器、須恵器片、ＳＤ102から土師器片、ＳＤ103から土師器、瓦器片が少量出土しており、これらの遺物から溝群の時期は中世～近世に比定される。

〈第２面(T.P.+8.7～8.8m)〉

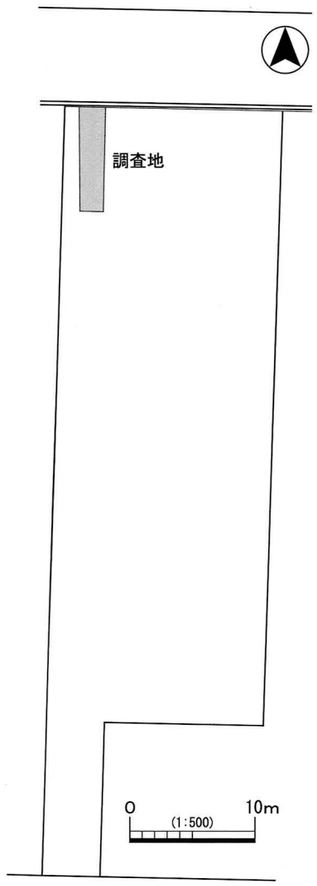
４層上面で土坑２基(ＳＫ201・202)、溝１条(ＳＤ201)を検出した。

ＳＫ201

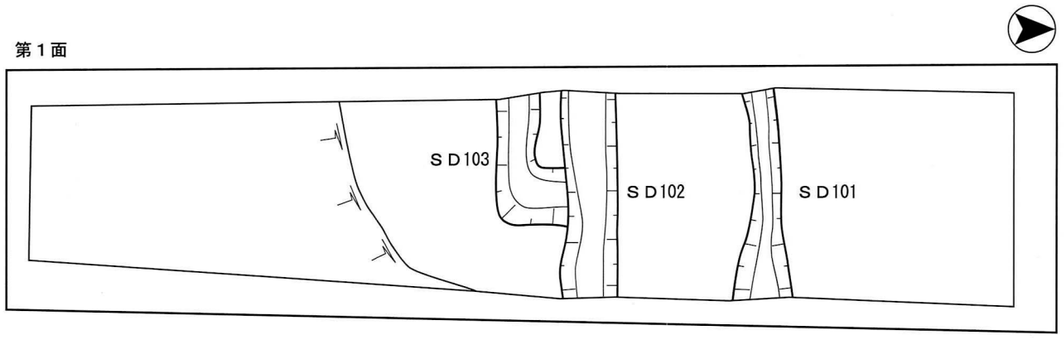
調査区北東角で検出した土坑で、遺構の南西角に当たると考えられる。検出部分の規模は南北約60cm・東西約80cm・深さ約50cmを測る。断面方形に近く、埋土はブロック状の３層からなる。遺物は古墳時代初頭後半～前期前半の古式土師器が出土しており、１・２を図化した。１は庄内式甕である。２は口縁端部を摘み上げ、肩の張る形態から、東部四国産と考えられる。遺構の時期は古墳時代前期前半に比定される。

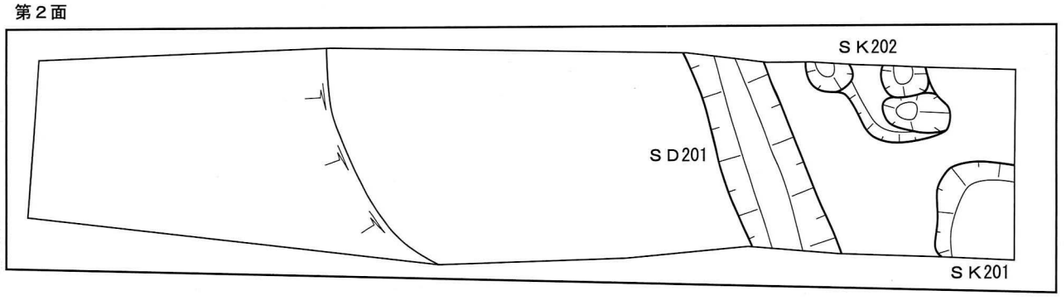
ＳＫ202

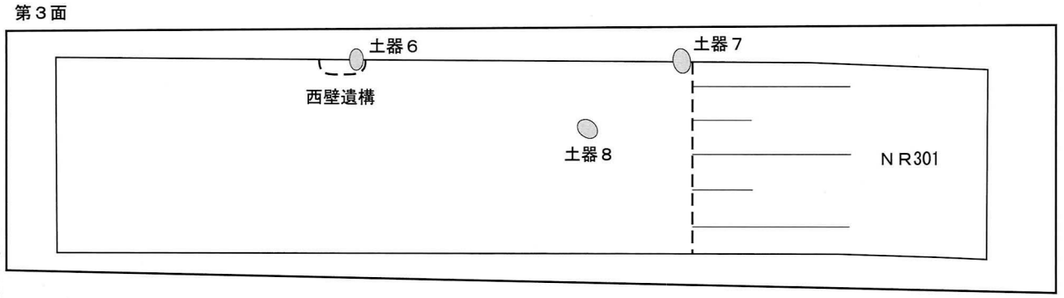
ＳＫ201南西部に位置し、西は調査区外に至るため全容は不明である。検出部分の規模は南北約1.2m・東西約60cm・深さ10～30cmを測る。土坑としたが底面でピット状の窪みが３箇所で認められ、ピットの重複部分である可能性が高い。埋土はブロック状の単一層である。遺物は土師

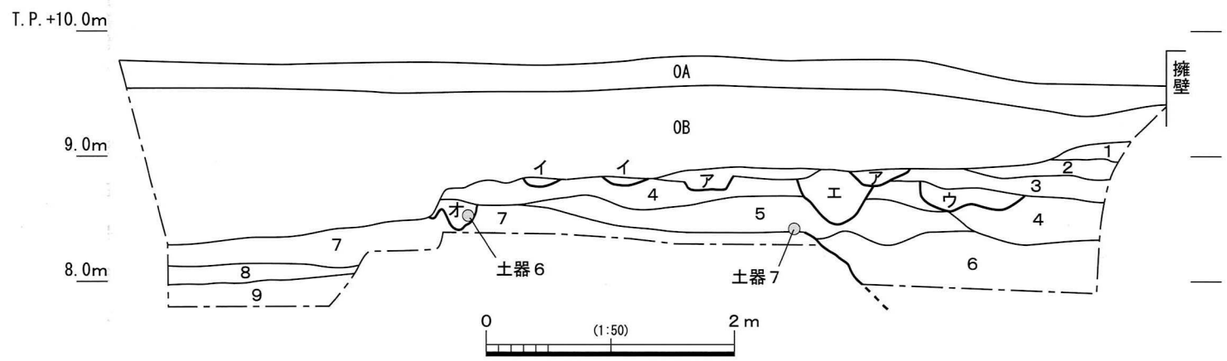


第２図　調査区位置図









第３図　平断面図

ＳＫ201
カ．10YR3/2黒褐色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト　ブロック状
キ．2.5Y5/1黄灰色極細粒砂～細粒砂混シルト　ブロック状
ク．10YR5/1褐灰色粘土質シルト～細粒砂ブロック

0A．現作土
0B．盛土・撹乱
１．2.5Y6/2灰黄色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト　作土
２．10YR6/3にぶい黄橙色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土　固く締まる
３．10YR3/1黒褐色細粒砂～極粗粒砂多混シルト質粘土　固く締まる土壌化層
４．10YR4/2灰黄褐色細粒砂～細礫多混シルト質粘土　固く締まる土壌化層
５．10YR5/3にぶい黄褐色細粒砂～粗粒砂ブロック混粘土質シルト　土壌化層
６．10YR6/3にぶい黄橙色シルト質粘土～極粗粒砂互層　水成層
７．10YR6/3にぶい黄橙色シルト　水成層
８．2.5GY5/1オリーブ灰色粘土質シルト　水成層
９．2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土　水成層

ＳＤ101・102
ア．2.5Y6/1黄灰色細粒砂～極粗粒砂混シルト質粘土　ブロック状
ＳＤ103
イ．10YR5/1褐灰色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土　ブロック状
ＳＫ202
ウ．10YR4/2灰黄褐色シルト質粘土ブロック混細粒砂～極粗粒砂
ＳＤ201
エ．10YR4/1褐灰色細粒砂～粗粒砂多混粘土質シルト　ブロック状
西壁遺構
オ．10YR4/1褐灰色シルト・細粒砂ブロック混粘土　ブロック状

器片があり、古墳時代中期に比定される製塩土器片を含んでいる。

ＳＤ201

北東－南西方向に直線的に延びる溝で、規模は検出長約1.6m・幅約65cm・深さ30～40cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土はブロック状の単層である。遺物は古墳時代中期後半に比定される土師器・須恵器が出土しており、３を図化した。３は須恵器杯蓋で、外面全体に薄く灰が被る。５世紀後半のＴＫ23～ＴＫ47型式に比定される。

第２面出土遺物

第２面遺構検出時に出土した４・５を図化した。４は須恵器杯身で、ＳＤ201出土の３と同様、５世紀後半のＴＫ23～ＴＫ47型式に比定される。５は古式土師器甕で、肩部外面調整はハケである。古墳時代初頭後半の布留式傾向甕である。淡灰黄色の胎土で、搬入品の可能性がある。

〈第３面(T.P.+8.4～8.6m)〉

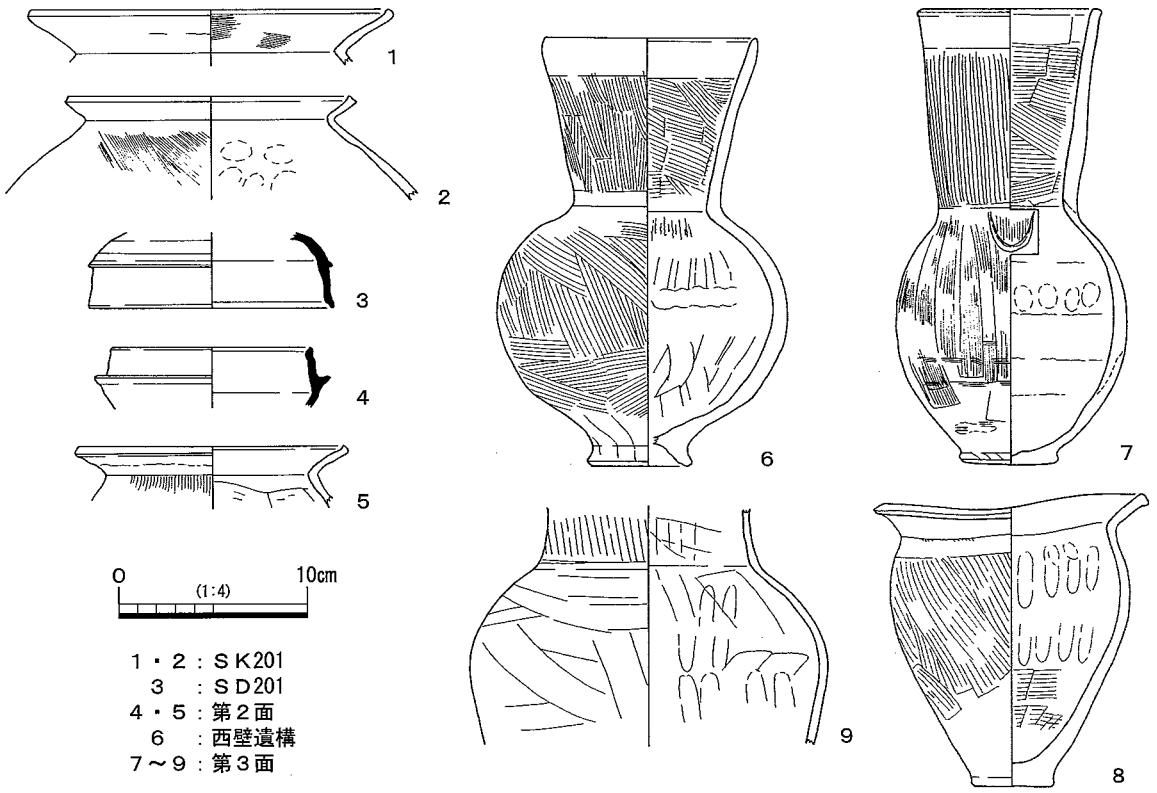
７層上面で自然河川１条(ＮＲ301)を、また西壁面においてピット状の遺構(**西壁遺構**)を検出した他、完形に近い土器２点(７・８)を検出した。

ＮＲ301

東西方向の自然河川と考えられ、南肩を確認した。規模は幅2.5m以上・深さ0.5m以上を測る。埋土はシルト質粘土～極粗粒砂互層(基本層序６層)である。層位的に弥生時代後期頃までは機能していたと考えられる。

西壁遺構

南北約40cm・深さ約25cmを測るピット状の遺構で、埋土はブロック状の単一層である。遺物は



第４図　出土遺物

弥生時代後期前半に比定される長頸壺１点（６）が出土した。６は口径11.4cm・器高22.6cmを測るもので、口頸部はやや開き気味である。調整は口縁部ヨコナデ、頸部ハケ、体部外面ハケ、体部内面ナデである。肩部に直径５cm程度の円型の黒斑を有する。

第３面出土遺物

７～９を図化した。７は口径9.8cm・器高24.0cmを測る長頸壺で、口頸部は直立気味である。調整は口縁部ヨコナデ、頸部ハケ、体部外面ハケ後ナデ、体部内面ナデである。肩部最上位にＵ字状のヘラ記号を施す。８は口径14.5cm・器高15.0cmを測る甕で、体部最大径は上位に位置する。調整は口縁部ヨコナデ、体部は外面板ナデ、内面上位ナデ、下位板ナデである。外面は全体に薄く煤けるほか、器壁の剥離が顕著に認められる。９は壺の頸部～肩部である。調整はナデを基調とし、頸部外面は縦位ヘラミガキである。

３．まとめ

今回の調査では、弥生時代後期、古墳時代前期・中期末、中世～近世の遺構・遺物を検出した。遺物量はコンテナ１箱を数える。

第３面では弥生時代後期、また第２面では古墳時代前期・中期末の遺構を検出した。

弥生時代後期については、第35次調査で当地より東部の調査区において遺物包含層を確認しており、付近一帯に集落域が広がっているものと捉えられる。

古墳時代前期では西部の『中田１丁目39土坑』をはじめ、第35次調査においても溝から多量の土器が出土しており集落の中心といえよう。これらの調査では他地域産の土器が多く出土しており、活発な地域間交流が窺えるが、本調査においても東部四国産と考えられる土器の出土が見られた。

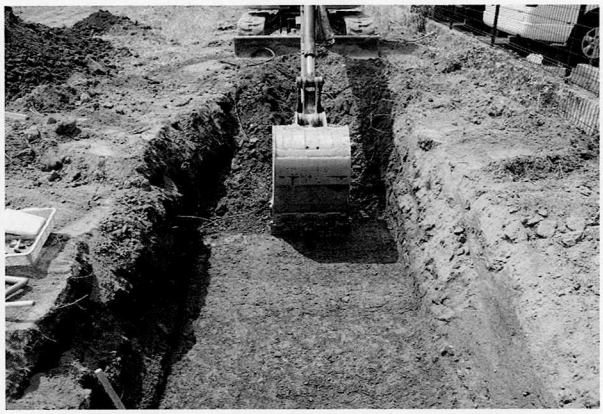
古墳時代中期末では土坑・溝を検出した。第35次調査の西部・東部調査区では北西－南東方向の溝を検出しているが、当地はその延長線上に当たっており、これらが有機的に関連する遺構群である可能性が高い。

第１面では中世～近世の耕作関連溝が検出され、中世以降、当地が生産域であったことを確認した。

参考文献

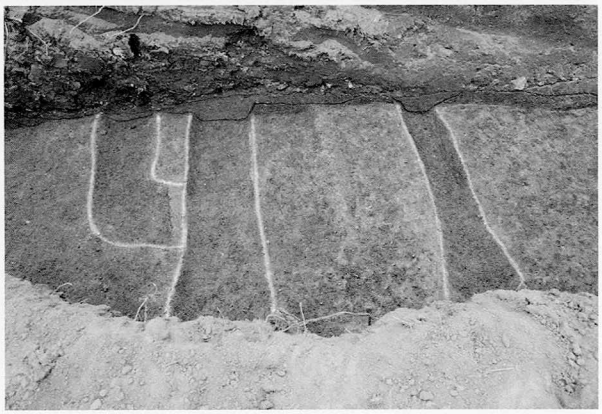
・中田遺跡調査会『中田遺跡《北区》発掘調査概要』
・米田敏幸1986「中田１丁目39番地出土土器」『八尾市文化財紀要２』八尾市教育委員会文化財室
・坪田真一・木村健明2009「Ⅲ　中田遺跡第35次調査（ＮＴ96－35）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告126』財団法人八尾市文化財調査研究会

調査地（北から）



機械掘削（北から）

第１面（北から）

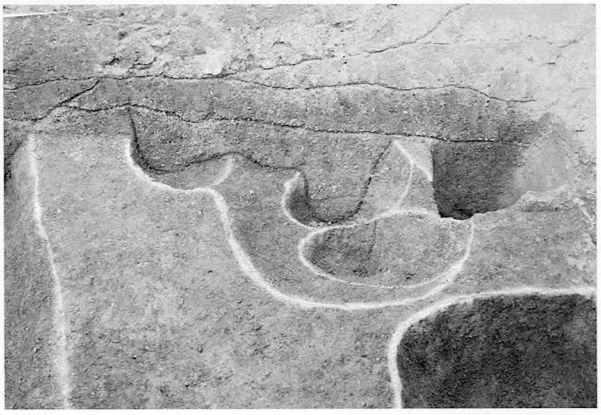


第１面（東から）

第２面（北から）

第２面（東から）

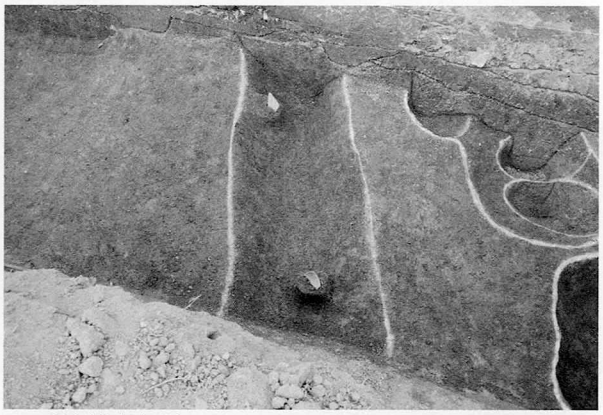
ＳＫ201（西から）



ＳＫ202（東から）

図版2

ＳＤ201検出（東から）



ＳＤ201（北東から）

ＮＲ301西壁

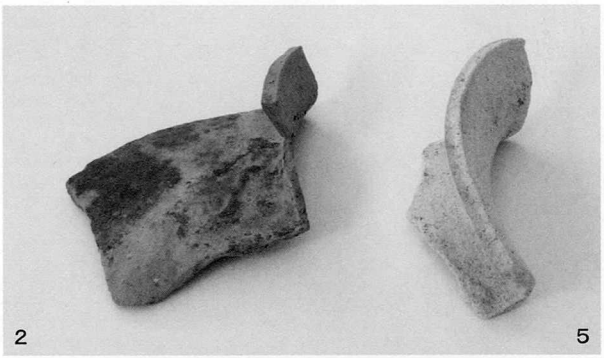
西壁遺構（土器６）

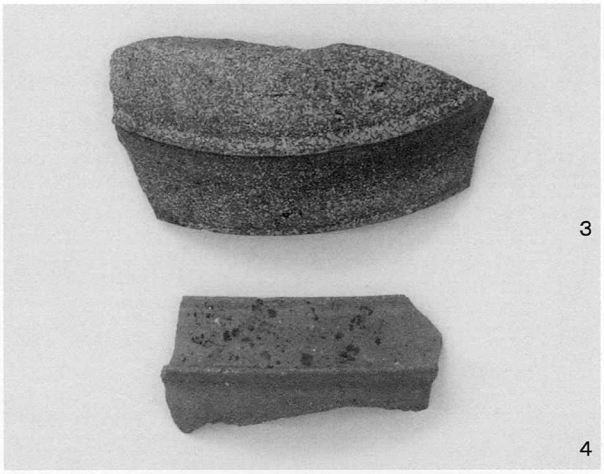
土器７（東から）

土器８（南東から）

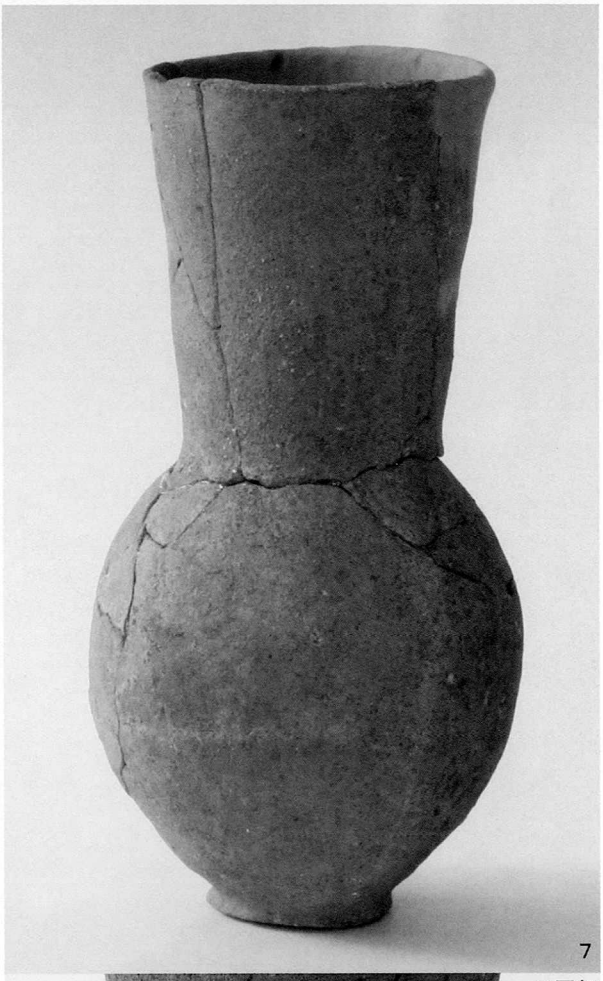
西壁

調査状況（北西から）


2
5


3
4

6


7

8

7肩部

報　告　書　抄　録

ふりがな	あとべいせき　おいばらいせき　かやふりいせき　なかたいせき
書　　名	跡部遺跡　老原遺跡　萱振遺跡　中田遺跡
副 書 名	
シリーズ名	公益財団法人八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	144
編 著 者 名	坪田真一
編 集 機 関	公益財団法人八尾市文化財調査研究会
所　在　地	〒581－0821　大阪府八尾市幸町四丁目58－２　TEL・FAX　072－994－4700
発行年月日	西暦2014年３月31日

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
跡部遺跡（あとべいせき） （第42次調査）	大阪府八尾市春日町１丁目（おおさかふやおしかすがちょう１ちょうめ）	27212	64	34度 37分 09秒	135度 35分 22秒	20120217 ～ 20120224	約62.5	記録保存調査 共同住宅建設
老原遺跡（おいばらいせき） （第14次調査）	大阪府八尾市東老原２丁目（おおさかふやおしひがしおいばら２ちょうめ）	27212	38	34度 36分 23秒	135度 36分 25秒	20120910 ～ 20120921	約95.5	記録保存調査 電力管埋設
萱振遺跡（かやふりいせき） （第29次調査）	大阪府八尾市緑ヶ丘１丁目（おおさかふやおしみどりがおか１ちょうめ）	27212	65	34度 38分 07秒	135度 36分 27秒	20130513 ～ 20130517	約70.5	記録保存調査 保育所建設
中田遺跡（なかたいせき） （第52次調査）	大阪府八尾市八尾木北２丁目（おおさかふやおしやおぎきた２ちょうめ）	27212	28	34度 36分 55秒	135度 36分 50秒	20110926 ～ 20110930	約23	記録保存調査 寄宿舎建設
中田遺跡（なかたいせき） （第53次調査）	大阪府八尾市刑部４丁目（おおさかふやおしおさかべ４ちょうめ）	27212	28	34度 36分 46秒	135度 37分 12秒	20111212 ～ 20111213	約15	記録保存調査 分譲住宅建設
中田遺跡（なかたいせき） （第54次調査）	大阪府八尾市中田１丁目（おおさかふやおしなかた１ちょうめ）	27212	28	34度 37分 09秒	135度 36分 48秒	20120531 ～ 20120601	約12	記録保存調査 分譲住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構・地層	主な遺物	特記事項
跡部遺跡 （第42次調査）	集落	古墳時代中期	土器集積	土師器、須恵器	
老原遺跡 （第14次調査）	集落	弥生～古墳時代中期 中世～近世	自然河川 溝	弥生土器、土師器 土師器、須恵器、瓦器	
萱振遺跡 （第29次調査）	集落	古墳時代前期 奈良時代 中世	溝 溝、落ち込み 土坑、溝	古式土師器 土師器、須恵器	
中田遺跡 （第52次調査）	集落	古墳時代前期 古墳時代後期 中世	遺物包含層 古墳 井戸、ピット	古式土師器 埴輪 土師器、瓦器	
中田遺跡 （第53次調査）	集落	弥生時代後期 中世 近世	土器棺墓 ピット、溝 溝	弥生土器大形壺 土師器、瓦器 陶磁器	
中田遺跡 （第54次調査）	集落	弥生時代後期 古墳時代前期 古墳時代中期	ピット、包含層 土坑 土坑、溝	弥生土器 古式土師器 土師器、須恵器	

要　　約	中田52次では後期古墳の周溝と考えられる落ち込み、また中田53次では弥生時代後期の大形壺を主体部とする土器棺墓を検出した。

公益財団法人八尾市文化財調査研究会報告144

Ⅰ 跡部遺跡(第42次調査)
Ⅱ 老原遺跡(第14次調査)
Ⅲ 萱振遺跡(第29次調査)
Ⅳ 中田遺跡(第52次調査)
Ⅴ 中田遺跡(第53次調査)
Ⅵ 中田遺跡(第54次調査)

発　行　平成26年３月
編　集　公益財団法人八尾市文化財調査研究会
〒581－0821
大阪府八尾市幸町四丁目58番地の２
TEL・FAX 072－994－4700

印　刷　㈱近畿印刷センター
表　紙　レザック66　<260Kg>
本　文　マットコート　< 70Kg>
図　版　マットコート　< 70Kg>